

---

# KAGUYA ～別にあなたの為に月に帰るんじゃないんだからねっ！～

かじゅぶ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

KAGUYA 〽別にあなたの為に月に帰るんじゃないんだからねっ！〽

### 【Nコード】

N3926V

### 【作者名】

かじゅぶ

### 【あらすじ】

月の裏側に存在する王国メシャム。はるか昔、人類を作りだした創造主達の国である。そこでは日本のアニメが空前の大ブームとなっており、彼らは大いなる平和を満喫していた。しかし王太子の謀反により内乱が勃発。彼らの平和は突如として終息を告げる。結果、国王は戦死。内親王はNASAへの亡命を余儀なくされるが、脱出途中、時空震に巻き込まれてタイムスリップ。たどり着いた先は奈良時代の日本であった。そこで讃岐造麻呂に拾われ一時の平穩を取

り戻す内親王ではあったが、その平穩も長くは続かなかつた。

## ブローグ

### 創造主。

遙かなる昔、高度に発達した遺伝子工学によって人類を作り出した者達である。

現在、彼らは月の裏側にある月面都市と、その上空六万一千五キロメートル、地球と月の重力が織りなすラグランジュポイントのひとつであるL2ポイントに数百にも及ぶコロニー群を築きあげ、一大国家を形成していた。

チャーチワーデン朝メシヤム王国。それが彼ら創造主達の国である。

彼らの存在を知るものは、地球ではNASAの上層部などごく一部の人間だけであろう。

そんな彼ら創造主達の中で、ここ数十年来、爆発的な大ブームとなっているものがあつた。

社会現象にすら発展し、もはや彼らの生活からは切っても切り離せないもの。

それは日本のアニメである。

当初、彼らはその卓越したソフトウェア・テクノロジーにより、アニメ音声をリアルタイムで自動翻訳して放映していた。それはそれで素晴らしい技術と言えるであろうが、創造主達に不満がなかったわけではない。その音声は限りなく棒読みに近く、また、彼らの言語は簡潔に過ぎ、文学的表現力に乏しかったのもその一因である。NASAに相談したところ、字幕での対処を提案してきたが、それは事態の解決になんら寄与するものではなかった。

そもそも彼らの言語は地球の英語圏のそれと同じく字幕には不向きであり、何より文学的表現力の欠如がこの際はネックだったのである。字幕にしたところでその欠点は補いようもなく、ましてや近年、更なる進化を続ける日本語に対応するのは困難と言わざるを得

ない。『萌え』や『ツンデレ』をどう訳せばよいと言うのか。彼らの悩みは深刻であった。

そこで創造主達は考えた。そしてある結論に至る。

「そうだ！ 日本語を覚えてしまえばいいのだ！」

最初にそう考え、このコロンブスの卵を孵化させたのは、メガネっ娘萌えの急先鋒として有名な、当時、宇宙軍第三艦隊に所属する通信参謀だった、ツバイス・ラ・グロリア子爵であったと伝えられているが、真偽のほどは定かではない。

何はともあれ、ひとつの方向性が示された時、彼らの行動は敏速であった。日本語は幼年学校の必須科目となり、あちこちに日本語学校が設立され、宇宙港前留学は長蛇の列をなす。

結果、現在では創造主達の若者の実に九十九パーセントが日本語を解する時代となっていた。翻訳なしで日本のアニメを堪能できる時代が到来したのである。

彼ら創造主達の世はまさに平和だった。平和なはずだった。

しかしその平穏を揺さぶる深刻な事態が突如として彼らの頭上に舞い降りたのは、王歴四一二五年。西暦二〇一一年の事であった。

世に言う王太子の乱である。

## 第一話

「エグゼル王太子謀反！ 軍及び政府の主要機関はことごとく反乱軍の占拠するところとなれり！」

宇宙軍第六艦隊分艦隊司令官、フェイ・トリニダッド准将がこの急報に接したのは、月面にある王都エネオポリスへと向かう小型連絡艇の中であった。軍務省憲兵局にあるセクハラ委員会より出頭を命ぜられ、多すぎる心当たりで辟易しつつ不景気な面を王都へと運ぶ途上だったのである。

しかしこの事態により急遽転進。乗艦である戦艦フェロモンへの帰途を余儀なくされていたのであるが、フェイとしては些か複雑な心境であった。

「誰かこの憐れな子羊をセクハラ委員会の魔の手より救い出してくはくれんもんかと期待してはいたが……、これはちと素直に喜べんな」

「誰が憐れな子羊ですか！ 加害者が被害者面するんじゃないません！」

そう言ってフェイを睨んだのは同行していた副官、ドロシー・ナットシャーマン大尉である。彼女はフェイの好色そうな視線から太股を守護せんと、短いスカートの裾を握って、膝近くまで伸ばして座っていた。

もつとも創造主、地球人を問わず、世の男どもからすれば露わな太股を見せつけられるよりも、女性のそういった仕草を見ている方がよほど萌えるというものである。むろん、創造主にしては珍しい黒い髪と黒い瞳を持つこの青年提督とて例外ではない。

しかし萌えてばかりもいらぬこの状況。

「なんと王太子が謀反とはな。そのような暴挙に出ずとも、いずれは正当なる王位継承によって王冠をその頭上に戴き得たであろうに」「まさかあの噂をお信じになられたのでは？」

「あれか……」

その噂とは、最近まことしやかに流布されているものであった。

その内容は、エグゼル王太子を廃嫡し、リディア内親王に王位を譲らんとする意向を、国王が諸大臣に洩らしたというものである。しかしそれは、フエイなどからすればまさに噴飯ものであった。

「ふん、愚にも付かん」と話さな。民衆の願望が作りだした幻想にすぎん」

「リディア様は人気者ですものね」

ドロシーの言うとおり、目に見える事実として、創造主達からの人気はエグゼル王太子よりもリディア内親王の方が遙かに高い。エグゼルは無能ではないが、良くも悪くも凡庸に過ぎ、内向的な性格とパツとしない風貌とが相まって、見る者に暗い印象を与える。一方でエグゼルの異母妹であるリディアは絶世の美女、とまではいかないまでも、まず美人と言って大過ない容姿を有しており、何よりも居るだけで場を明るくする快活な性格がエグゼルとは対照的であった。些か気が強いのが玉に瑕ではあるが、それはそれでツンデレ萌えの創造主達からは絶大な支持を寄せられている。国務省の試算によれば、男性創造主達の実に半数近くがツンデレ萌えであるとの統計が出ている昨今、リディアの人気が如何に大きいかは想像出来よう。

だが、しかし　とフエイは断ずる。

「だからと言って、なんの落ち度もない王太子を廃嫡など出来ようはずがない。そもそも女性に王位を譲るなど他の王族方も賛成すまいし、何より王太子の外戚であるアップマン公爵家が黙ってないだろう」

「確かにそうですわね」

「噂はあくまでも噂に過ぎんさ」

「でも今、問題にすべきは噂の真偽にあるのではなく、王太子殿下がそれをお信じになられたか否かにあるのではありませんか？」

「今さら問題にしても詮無いことだが、まあこうなってみると疑心

暗鬼に陥った殿下が噂を信じ込んでしまったと見るべきかもしれない」

苦々しげにそう言った後、フェイは不意に表情を曇らせた。

「しかしこの噂、どうも気にかかる。誰かが故意に流したものだとするれば……。これは何か裏があるかもしれないぞ」

この時、フェイは必ずしも自身の発言を支持しているわけではなかった。ただ漠然とした不安が脳裏を過ぎったにすぎず、我ながら深読みも度が過ぎる。と、その表情を苦笑で塗り替えたものである。もつとも、その苦笑も一秒足らずで塗り替えられる事となるのだが。

「私のお尻から手をどけて下さい！」

痛烈な平手打ちがフェイの右頬に炸裂した。

後にフェイはこの時の会話を憮然と思い出す事になる。尻の感触と共に。頬の痛みと共に。

フェイの所属する宇宙軍第六艦隊は、現在、月と地球の中間地点であるFL-D3ポイントに集結。ここを戦場に設定すべく陣形を整えつつあった。フェイが指揮する分艦隊も当然ながらその一翼を担っている。

フェイ達はその宙域へたどり着き、旗艦である戦艦フェロモンの後部ハッチに着艦したのは、フェイの頬の色が左右の均衡を取り戻してしばらく後の事であった。

この戦艦フェロモンは元の艦名をカピートというが、フェイの旗艦となった時に若干の改造が加えられ、艦名もその時に変更されたのであった。その理由は小型連絡艇から降り立ったフェイが満足げに言い放ったこのセリフにある。

「フェロモンよ！ 私は帰って来た！」

そう、彼はこれが言いたいが為に艦名を変更したのである。はっきり言ってバカであるが、こういったバカは現在の創造主達の中に



は数多い。

重力制御エレベーターで艦橋に上がったフェイを艦隊参謀のレイ・ロッキーパテル大佐が出迎えた。この艦橋スタッフではフェイを除けば唯一の男性である。他は全て若い女性の士官や下士官であり、この人選は当然ながら司令官のフェイであった。

急場の司令官代理であつたレイは、残念そうに肩をすくめて上官を出迎えた。

「もう少し司令官席の眺めを堪能したかったですね」

「まあ次の機会を待っていてくれ。艦隊の指揮を引き継ぐ」

「はっ、艦隊の指揮権をお返しいたします」

本来、旗艦の司令官席ともなれば、艦橋フロアの後方一段高いところに設えられているのが常であるが、このフェロモンは違った。フェイが改造した結果ではあるが、この艦ではフロアの中央一段低いところに司令官席はある。座れば丁度フロアの床と目線の高さが同じになるのだ。

何かを見下ろすのは趣味じゃない　そう嘯く<sup>うそぶ</sup>フェイではあるが、短いスカートを穿いた女性クルー達が歩き回っている場所である。

フェイの魂胆など推して知るべしであろう。レイが残念がるのも無理はなかった。

「状況を報告せよ！」

司令官席に腰を下ろしたフェイの第一声である。この声にひとりの女性士官が立ち上がった。最近この艦に赴任してきた新米士官である。彼女は司令官席からの視線を意識してスカートの前を必死なつて押さえていた。実に初々しい。フェイにとっては萌えるひとときである。

「現在、艦隊総司令部の指示により、我が分艦隊は最左翼に展開中であります。これまでの経緯を要約して申し上げます……」

下半身をモジモジさせながらの萌える報告を彼女は続けた。フェイはそんな彼女の下半身に舐めような視線を這わせつつ、その報告を頭の中で整理していた。萌えと仕事の双方を同時にこなせないよ

うでは艦隊の司令官など務まらないのである。

彼女の報告によると、どうやら今回の反乱には第二、第五艦隊司令官他、かなりの高級士官が加担しているらしい。反乱勃発直後、瞬く間に軍や政府の主要施設は占拠され、宇宙港も封鎖。第一、第三、第四艦隊の司令官等、軍の主立った者らは拘禁、その艦隊も反乱軍の監視下に置かれた。宇宙に出ていた第六艦隊だけが難を逃れる結果となったのである。

国王アレクサンドル・チャーチワースはリディア内親王と共に辛うじて王都を脱出、現在はこの第六艦隊に合流を果たしたようである。しかし、反乱軍の追撃は苛烈を極め、国王に従った近衛艦隊の実に九割以上を失い、残った艦艇は一　隻に満たなかったという。

第六艦隊司令官、アベル・モンテクリスト中将は、この近衛艦隊の残存艦艇と、その他、脱出に成功した軍艦や警備艇などを糾合し、反乱軍六万隻にほぼ拮抗する約五万六　隻という戦力を揃えるのに成功した。これはモンテクリスト提督の功績と評してもいいであろう。しかし寄せ集め艦隊という感は拭いようもなく、些か心許ないと言わざるを得ない。そもそも補給をどうするのか。燃料は？ 武器弾薬は？ 食料は？ 戦が長引けばこれらの問題も表面化してくるであろう。そうさせない為には短期決戦で決着を付ける以外の選択肢は存在しないのである。

フェイは報告に耳を傾けつつ、頭の中を整理しながら、レイから手渡された書類に目を落した。反乱軍に加担していると目される高級士官のリストである。そこに並んだ名前のあまりの多さにフェイは唖った。

「反乱に加担した者がこれほどいたとはな……、王太子殿下にそれほど人望があると思えんし、これはやはり陛下に対する不満が原因か？」

アレクサンドル四世はこの年五二才。これまでの在位期間中、特筆すべき事績はないものの、まず良識派として知られる国王であっ

た。しかし近年、ある重大な失政をやらかしていたのである。良識派ゆえの失政というものがあるとすれば、これがまさにそうであろう。その失政とは、アニメ画像に対する規制であった。

これまで、地球でかけられたボカシ処理などは創造主達の高度な画像解析技術により、瞬時に復元されていた。しかし王政府はこの復元をしなくなったばかりか、きわどい映像には更なるボカシを入れたのである。

萌えキャラ達の尻や胸に白いモヤがかかった時。創造主達の怒りは爆発した。

「創作に対する冒涇だーっ！」

「乳首を見せろーっ！」

「王政府は男のロマンをなんと心得るのか！」

この創造主達の切実なる訴えを王政府は黙殺したのである。このことへの不満は思った以上に大きく、且つ深刻であった。フェイ自身、何度モニター画面にリモコンを叩き付けたことか。しかし反乱にまで発展する事になるうとは、フェイは努々予想だにしていなかった。

「……以上です閣下」

報告をそう締めくくり、その女性士官はホッとしたように席に着く。

「うむ、ご苦勞」

フェイのこの声は違う声にかき消された。オペレーターが悲鳴に近い声で報告を始めたのである。

「敵艦隊発見！ かなりの高速で接近中。現在F.L.D1ポイントに到達。至近です！ その兵力は約六万隻。第二、第五艦隊のほぼ全軍と思われます。推定接触時間は約十分後！」

戦艦フェロモンの艦橋に緊張が走る。

「なぜこれまで分からなかった！」

そう口にした後、フェイは自分の迂闊さに気づく。これは恐らく味方がこの周辺宙域に散布した長距離レーザージャミングポットに

よるものであろう。しかし早い。ここは敵の索敵能力を褒めてやるべきか。

「我が艦隊が陣形を整えるのに後どれくらいかかる？」

「約十分です！」

「ギリギリだな。で、他の艦隊は？」

「分かりません！ 分かりませんが糾合した艦艇を多数割り振られたところもありますので、再編に手間取る艦隊もあるかと推測されます！」

「チツ、こりゃあ前途多難だな」

この時、艦橋のメインスクリーンに第六艦隊司令官、アベル・モンテクリスト中将の厳めしい顔が映し出された。全艦隊に向けての通信である。決戦に先立ち、兵たちを鼓舞しようというのであろう。

「全艦に告ぐ！ 王国の興廃はこの一戦にあり！」

モンテクリストの演説はどこかで聞いたようなセリフから始まった。地球戦史研究の第一人者として有名な彼らしい言いだしである。「賊軍など恐るるに足らず！ 義は我ら官軍にあり！ これより我が軍は敵艦隊を迎撃しこれを殲滅！ 加えて電撃的侵攻により王都を奪還せしめ、最終的な完全勝利を手にするのだ！ 私は今作戦を電撃作戦と命名した。良いか諸君！」

ここでモンテクリストは大きく息を吸い込んだ。そして言い放った。

「電撃だつちゃ                    つ！」

「……………」

「……………」

全艦隊に気まずい空気が漂った。創造主達の換気システムをもつてしても浄化不可能なこの空気。

「おい、今のは笑うところか？」

「古くね？ ネタ古くね？」

「聞かなかつた事にしてさしあげろ」

ひそひそ声で創造主達は語り合う。これが精一杯の大人の対応と

やらであるう。こんなもので笑いや喊声を期待されても困るというものである。

しかし全ての創造主達が精神的大人だったわけではない。わざわざ通信機を手に取り、全艦に向けて声を発した者がいた。フェイである。

「聞いたか野郎ども！ これで笑いがとれると信じて疑わぬ総司令官閣下のユーモアセンスに敬意を表し、ここは大いに笑い飛ばしてやろうではないか！」

この時、全艦隊の約九割が笑い、残り一割が顔を青くした。顔を赤くした者は若干一名。言わずと知れたモンテクリスト中将である。フェイのこう言うところが上層部から忌避される要因なのだが、当人は一向に気にする様子もない。憤然とした表情をスクリーンに焼き付けて、モンテクリストは通信を切る。その残像を眺め、フェイの部下達は暗澹とした面持ちになった。後々、どんな無理難題を吹っかけられる事やら。敵に体当たりしろとでも命令されかねない。そうなればとばかりもいいところである。

「フェロモンよお私は帰って来たあ、なんて言ってる人がよく言いますわね」

副官のドロシーが鋭いツツコミを入れた。せめてこれくらいの嫌味は言ってやらねば気が済まぬところである。

「俺は別に笑いを取る為に言ってるわけじゃないからな」

フェイのこれが精一杯の言い訳であった。と、ここで新たな報告がふたつ。

「我が分艦隊の陣形、整いました！」

「敵艦隊、主砲の有効射程まであと一分！」

「よし！」

氣勢を上げてフェイは立ち上がった。しかし思い直した様にまた指揮座に腰を下ろした。やはり眺めがよろしくなかったのだらう。わざとらしく咳払いし、フェイは通信機を手にする。

「全艦、主砲用意！ 各艦、正面の敵に対し、照準を俯角コンマ

「二に修正！」

いよいよである。創造主達の緊張は極限にまで達した。静まりかえる艦橋内で、皆の呼吸音がやけに耳をつく。もう少し耳を懲らせば心臓の鼓動まで聞こえてきそうな錯覚に、誰もが陥った。

その静寂をオペレーターの張り裂けんばかりの大声が破る。

「敵艦隊、主砲の有効射程に入りました！」

「撃てええええっ！」

こうして戦いの幕は切って落とされた。

宇宙軍第二艦隊、第五艦隊を擁する王太子軍対宇宙軍第六艦隊を主軸とした混成艦隊である国王軍。後に二五六会戦にじゅうろくと呼ばれる事となる戦いの、これが最初の砲火であった。

## 第二話

フェイの艦隊が放つ荷電粒子砲の閃光が、無数の煌めく槍となつて宇宙空間を走る。

この砲撃を真正面から受ける事となつたのは、宇宙軍第二艦隊に所属するふたつの分艦隊、右翼に位置するコルト・パルタガス准将とボリス・コイーバ少将の艦隊であつた。

「ふん、照準が甘いわ」

冷笑と共に呟き、コルトは部下に指示を出す。

「減速しつつ進路変更、仰角――……いや待て！ 命令を変更する。進路そのまま！ こちらも主砲で反撃しろ！」

コルトのこの判断は正解であつた。フェイが第一波をわざと艦列の中央ではなく下部に集中させたのは、相手の進路を操作しようとの意図からである。コルトはこのフェイの意図を咄嗟に看破した。案の定と言うべきか、第二波は先ほどとは比べものにならない苛烈さを伴つて彼らの頭上に降り注ぐ。いくつかの艦が犠牲になつたが、進路を変更していたら被害はもっと甚大であつたろう。

さらにもうひとつの問題。戦艦の主砲である荷電粒子砲は威力こそ絶大なものの、小型化が不可能である為、艦それ自体を砲門として打ち出す兵器である。つまり仰角に進路を取ってしまうえば当然ながら主砲は使えない。主砲が長距離射程ミサイルしか届かないこの距離でそれは致命的であつた。反撃出来ぬまま敵の砲火に晒される事となるのである。

現にボリスが指揮する艦隊の方はその事態に陥つていた。

さらにボリスは愚かであつた。狼狽と混迷の挙げ句、彼は長距離射程ミサイルによる反撃を試みたのである。猛烈な砲火に晒される中でミサイルを発射した為、そのいくつかは発射直後に爆発した。そして誘爆。その爆風は発射口を伝わって艦内を吹き荒れる。ボリスはこの判断ミスにより、艦隊の実に三割を消滅せしめた。

艦には電磁シールドが備わっている。よほどの直撃でもない限り艦の被害は軽微なのだから、多少の犠牲は覚悟の上で、艦首の向きを戻すべきだったのだ。

「愚か者め」

コルトは味方の不甲斐なさに齒噛みしたが、ここは敵を評価すべきかもしれない。コルトなればこそ敵の意図を看破し、艦首を上げずに済んだのである。

「あの敵が誰の艦隊か分かるか？」

コルトが部下に問う。数秒間コンソールと格闘した末、その部下は報告を返す。しかしその声色は恐怖で縁取られていた。

「せ、戦艦フェロモンの存在を確認！ フェイ・トリニダッド提督の艦隊です！」

フェイ・トリニダッド！

その部下の恐怖はたちまち他のクルー達にも伝播した。

飲み屋やアニメイベントで出会ったなら、これほど楽しい相手もないが、戦場では絶対に出会いたくない相手である。数々の演習で卓越した技倆を示し、二代前半にして将官にまで登りつめた男。艦隊戦でこの男と互角に渡り合える者など宇宙広しと言えど、ただのひとりしか存在しない。

そのひとりが静かに席から立ち上がった。フェイとは宇宙軍士官学校の同期であった、コルト・パルタガス准将である。

「何を狼狽える事やある。第六艦隊が敵と知れた時、フェイと相まみえる事など想像し得たではないか」

コルトは左の掌に右手の拳を叩き付け、口角の片側をつり上げて見せた。

「良い機会だ。あの巨乳萌えセクハラ野郎の初陣を敗北の二字で彩ってやるのではないか」

自信に満ちたこの表情を見て、恐慌状態一步手前のクルー達は辛うじて平静を取り戻す。普段は冷たい印象を与える冷笑癖のあるコルトの顔も、この時は皆の鎮静剤となり得たようであった。もちろん



んそれは実力という裏付けあつての事である。フェイを前に他の者が笑って見せても気が狂ったとは思われなかったであろう。

「ボリス・コイーバ少将に連絡。艦隊を下げるように言え。邪魔だ、退け　とな」

コルトのこの命令を実行した通信士官は若干の、いや、かなりの修正を余儀なくされた。苦心の末、言葉を選んでの通信は、しかしボリスには届かなかった。彼の旗艦は撃沈した三割にこそ含まれなかったものの、ミサイルの誘爆により大破。ボリスは意識不明の重体となっていたのである。しかし僅か数分でその報も覆る。彼は死への門をくぐり、重体から解放されたのであった。ボリスは己のミスを死を以て償う事となったのである。

死者を罵る趣味はコルトにはない。コイーバ少将戦死の報を受け、彼は「そうか」とのみ呟いた。そして半恐慌状態で敗走に転ずるボリスの艦隊を援護すべく、艦の両翼を広げ、敢然とフェイの艦隊の正面に立ちふさがった。

この時、コルトの副官、メアリー・ベグエロス大尉はこれに危機を抱く。彼女は可愛らしい童顔を曇らせてコルトに具申した。

「敵の陣形は左翼が突出した、いわゆる斜形陣です。これは我が軍側面へ回り込んでの側背攻撃を企図してのものではないですか？だとすれば両翼を伸ばして陣容を薄くするのはかえって危険かと思われませんが」

「なるほど……」

コルトはそう言つて笑い、メアリーの艶やかなブロンドの髪に指を絡ませた。頬を赤く染める彼女にコルトは言葉を続けた。

「しかし今のところそれはない。今後、状況が変化し、フェイが独断でそれをなす可能性はゼロではないが、少なくともモンテクリスト中将の考えは別にある」

メアリーの言う通り、敵は左翼を前面に押し出し、右翼を後方に下げた斜形陣を形成している。故に現在、全戦線の中で戦端が開かれているのは敵左翼に対峙するコルトら右翼の艦隊のみである。

しかしこの斜形陣。モンテクリストにしてみれば満を持してのものではなく、いわば苦肉の策であった。

ひとつには艦隊編成の時間稼ぎであり、混成部隊である弱兵を右翼へ集め、後方へ下がらせる事で中軍からの援護を容易にする為でもある。それともひとつ。突出させた左翼に最強の精鋭を当て、序盤での局地的な戦力優勢の状況を作り出し、物心両面において戦の全局面を有利に展開しようとの考えからである。なればこそその左翼にフェイ・トリニダッド艦隊であった。モンテクリストはフェイの性格を嫌ってはいても、その能力は高く買っていたのである。

この敵将であるモンテクリスト中将の思惑を、コルトは的確に洞察していた。

「つまり我々はフェイとの戦いを互角に演じればいいだけだ。敵右翼は取るに足らん弱兵に過ぎず、全体としての優勢はこれで確保できる。理解できたかな、メアリー」

「はい、閣下」

「しかし……」

尊敬の眼差しでコルトを見上げるメアリーの首に手を回し、コルトは彼女の朱に染まった顔を引き寄せた。メアリーの頬がさらにその色を増す。

「しかし、能うことならば互角などと言わず、あのフェイを我が足下に跪かせたいものよな」

「閣下なら必ずお出来になりますわ」

「勝利の女神の接吻があればそれも能うるか」

コルトは微笑と共にそう言って、メアリーの唇に唇を重ねた。

フェイ・トリニダッドとコルト・パルタガス。彼らは宇宙軍士官学校の同期であり、共に二四歳で准将に昇進し、共に現在二六歳。共に貴族の嫡子であり、共に軍上層部からの受けが悪い。と、ここまでなら似たもの同士という感があるが、実は何もかも正反対の二

人であった。その一番顕著な例は、コルトの貧乳萌えに対するフェイの巨乳萌えであろう。その正反対であるが故にいつも喧嘩が絶えず、公の場での取っ組み合いも一度や二度の事ではない。

「巨乳などと、無意味に自己主張ばかりが肥大した、あんな脂肪の塊を信奉するとは雅さを解せぬ愚か者めが！」

「貧乳が雅だと？ こいつは新しい辞書が必要なようだ。女の肋骨に欲情する変態野郎が何をぬかすか！」

てな感じである。

そんな彼らではあるが、互いに相手の能力は高く評価しており、常に対抗意識を燃やしてきたのであった。簡潔に言ってしまうはライバルであろう。良き と冠してよいかどうかは疑問であるが、少なくとも当人達は冠してほしくはあるまい。

フェイとコルト。共に艦艇数約五 隻。雌雄を決するに相応しい舞台に、今彼らは立っていた。

「ふん、もしこの舞台に脚本家がいるとすれば、そいつは血の衣を纏った運命の気まぐれとやらかもしれない」

前面に展開する敵がコルトの艦隊だと知れた時の、これがフェイの偽らざる感慨であった。

コルトが反乱軍に身を置いているのは何故か？ 自らが望んでの事なのか、上官の命に従ってやむを得ずの事なのか。フェイとしてはそこに思いを致さざるを得ない。コルトとの決戦はフェイとしても望むところではあった。しかし、彼が意に沿わぬ戦いを強いられ、この戦闘に臨んでいるのであれば、フェイとしては興ざめもいところである。

「さて、どうしたものか……」

数分間を沈黙考に費やし、フェイは結論を得た。答えがでたのではない。答えが出ないので当人から聞く事にしたのである。

「コルトの旗艦バリューゼとの間に通信回線を開け。奴に真意を問いたです。秘匿回線を使い」

通信士官にそう命じ、フェイはさらにワインを持ってくるよう指

示した。

「グランジェリエの四〇一年物があつただろう。あれを持ってこい」

つまり、これはコルトに対して余裕を見せつける為の小道具である。フェイはワイングラスを片手にコルトからの映像を待った。我ながら負けず嫌いも度が過ぎる　と彼自身そう思い、苦笑を漏らしたその時。

「バリュージェからの接続を確認。通信繋がりました。映像です」  
通信士官の報告と共にサブスクリーンに映像が入り、それを見たフェイは思わず苦笑を引きつらせた。フェイ以上の負けず嫌いがそこにはいたのである。

コルトはソファアールと見紛うばかりの広い指揮座に深く腰掛けて足を組み、手に持ったブランドーグラスを揺すって琥珀色の液体を波打たせていた。と、ここまでならばフェイと似たようなものであるが、なんとコルトの胸元には副官のメアリーが頬を埋め、恍惚とした横顔をフェイ達に向けていたのである。コルトはそのメアリーの髪に指を絡ませ、挑発的なまでの冷笑をフェイに向かって投げつけていた。

どうだ、羨ましいか。出来るものならば貴様もやってみるがいい。

コルトの無言の嘲笑が、フェイには聞こえた。ここで引き下がれば男が廃る。従順な副官を有しているのは、何もコルトだけではないという事を、あの童顔好きロリコンの貧乳萌えの髪フェチ野郎に思い知らせてやらねばなるまい。

「ドロシー、ちょっと来い」

「いやですっ！」

フェイの思惑は一瞬で潰え去った。

今度は明らかな音声となって嘲笑が響く。

「さすが未来の侯爵閣下は部下からの人望に厚いに見える」

「ふん、未来の伯爵閣下には及ばんさ」

負け惜しみにすらなっていない事を知覚しつつ、逆恨みに近い感情をドロシーに抱きつつ、後でどんなお仕置きをしてやろうかと思案しつつ、フェイは本題に入った。

「そんな事はどうでもいい。貴様、自分のやっている事が分かっているのか？」

それは予想していた質問であつたが、コルトは眼を細めて数秒間フェイを見やり、納得したようにひとつ頷いた。微笑を湛えたその口元が静かに動き出す。

「分かっている。貴様が何を聞きたいのかもな。だから答えよう。この反乱、俺が知つたのはつい数時間前の事だ。不本意ながら俺が反乱軍に身を置いているのは、第二艦隊に席を置く身としてのやむを得ざる仕儀……だつた」

コルトはこの時、故意に過去形を強調してみせた。フェイもそれに気付く。

「だつた？ 今は違うと？」

「ああ、聞くまでもなかるう。それは貴様がそこにいるからだ、フェイ・トリニダッド准将。貴様と戦つて勝つ。その為に今、俺はここにいる」

答えは得た　とばかりにフェイは会心の笑みを浮かべた。

「それを聞いて安心した。これで遠慮無く貴様を叩き潰せるというものだ」

「ほほう、貴様にそれが出来るかな？　俺は先ほど勝利の女神より祝福を戴いた。接吻という名の祝福をな」

一瞬、何かの比喻かと思つたフェイだが、この時、コルトにしがみついているドロシーが身を振りながら頬を赤らめたのを見て、それが比喻でもなんでもない事を悟つた。

負けてはならじとフェイは胸を反らせ、虚勢を張ろうと試みる。

「それはどうか？　勝利の女神ならこちらにも……」

「いやですっ！」

ドロシーの横槍が虚勢の完成を待たずして一撃で粉碎してのけた。

コルトの大笑が傷心のフェイにさらなる追い打ちをかける。

「はっはっは……、どうやら宇宙に勝利の女神はただのひとりらしい。さて、その勝利の女神は貴様にどんな顔をするかな？」

コルトがそう言うと、メアリーがフェイの方に顔を向けた。そしてあろう事か舌を出し、フェイに向かってあっかんべーをして見せたのである。

その可愛らしさに怒りよりも萌えを覚えてしまうフェイであったが、それにしても良く躡けたものだと思心せずには居られない。ドロシーとの違いを思うとその差は歴然であろう。

「では互いの健闘を祈って」

勝ち誇った表情でコルトがブランデーグラスを掲げ、そこで通信が切れる。

「ふん、ここは素直に敗北を認めてやろう。だが戦闘ではそうはいかんぞ」

フェイは消えたサブスクリーンを眺めてそう独語した。そしてワインを飲み干し、グラスをフロアに叩き付けた時。彼の表情は一変していた。それはまさに武人の顔であった。飛散する煌めきの欠片には目もくれず、彼は副官の名を呼んだ。

「ドロシー！」

「いやですっ！」

「お前……、いつか覚えてろよ」

フェイは武人としての顔をもう一度作り直す羽目となった。

### 第三話

王太子軍の前進と共に、戦闘は全戦線へとその広がりを見せ、時間と共にその過酷さは刻一刻と増していく。陳腐な表現を用うるならば、そこは大多数の創造主達にとって、まさに地獄であつたろう。誰しもがフエイヤコルトの様に、戦場で己の存在意義を見いだせるわけではない。

主砲の閃光が走り、その後にはいくつもの火球が一瞬の煌めきとともに消滅する。そのオレンジ色の明滅は、命の灯火が消える瞬間でもあつた。

現在の宇宙船はオートメーション化が進み、乗員数も昔ほどではない。しかしそれでも戦艦クラスで約二〇〇名。駆逐艦クラスで約五十名の乗員を必要とし、ひとつの輝きはそれらの乗員、全ての命を要求するのである。

前線の遙か後方、二〇〇〇隻の護衛艦と共に中軍の背後に布陣している戦艦グランドキャラバッシュの艦橋で、国王アレクサンドル・チャーチワースはこの無音の遠雷をただ悄然と眺めていた。

「なんと愚かな……、いや、愚かなのは他ならぬ余、自身なのかもしれないぬな」

深い悔恨の念が溜息と共にその口元を衝いて出る。しかし弱気な姿を臣下に見せるわけにはいかない。侍従長、ルビ・ラモン・アロネス子爵がやってきた時、国王は悠然とした面貌を作つて振り返つて見せた。

「リディアはいかが致しておる。大人しくしておるか？」

「はあ、それが……」

この質問の答えはルビの無残な姿が物語つていた。彼はすっかり染まりきった白髪頭を掻き乱し、皺だらけのその顔を無数の引つ掻き傷で補飾していたのである。その上、歩き方がどこか変なのは、宦官製造マシンとの異名を奉られているリディアに股間を蹴り上

げられたからであらう。

苦い笑いが国王の表情を覆った。無論、同情もした。男ならば誰もが同情せずにはいられぬところであらう。それはもう痛いのだ。いやマジで。

ルビは苦痛に顔を歪めながら国王の質問に答えた。

「内親王殿下におかれましては、前線へ艦を進めるとの無理難題。それは出来んと私が申しますと、ならば小型艦を一隻よこせと、それでフェイのところへ行って活を入れるのだと言い出しまして」「フェイのところへのう……」

リディアは一時期、フェイから日本語を教わっていた事があつた。これはリディアの母である今は亡き国王の愛妾カレンと、フェイの母であるシャーリー・トリニダッド侯爵夫人とが、同じ魔女っ子アニメファンクラブに席を置いていた縁によるものである。

しかしリディアとフェイとは仲が悪い。との噂がまことしやかに流れていた。フェイはおよそ阿ねるという事を知らず、誰であれズケズケとものを言う。その辺りがリディアの癪に障るのだらうというのである。この噂はかなりの信憑性をもって創造主達の間で語られており、実際、リディアとフェイとの罵り合いを目撃した者は三桁を下らないであらうと言われている。国王自身、リディアに股間を蹴り上げられ、跳躍と着地を繰り返すフェイを一度ならず目撃しているし、食事の時なども、リディアは寄ると触るとフェイの悪口ばかり言っている。しかし、父親としてはそんな娘の、ましてや一七歳の小娘の心情など、手に取るように分かるのであつた。

「で、リディアはいかがした？」

「はあ、何を言っても聞きませず、まことに恐れ多き事ながら、当て身によりお眠りいただきました」

「それはまた、そちには苦勞をかけたのう。あれが相手では難儀であつたらう」

「はっ、日頃の意趣返……あ、いやいや、抵抗が激しかったもので、ジャブを数発と、フィニッシュにガゼルパンチとコークスクリュー



ブローをお見舞いしてしまいました。どうかお許し賜らん事を」

「はっはっは……、それはリディアには良い薬であつたろう。そちは悪くない。陳謝には及ばぬ」

「恐縮にござりまする」

ここでいったん会話が途切れた。アレクサンドルは静かに目を閉じ、そんな国王をルビは複雑な面持ちで見守った。

現在、戦況は必ずしも良いとは言えない。左翼だけが何とか善戦しているようだが、それ以外は苦戦の真っ直中にあり、右翼に至っては壊滅に近い打撃を被っている。それでもモンテクリスト提督の奮戦には目を見張るものがあるが、もはや戦線を維持できるギリギリの限界点に來ていると、ルビは見ている。

無言の時間が静かに流れ、静寂の秒針が艦橋内を一周した頃。意を決したように目を見開いたアレクサンドルが、その静寂に無形の砲弾を投げ入れた。

「余はNASAへ亡命しようと思う」

「そ、それは！」

驚愕という名の爆風がルビをなぎ払う。

「どうかご再考のほどを。アステロイドベルトのケレス資源発掘基地からも国王派であるとの声明がございました。ケレス駐留艦隊は健在でございます。ここは一度、ケレスへ向かい、捲土重来を期するのが上策かと」

ルビの言は誰が聞いても正論であつたろう。しかし……。

「そんな事をしていたい何になるのか！ いたずらに戦乱の世を長引かせ、無用の犠牲を増やすだけの事ではないか！ あれを見よ！」

国王は心に渦巻く激流を吐き出した。さらに前線が映し出されたスクリーンを指さす。その瞬間、彼らの目の前で光点が約一〇個。一瞬の燦めきを残して消えた。国王は言う。

「見たか！ 今この瞬間に失われた命だけでも一〇〇〇名を下るまい。この先、いったいいくつの命が失われる事になるのか。余には

……、余には堪えられん。余は血の海に浮かんだ玉座などに座つて  
いとうはない！」

「陛下、然りながら……」

「もう言うな！」

国王の怒声を浴び、ルビは言葉を失った。行き場のない感情が老臣の両眼から溢れ出す。嗚咽に奮えるその肩に手を置き、国王は口調を改めた。

「もう言うな、ルビよ。もう決めたのじゃ」

「陛下……」

止めどなく溢れ落ちるルビの涙が、艦橋のフロアに染みを作った。

フェイ・トリニダッド艦隊とコルト・パルタガス艦隊との間で戦端が開かれてより約一〇時間。彼らの戦闘は膠着状態にあった。元々、戦力も能力も伯仲する両名である。この膠着状態は当然と言えば当然の経緯であつたろう。

「アルファ、狙点をSD K3に固定。ベータ、狙点をDG R3に固定。シータ、狙点をDG E1に固定。撃てええええっ！」

フェイは艦隊を三つに分け、敵艦列の急所とも言つべき絶妙なポイントに火線を集中させる事で、コルトの陣形を突き崩しにかかる。しかしコルトも見事な艦隊運動で即座にこれを修復にかかり、容易に隙を見せない。そればかりか、艦隊の右翼と左翼が交互に前進と後退を繰り返すことで、フェイの艦隊に心理的圧迫を加えてくる。フェイはともかくとして、各艦乗組員達の精神的疲労は極限にまで達していた。

「ちっ、可愛げのない用兵をしやがる。さすがはコルト・パルタガスと言つたところか」

罵りというよりは、むしろ嬉しそうにフェイはそう口走った。フェイのこのふてぶてしい微笑みはクルー達に安心感をもたらす為でもあるが、無能な敵と戦う事ほどつまらぬものはない、と、そう思

うフェイであつたから、これは本心からにじみ出たものでもあつたろう。

フェイのこの剛胆な横顔を見て、副官のドロシー・ナットシャーマン大尉は頼もしさを感じてはいたが、相手がコルトである以上、一方的な勝利など望めようはずもなく、この接戦が永久に続くかのような錯覚に陥るのであつた。

もはや、この均衡を崩すには、長久の時間、運命の悪戯、外的な要因。この三者の何れかが必要であらう　ドロシーはそう痛感せざるを得なかつた。

その矢先である。運命の悪戯、外的な要因、何れともとれる事態が訪れた。艦隊総司令官であるモンテクリスト中将より通信が入つたのである。

スクリーンに現れたモンテクリストは見る影もなく衰え果て、苦渋に満ちた表情をフェイに向けていた。

「国王陛下におかれてはN A S Aへ亡命の運びと相成つた」

「なんだと？」

クルー達は予期せぬ事態に絶句した。これにはさすがのフェイも驚いたようである。ケレスからの声明が届いたばかりだったので、これは予想外であつた。しかしフェイは思惟の坑道を一步踏み込んでみて納得した。あの国王らしいと苦笑いを禁じ得ない。それで、いったい総司令官は我々にどうしろというのか。フェイのこの疑問にモンテクリストは答えた。

「我が艦隊はこれを援護すべく後方へ下がり、一度陣形を再編せねばならぬ。ついてはトリニダッド准将。済まぬがほんの一瞬でいい。貴官に敵の足を止めて貰いたいのだが、出来るか？　これは命令ではない。貴官には拒否権を与える」

これには皆、国王の亡命以上に驚いた。コルトの艦隊だけで手一杯のところへ持ってきて、敵全ての足を止めるなど、出来ようはずがない。仮に出来たとしても、それはトリニダッド艦隊の犠牲の上に成り立つものではないか。総司令官はトリニダッド艦隊を生け贄

の子羊に供しようと言うのか。

一瞬、皆はフェイへの仕返しを目論んでの事かと疑ったが、それはなさそうであった。それは『済まぬ』という言葉に拒否権、何よりモンテクリストの苦悩を滲ませた表情が物語っている。皆は息を飲んでモンテクリストとフェイに交互に視線を走らせた。フェイの返答いかんで全クルーの運命が決するのである。

この時、コルトの艦隊が艦列を立て直す為、一時後退したのを見て、フェイは決断した。

「やってみよう」

スクリーンに映るモンテクリストは、やや驚きの表情を浮かべて、しばらく無言でフェイを見下ろしていた。こうすんなり承諾するとは予想外だったのだらう。やがてモンテクリストはひとつ頷き、疲れ果てたその顔に笑みを浮かべた。

「ではよろしく頼む。貴官とは色々あったが、一度酒でも酌み交わしたかったものよ。卿の父君、トリニダッド侯爵からは卿の事を呉々もよろしくと頼まれていたが、どうやら最後の最後で世話になるのは私の方だったようだな」

「最後だと？ あんたのそんな弱音は聞きたかねえな。いつものあんたは何処へ行った」

「ふん、そうであったな。ではお互い生きて帰るとしよう。その時は貴様に敬語の使い方というものを教えてやる」

「ぜひご教授いただこう」

不遜な笑みを浮かべてフェイは敬礼した。モンテクリストは威厳に満ちた、軍人の模範とも言うべき敬礼で応じ、両者の会話は終息を迎える。

「さーと、一丁やるか」

気楽につぶやくフェイとは違い、皆、啞然と息を飲んで佇んでいた。右舷のモニターに目をやると、そこはまさに地獄絵図である。そこに今から突入し、敵の全艦隊を相手にするのかと思うと、遺言のひとつも書き残したい気分なのであった。

「いったいどうするんですか！　どうするんですか！　どうするんですか！」

皆を代表して副官のドロシーがフェイに迫った。あまりフェイに近づく、その仰角が変化し、スカートの中が丸見えなのだが、そんな事にも気づかないくらい、彼女は狼狽していた。

フェイはそんなドロシーの三連斉射を平然と受け流しつつ、絶景を堪能しつつ、命令を発する。

「全艦左舷九十度回頭！　メインエンジン始動！」

「え？　左舷？　右舷の間違いじゃ」

「左舷だ。何度も言わせるな」

「いったいどういう事なんですか？　ま、まさか逃げ出すつもりじゃないでしょうね？」

疑惑の眼差しを向ける副官に、フェイは作戦を説明した。それを聞き驚きの表情を隠せないクルー達。

「そ、そんな事が可能でしょうか？　それにあのコルト准将を騙せるでしょうか？」

「騙せるわけがない。しかし騙すのはやつの上官であり同僚だ。分かったかな？　水玉ちゃん」

自信満々にそう言つて、フェイはウィンクして見せた。ドロシーのスカートの中に向かって。

その視線にやっと気付いたドロシーが悲鳴を上げつつ足を振り下ろす。

「エッチ！　スケベ！　変態！」

軍靴が三度強襲し、フェイの顔面にめり込んだ。

今回の三連斉射を平然と受け流す事に、フェイは失敗したのであった。

## 第四話

「あのフェイが敵前回頭だと？」

艦列の立て直しを目的とし、主砲の射程外へと後退したコルトの眼前で、それは起こった。拡大投影スクリーンに映し出されたフェイの艦隊が左舷回頭し、まるで撃ってくださいと言わんばかりに艦の横腹を晒したのである。

「戦は最終局面に差し掛かっているからな。フェイに何か新たな動きがあるかもしれんとは思っていたが……」

「閣下、艦を前進させて攻撃なさいますか？」

「いや、これは何かの誘いやもしれん。もうしばらく様子を見よう」これはコルトとしては当然の判断であつたろう。あのフェイに対しては慎重に慎重を重ねても度が過ぎるという事はないし、必要な局面ならばいざ知らず、この勝ち戦で敢えて罠の可能性がある敵の不可解な艦隊行動に合わせてやる必要を、コルトは微塵も感じなかったのである。しかし……。

「あ……」

フェイの艦隊が最大船速で戦場を離脱し始めたのを見て、コルトは彼らしからぬ間の抜けた声を発した。メアリーにすら届かぬ小さな呻きでしかなかったが、この時、コルトはその頭蓋の中でフェイの思惑の断片<sup>ピース</sup>を垣間見た気がしたのである。それは漠然としたものでしかなく、形にすらなっていないが、そのパズルが完成を見た暁には不吉という文字が浮かび上がるに違いないとの予言、というよりは確信に近いものがコルトにはあつた。

やがてフェイの艦隊が右に進路を軌道修正し、緩やかに弧を描くような軌跡を宇宙空間に刻み始めた時、コルトの脳裏で全ての断片<sup>ピース</sup>が繋がった。

「してやられた！」

今回のこの呻きは先ほどとは違い、メアリーのみならず、全ての

クルー達に届いた。何をどうしてやられたのか、皆は不思議そうに顔を見合わせていたが、その内のひとりがコンピューター画面を見て報告という名の奇声を発した事により、クルー達の疑問は一気に氷解した。だがそれは絶対零度の冷氣となってクルー達の心胆を寒からしめる事となる。

「敵艦隊の軌道計算が出ました。彼らは月の王都、エネオポリスへ向けての最短ウェーブコースをとっているものと推測されます！」

「まさか彼らの転進は王都奪還を企図しての？」

クルー達に動揺が広がった。無論、コルトにとってその報告はなんら驚きをもたらすものではない。自分の導き出した回答の一部に対し、コンピューターが正解を告げたに過ぎず、しかも当たったか라고言つて喜んでいられる類のものでもなかった。

そこへ通信士官より更なる報告が入る。

「戦艦フェロモンより本国へ向けての暗号電文を傍受しました」

「本国へだと？」

「はい、計四通を確認」

「なるほど、念の入った事よ」

笑いの成分をほとんど含まぬ苦笑を浮かべ、コルトは深く指揮座に体重をあずけて艦橋フロアの天井を睨んだ。考え事をする時の彼のクセである。

「暗号パターンは我が軍で使われているものとほぼ同じでしたので解読は容易でした」

「読んでみる」

「では読み上げます。宇宙軍幕僚会議本部への電文です。『パンティは青かった』続いてコロニー姿勢制御センターへの電文。『パンティは萌えているか』次に宇宙港中央管制センターへの電文。『パンティは死語に非ず』最後に陸上治安軍本部への電文。『パンティは永遠に不滅です』以上の四通です。ぷぷっ」

緊張感に欠ける内容を何とか読み上げ、その通信士官は最後の最後で嘖き出した。副官のメアリーもこの状況でどういう表情を作っ

てよいものやら判断に困った様子で天井を見上げるコルトの顔を見下ろしていた。

「何やらおっさん臭い暗号ですね」

「ああ、フェイの野郎は母親の胎内から生まれ出でたその瞬間からすでにおっさんだからな。それにやつは何故かやたらとパンティという呼称に固執するんだ。パンツだろうがパンティだろうがその本質は変わりなかるうに。しかしそれを言うとなつは必ず怒り出してな。まったくもって始末に負えん」

「それで、この内容にはどういった意味が隠されているのでしょうか？」

「意味？ 意味なんぞないさ。受け取った方はさぞ困惑しているだろうな。断言してもいいが、これはフェイの欺瞞工作であり、やつが王都へ向かうとしているのも見せかけに過ぎん。理由は……」

この時、味方の発する悲鳴が通信波に乗っていくつも飛び込んできた。

「王都が敵に奪われるぞ！」

「このままでは我らの方が宇宙の孤軍になってしまう！」

「王都を守れ！」

こうなるだろうとは想像していたものの、コルトは歯ぎしりを禁じ得なかった。

「理由はこれだ。見ろ、味方の足が完全に止まっている。あのまま追撃していれば敵本隊は確実に瓦解していたであろうに。このままではモンテクリスト提督に態勢を立て直す時間を与えてしまうだけだろうよ」

忌々しげに吐き出し、コルトは通信機を手を取った。全艦隊に向けて喚起を促す為である。

「何を狼狽えておるか、この低脳どもが！ あれはフェイの擬態だ。そんな事も分からののか！」

それはどう鼻屑目に見ても罵倒でしかなかった。その数十秒後、スクリーンに現れた第二艦隊司令官、クラムゾン・ボウザ中將も不



快感を隠せない様子でコルトに問う。

「その低脳どもとやらには私も含まれておるのかね？」

「まさか含まれていないとでも？」

こう痛烈に返されるとは思っていなかったであろう。ボウザは口をあんぐりと開き、やがてそれはピクピクと痙攣を始めた。彼は時と場所をわきまえ、その怒気を爆発させる事こそなかったが、それを押さえる為になんかの忍耐を必要としたようであった。

「まあいい。貴官の反抗的な態度は後日問題にさせてもらうとしてだ。パルタガス准将にはトリニダッド艦隊を追ってもらおう」

「フェイを追えですと？ 必要ないと思われませんが。やつが行きたいと言うなら勝手に行かせてやればいい。どうせやつの艦隊だけでは王都の対空防御網を突破する事は不可能なのですからな」

「それはそうだが、あの暗号電文の存在にも留意すべきだろう。王都でフェイの動きに呼応する者が現れぬとも限らないか」

「あの暗号電文はやつのハッターですよ。論ずるに足りませんな」

「貴官がどういう論理的思考でもってその結論に至ったのかは知らんが、なんら確証のあるものではあるまい。王都の防衛は最重要課題であり蔑ろには出来ん。第五艦隊からは三つの分艦隊を割いて王都の防衛に向かうそうだ。彼らは月の反対側から回り込んでフェイの頭を叩く。貴官はフェイを追ってやつの背後を突け」

「分艦隊を三つも？」

コルトは思考を柔軟なものに改めてみて、総司令部のこの判断は当然なのかもしれないと思った。自分のように絶対の確信が持てない以上、ましてや向かっているのがあのフェイである以上、彼らとしては後背の守りに不安を感じずにはいられまい。しかし分艦隊を三つ、約一万五 隻もの艦艇を差し向け、今また自分までもとは、兵力分散の愚もここに極まれりというものではないか コルトは心の中でそう罵らずにはいらなかった。

「ではパルタガス准将。フェイ・トリニダッドの企図を挫折せしむるにおいて、貴官の才幹に期待させてもらうがよろしいな？」

疑問形を投げかけておいて、ボウザは一方的に通信を切った。これは命令であり議論の必要を認めず、と言った意思表示であり、不愉快な相手との対話を早々に打ち切りたかったからでもあるう。

コルトは再び天井を見上げて思惑に耽った。

「ここまでではフェイ。お前の目論見通りだろうな……」

ここで自分がフェイの艦隊を追えば、それはフェイに対する戦略的敗北を意味するものではないかとの思いがコルトにはあった。それはひとつの側面から見れば事実であつたろう。フェイの思惑の中に、コルトを引きずり回して戦場より引き離す、というものも確かに含まれていたのだから。

「ふん、フェイ・トリニダッドの企図を挫折せしむるにおいて、俺の才幹に期待する　か。よからう！」

コルトは決断した。軍靴で床を踏み鳴らし、颯爽と立ち上がった彼はその指先で、フェイのいる四時の方角ではなく十時の方角を指し示した。

「全艦に到達！　進路変更左舷三十度、機関最大船速！　陣形を横陣から密集隊形に移行しつつ近接戦闘用意！」

この瞬間、国王軍の運命は決した。

宇宙軍第六艦隊司令官、アデル・モンテクリスト中将は、フェイに与えられた時間を最大限に利用し、後退しつつ陣形の立て直しを果たした。その手腕は見事の一言に尽きるが、寄せ集め艦隊の欠点である艦隊編成の不備は如何ともし難い。

その急所とも言える場所へコルトの突撃を受けた時、モンテクリストの艦隊は一瞬にして分断された。

本来、フェイが相手であればコルトもこのような策は使わなかつたであろう。中央突破は相手に柔軟で敏速な艦隊運動能力があれば、逆に半包围される危険を伴う。あるいは普段のモンテクリストであれば、その方法でコルトを危機に陥れたかもしれない。しかし今、

彼の艦隊に柔軟で敏速な艦隊運動など望むべくもなく、動かそうとした手足は緩慢な動きを見せた挙げ句、痙攣にのたうち回る羽目となったのである。

もはや戦火は地球へと向かう国王の旗艦、戦艦グランドキャバツシユの周辺にも届き始めていた。突破を果たした敵の一部が追撃してきたのである。

「グランブリア撃沈！ カルパチオ・フォンセ力提督戦死！」

「カルストラーク大破！ クライスラ・ボリバル提督戦死！」

踵を接して届く訃報にオペレーターの口は休む暇無く動き続けた。そして更に、国王にとっては極めつけの訃報が届く。

「せ、戦艦グオルグ撃沈！ アデル・モンテクリスト提督戦死！」

「あのアデルが……」

国王アレクサンドル・チャーチワースデンは愕然とつぶやいた。彼は良き忠臣であり、かつての学友でもある無二の友を失ったのである。戦場を振り返り、アレクサンドルは深い黙祷を捧げた。固く閉じられたその瞼からは哀惜の雫がにじみ出て重力に身を委ねている。その時。許容量を超えた、強烈な閃光が艦橋内に走り、目を閉じていた国王以外の乗組員、全ての視力を奪った。護衛艦の一隻が被弾して傾ぎ、グランドキャバツシユに接触して轟沈したのである。その凄まじい破壊エネルギーは電磁シールドを突き抜け、爆風はグランドキャバツシユの艦橋をもなぎ払う。隔壁が吹き飛び、酸素が流出する。艦橋内は一瞬のうちに阿鼻叫喚の巷と化した。一瞬の後、開いた穴は新たな隔壁が閉じる事により自動修復され、酸素の流出は止まったが、艦橋内は嵐が過ぎ去った後のような悲惨な状態であった。

侍従長のルビ・ラモン・アロネス子爵も転倒をまぬがれず、床に後頭部を強打してほんの数瞬意識を失っていたが、負傷者の悲鳴で我に返り、起き上がって国王の姿を探し求めた。

国王の姿は直ぐに見つかった。しかし、ルビはその姿を見て啞然となる。

国王アレクサンドルはこの時、高速回転しながら飛び交う壁面パネルの破片により、負傷していたのである。ひとは左腕を肩口から切断し、もうひとつは右胸部へ突き刺さり肋骨を砕いて肺にまで達していた。致命傷であった。左肩から血を噴き出し、口から血のあぶくをしたたらせ、それでもなお、国王アレクサンドルは立っていた。

「陛下！」

その声に国王がルビの方へ顔を向ける。その情性のままに姿勢を崩し、国王は床へ倒れ込んだ。

「陛下！」

国王を見下ろすルビの表情は絶望に染まっていた。これが致命傷である事はルビにでも分かる。アレクサンドルはルビを見上げ、残っている右手でルビの手を掴んだ。

「リディアを地球へ。国王としてではなく父として、あの娘にはせめて平穏な生涯を送らせてやりたいと思う。頼んだぞルビ」

「陛下の御意のままに」

アレクサンドルの右手を両の手で握り返し、ルビは涙ながらに何度も頷いた。聴力と視力。どちらかが失われていても国王に伝わるようにとの配慮からである。それを見、あるいは聞き、安心したかのように国王は笑って見せた。

「そちにも苦勞をかけたのう。その後の事はそちの好きにするがよいぞ。国へ帰ってエグゼルの沙汰を待つもよし。あの者にとってもそちは育ての親。そちに対してそう惨い仕打ちもすまい。余生を静かに過ごすがい。余にはなかったものだが、せめてそちには……」

そう言って、国王は静かに目を閉じた。

「へいっ！」

「もうそつとしておいてくれ。アデルが呼んでおるでな」

その言葉を最後に、国王アレクサンドルは息絶えた。享年五二歳。長いとも短いとも言えぬ生涯を送り、それは今まさに閉じられたのであった。



## 第五話

ルビ・ラモン・アロネスは呪った。この戦を呪い、神々を呪い、この世の全てを呪った。呪わずにはおれなかった。

「天地人の神々よご照覧あれ！ 今、あなた方の子孫で在らせられるアレクサンドル四世陛下があなた方、神々の元に召されましたぞ。我は神々に問わん。陛下はまこと明君で在らせられた。それがなぜ、何故にこの様な場所での様な惨い死に様を強要されねばならぬのか、お答え下され。さあ、答えよ。答えぬか！」

血涙の水脈は枯れるところを知らず、ルビは国王の遺骸に取りすがり、いつまでも肩を揺らしていた。

慟哭が、やがて咽び泣きへと変化した頃、その肩に手を置いた者がいた。戦艦グランドキヤラバツシュの艦長、アレン・グリフィノス大佐である。

彼はまだ三〇歳の若さではあるが、自慢の髭が風格を醸し出しており、実年齢よりも上に見える。そして今は顔の右反面を血で真っ赤に染めており、さらに凄みが増していた。彼は右目に突き刺さった金属片により負傷していたのである。グリフィノスは残った左目でルビを見下ろしていた。

「ルビ殿、お気持ちは痛いほど良く分かる。しかし今は時間がございませんぞ。陛下のご遺言をお忘れではござるまい」

「遺言……」

リディアを地球へ この国王の言葉がルビの脳裏で鮮明に蘇る。肩の震えが止まった事を手の感触と自身の左目で確認し、グリフィノスは現在の状況をルビに説明しようと試みた。説明と、それに加えて説得せねばならぬ事があったのである。

「先ほどの衝撃により、この艦には甚大な被害が出ております。動力炉の損傷により機関は停止し、今は慣性航行の状態です。コースも外れてしまい、もはや我々が地球の周回軌道に到達する事は不可

能となりました」

「なんだと？」

驚愕に顔を歪めるルビ。しかしこんなものはまだまだ序の口と言わんばかりの口調でグリフィノスの説明は続く。

「まだあります。格納庫が被害を受け、小型艇もほとんどやられてしまいました。今この艦に残っている機体で地球の大気圏突入に耐えるものと言えば、一人用のP 3脱出ポットが一機あるのみです」

「P 3だと？ 自走能力もないそのようなもの、機体とも呼べない代物じゃないか。それでいったいどうやって……」

「まあ聞き下さい」

グリフィノスは両手を広げてルビの言を制した。敵は刻一刻と迫ってくる。今は護衛艦が楯となって防いでくれてはいるが、それが突破されるのも時間の問題であろう。ゆっくりと問答している暇はないのである。

「P 3をここから射出しても地球へ到達させる事は実質可能です。実行は困難と言わざるを得ません。地球までの距離があまりにも遠く、また、大気圏突入コースに乗せる為には速度も制限されるからです。必ずや途中で敵に捕捉されてしまうでしょう。そこでひとつの方法があります。時空震発生装置を使用し、P 3を地球の大気圏突入コースまで空間転移させてしまうのです。後の回収はNASAに頼めばいいでしょう」

「そんな事が可能なのか？」

「理論上は可能です。成功率は九五パーセントと言ったところでしょうが」

「九五パーセント……、残りの五パーセントはどうなるのじゃ？」

「さあ、亜空間を永遠にさ迷う事になるか、原子レベルにまで分解されるか、見た者はおりませんので何とも」

「そ、そんな危険な目に内親王殿下を！」

「しかしそれ以外に内親王殿下をお逃がしする方法はありません。」

このままだと殿下に待ち受けている運命はこの艦もろとも爆死するか、敵の虜囚たる身に甘んじるかのどちらかしかない。そしてこれは私見ですが、恐らく内親王殿下が敵の虜囚となった場合、彼らは殿下を生かしてはおきまずまい」

このアレン・グリフィノスの私見はルビの見解に一致した。ゼロパーセントと九五パーセント。議論の余地はなさそうであった。

「わかった。貴官の言う通りにしよう」

ルビがそう言うのと、グリフィノスはホツとしたように長い溜息を吐き出した。

「では右舷射出口へ急ぎましょう。すでに内親王殿下はポットの中です。後は簡単な微調整を残すのみ」

「なんじゃと？ もしわしが許可せなんだらどうするつもりだったのじゃ」

「ああ……」

グリフィノスは笑ってルビの後方を指さした。ルビが振り返って見ると、士官がひとり、ルビの後頭部に銃を突きつけていた。

「貴殿を殺さずに済んで良かった」

笑顔でそう言ってグリフィノスは歩き出す。ルビは首を竦めて彼の後に続いた。

現在、重力制御エレベーターは止まっている。彼らは階段を駆け下り、通路を早足で駆け、グリフィノスが右舷射出口へたどり着いたのは約五分後であった。この時点ではまだルビは到着していない。文官であり老人なのでその辺りは仕方ないであろう。

グリフィノスが振り返って見ると、遠くにルビの健在な、とは言い難い姿を視認する事が出来た。苦笑を漏らしつつ、技術士官のスカル・ファン・ロペス大尉から差し出されたタオルを受け取り、グリフィノスは顔にこびり付いている血を拭った。

「どうだ？ 補助電力で出力は足りるか？」

「その辺は問題ありませんよ。ただメインの時とは違って全て手動ですからね。逆にオーバーフローしないように制御するのが難しい」



「大丈夫か？」

「なあに、何とかやってみせますよ」

「頼んだぞ」

この後、二、三の技術的な事を確認し終えた頃、ようやくルビが到着した。肩で息をしつつ、彼はヨタヨタとP 3 脱出ポットに歩み寄った。ポットはまだ閉じられておらず、その周囲にはメイド服を着込んだ数人の侍女が、悲しげな表情でリディアを見守っている。ルビが見ると、リディアは胸の上で手を組んだ状態で、安らかな寝息を立てていた。彼女はルビにノックダウンされて以降、麻酔により眠り続けているのである。創造主達の高度な医療技術により、ガゼルパンチとコークスクリューブローによる顔の腫れもすっかりと消えている。

とは言え、リディアに仕える侍女達の、ルビを見る目は冷たかった。

「許せませんわっ！ 殿下に近づかないで下さいましっ！」

ひとりの侍女が立ちふさがってそう言うと、他の全員が力強く頷いた。

「い、いや、あれは仕方あるまい。その方とも見ていたであろう」

「見てましたわっ、しっかりとね！ 殴るのは仕方ないでしょう。」

でも同じ殴るにしても限度ってものがあるでしょう。殿下は女性なんですよ！」

「そうですね！ あのガゼルとコークスクリューのコンボは酷すぎますわっ！ お吹き飛び遊ばされた殿下はピクピクとこ痙攣遊ばし、それはもうご不憫で……、ううう……」

「それにその後が許せませんわっ！ あのガッツポーズはいったい何なんですか？」

「嬉しそうに、ざまあみろとも言っていましたわね」

「そうそう、それから正義は勝つとも。てことは殿下は悪ですか？ どうなんですか？」

ここで全員が揃って一歩踏み出した。

「はつきり仰って下さいませっ！」

非難の大合唱を受け、ルビはタジタジとなった。助けを求めるようにグリフィノスに視線を向けるが、彼はそんな事にかかずらわっちゃおれんとばかりに作業に専念している。

「畜生め！ みんなで寄って集ってわしを悪もんにしおってからにわしがこれまで、どれだけの苦渋と苦痛を味わってきたと思っとなんじゃ。股間を蹴り上げられる事数十回。これまで宦官にならなかつたのが奇跡というもので。貴様ら女どもにあの激痛と苦しみは理解できまい！」

と、心の中で毒づきながら、ルビは頭を下げた。

「いや、済まんかった。これ、この通りじゃ」

感情的になつた女性を黙らせるにはひたすら頭を下げるしかない。長い人生の中でルビはそれを学んでいたのである。

侍女達は顔を見合わせ、不承不承の体で引き下がった。

「内親王殿下……」

ルビはリディアの寝顔を見下ろした。涙腺が弛み、リディアの凜とした美しい顔が滲んで見える。

「思い起こせば殿下とは色々とございましたな。もう二度とお会いできる機会がございますまい。名残惜しゅうございますが、どうかご息災で。地球での殿下の平穏な生活を臣は心より祈っておりますぞ」

ルビのこの言葉は真摯さに満ちていた。侍女達も涙ぐみ、ひとりの侍女がルビにハンカチを差し出した。心を打たれたからであり、和解の意思表示でもあったろう。ルビはそれを受け取り、涙を拭うとリディアに手紙をしたためた。彼女は父である国王の死をまだ知らない。その経緯を事細かに記し、彼はリディアの胸元にそれを置いた。国王の最後の願いをリディアに伝えたかったのである。

「そろそろいいですか？」

グリフィノスの声がした。

P 3 脱出ポットの蓋が閉じられロックされると、強化特殊ガラ

スの小窓から覗くりディアの顔を、侍女達はその目に焼き付けるように見つめていた。いつまでもその場を離れようとしない彼女達を兵達が抱えて制御室へと連れて行き、皆の移動が完了すると、ハッチが閉じられ、代って射出口が開いた。やがて時空震発生装置の照射が始まり、四ヶ所から放射される白いビームが宇宙空間を走る。それらは徐々に集束していき、やがてビームが一点に集まった時、白い火花が走り時空が歪んだ。

「今です！」

「ポット射出！」

ファン・ロペスが叫び、グリフィノスが叫ぶ。

だがその瞬間、被弾により戦艦グランドキャラバッシュに衝撃が走った。電磁シールドによって弾かれはしたものの、凄まじい振動が艦を揺さぶる。侍女達は悲鳴をあげつつ転倒しかけ、ルビ達男性陣がそれを支えたが、誰も発射口からは目を放さなかった。この時、時空震発生装置の出力が異常をきたし、オーバーフローを起こしていたのである。瞬間、白い火花が青白く変化し、そこを射出されたP 3 脱出ポットが通過した。と言うよりも消えた。

皆、啞然とポットが消えた宇宙空間を眺めていた。これが成功なのか失敗なのか、判断に窮したのである。やがて、思い立ったように全員同時にファン・ロペスの方に視線を向けた。そのロペスは言う。

「今の感じじゃ大丈夫。成功ですよ。まあこれは長年の感みたいなものなので、理由は聞かないでくださいね」

自信満々に笑ってロペスはそう言った。皆はホッと安堵の溜息を漏らす。グリフィノスはロペスの肩をポンポンと二度叩き、無言で労をねぎらった。

「さてと、じゃあシメと行くか」

グリフィノスが独り言のようにそう言うと、ルビはその意味するところを的確に理解し、苦笑を漏らした。

「貴官は戦いたかろうな」

「まあね。しかし自分のメンツの為だけに部下を死なせるわけにはいかんでしょよ」

片眼の大佐はそう言って笑い、通信機を手を取った。艦橋へ向け、全護衛艦へ向け、敵への降伏を指示する。

肩の荷を下ろしたようにグリフィノスは床へ座り込み、ルビを見上げた。

「ところで、そう言うあなたの方こそ、これからどうするんです？まさか陛下の後を追おうなんて思ってるんじゃないでしょうね」「そうしたいところじゃが……」

ルビも疲れ切ったように床に腰を下ろした。

「きつと陛下はお許しにならないだろう」

「じゃあ、生きるしかないですな。生きてりゃこうやって美味しい煙草も吸える」

グリフィノスはポケットから取り出した葉巻の吸い口を歯で噛み千切って啜え、ライターで火を付けた。ルビにも一本進めるが。

「申し訳ありませんが艦長、制御室は禁煙です」

ファン・ロペス大尉が仁王立ちでそう言って窘めた。

## 第六話

やがて、降伏した戦艦グランドキャラバッシュに乗り込んできたのは、敵将、コルト・パルタガス准将であった。それを艦橋で出迎えたのは、今回の戦いで右目を失った艦長、アレン・グリフィノス大佐である。彼はあれから一応の応急処置を受け、今は黒い眼帯を装着していた。中々に渋い、と本人は満足そうである。

国王アレクサンドル・チャーチワードンの亡骸はすでに別室へと運ばれ、侍従長であるルビ・ラモン・アロネス子爵が付き添っているが、コルトは先ずそちらへ赴き、敬意と礼節とを以て国王の遺骸に拝謁した。副官のメアリー・ベグエロス大尉を伴い、暗く沈んだ面持ちを艦橋へと運んできたのはその後の事である。

艦橋に一歩足を踏み入れたコルトは、その無残な有様を見て一瞬、啞然と佇んだが、グリフィノスの存在に気づき、僅かに頬を弛ませた。

「しばらく見ぬ間に男ぶりが上がりましたね、グリフィノス先輩」

「ああ、これでモテるようになれば貴様に礼を言わねばならんところだろうな。おっと、今は准将だったな。これは閣下と呼ばねばならんかな？」

「いや、先輩に閣下などと呼ばれるとこそばゆいですよ。これまで通りコルトで結構」

「ではコルト。降将であるこの身を貴官にあずける。煮るなり焼くなり好きにしてもらって構わんが、部下達には寛大な処置が下らん事を切に願う」

「お任せ下さい。先輩の部下はもちろん、先輩にも指一本触れさせませんよ」

このグリフィノスはコルトやフェイの四つ年長であり、彼らが士官学校の学生だった頃、艦隊戦術の特別講師をしていた事があった。国王アレクサンドルに見込まれ、国王の御座艦である戦艦グランド

キャラバツシユの艦長に就任した為、大佐に据え置かれたままとなつてゐるが、本来であればとつくの昔に将官になつていてもおかしくない逸材である。フェイやコルトが一目も二目も置く男であつたもつとも、フェイがグリフィノスに敬語を使った事など一度もないのだが、そんな事には頓着しない良き先輩である。

「こんなところで立ち話もなんだ、場所を移そうか」

グリフィノスの案内で彼らは士官専用のラウンジルームに移動した。彼はソファアを指し示してコルトに座るよう促すと、自らも腰を下ろし、ポケットから出した葉巻を咥えようとした。しかしその途端、その動作を硬直させ、キョロキョロと周りを見回し始めた。その様子を見たコルトが訝しげに問う。

「どうしたんです、先輩？」

「いや、我が艦にはとんでもない禁煙家がいてな、我が物顔であちこちに禁煙ステッカーを貼って回つてゐるんだ。あいつに見つかったらうるさいのなんの」

苦笑と共にそう言つたグリフィノスは、安全確認を終え、改めて葉巻を咥え火を付けた。コルトが周りを見渡すと、確かに禁煙ステッカーが方々いたるところに張つてある。部下に喫煙を咎められてゐるグリフィノスの姿を想像し、微笑ましい気分になるコルトであつた。

グリフィノスは美味そうに煙を吐き出し、コルトにも葉巻を勧めながら、久しぶりに会う後輩にマジマジと視線を注いだ。

「そう言えばコルト、貴様が准将に昇進してから初めて顔を合わすんだつたな。暫く見ぬ間に随分と立派になつたもんだ」

「先輩の方こそ、この艦の艦長になつていなかったらとつくの昔に将官に列していただしように」

「いや、階級の事を言つてゐるんじゃない。今回の貴様らの戦いを後方から拝見させてもらったが、実に見事だつた。貴様にしてもフェイにしても、もう既に俺を越えたな。まったくもって不愉快な後輩どもだ」

そう言つて快活な笑い声を上げるグリフィノスであつた。この時、受け取つた葉巻に火を点したコルトがやや表情を硬化させた。煙に咽せたわけではない。この数秒後、コルトの暗い声がグリフィノスの耳に届く。

「先輩、陛下がNASAへ亡命しようとしていたという噂を聞きました。まことの事ですか？」

グリフィノスはこの時、コルトが先ほどより時折見せる、重苦しい表情の意味をようやく悟つた。笑いを収め、暫く無言で応じたグリフィノスではあつたが、ここで隠してもいずればコルトも知ることになる。彼はこの質問に答えた。

「ああ、陛下はこれ以上戦火が長引かぬよう、ケレスへ向かう事を拒否され、NASAへの亡命を決意されていたのだ」

この言葉にコルトは深々と頭を垂れた。まるで目に見えぬ何者かに押さえつけられでもしたかのように。

「そうでしたか……。部下達にはこの艦への攻撃は差し控えるよう伝達していたのですが、命令が行き届きませんでした。我が身の不明を呪うばかり」

「いや、この艦の損傷は僚艦の爆沈によるものだ。貴様が気に病む必要はない。それにまあ、あれだ。勝つも負けるも平家の常、生きるも死ぬも時の運つてな。陛下も貴様を恨んじやいないだろうぜ」

「恐縮です」

グリフィノスの優しさが身に染みる。コルトは僅かに微笑を取り戻してそう答えた。

この後、取り留めのない話を二、三、消化し、不意にコルトが話題を転じた。

「時に先輩。内親王殿下はどうなされたのですか？」

グリフィノスは一瞬、その瞳に警戒の色を浮かべ、頭を掻きつつ視線を右へ左へと泳がせた。この仕草が嘘をつく時のグリフィノスのクセだという事をコルトは知っている。

「ああ、殿下はお亡くなりになられた。艦橋の隔壁に穴が開いた時、

宇宙空間に投げ出されてしまったんだ」

完全な棒読みである。芝居の下手な人だ　　コルトは失笑を堪えるのにかんりの労力を必要とした。

「いちおう報告しておきますと、我々の方で時空震の歪みを観測しました。先輩はこの事をご存じで？」

「さ、さあ、それは知らなかったなあ。はっはっは……」

笑い声まで棒読みという、この不器用極まりないグリフィノスの嘘に、危うく嘖き出しそうになるコルトだったが、それをなんとか喉元で留め、意味ありげな笑みを浮かべて見せた。

「そうですか、我が艦隊でそれを知っているのは私とこのメアリーの他、数名だけです。これについては既に箝口令を敷きました。内親王殿下の事はまあ、そう言う事にしておきましょう。上にもそう報告しておきます」

「よろしく頼む」

グリフィノスは複雑な表情を浮かべたが、素直に感謝の気持ちこそう表した。彼としては自分が嘘の付けない体質だという事など重々承知しているが、こうもあからさまにバレバレですよという顔をされると、さすがに不愉快なものがあつたのである。しかしそれを補って余りあるコルトの好意であり、そこは素直に受けておく事にした。

「しかし……」

コルトは人の悪い笑みを改め、表情をやや深刻なものに変化させた。

「一度開いた時空トンネルはその消滅までに数年を要します。その存在も使用目的も、隠し果せるかどうかは運次第と言ったところでしょうね」

「まあ、その辺りは祈るしかないな」

そう言った後、グリフィノスは誘導尋問に引っかけた容疑者の様に表情を引き攣らせたが、コルトにしてみれば何を今さらといったところであつたろう。彼は敢えて見なかった事にして話題を転じ



た。

「まあ何はともあれこれで戦も終わりです。第六艦隊も降伏し、後はフェイの艦隊だけですが、やつの降伏も時間の問題でしょう。本隊無き今、やつの艦隊だけではケレスへたどり着くまでの食料はないでしょうからね。降伏か玉砕か。やつなら玉砕という道は選ばんでしょう」

この三時間後。コルトの予想は当たった。フェイは月へ取って返した三つの分艦隊に対して降伏の意志を示すと共に、「出迎えご苦労」と言い放ったのである。これを伝え聞いたコルトとグリフィノスは、フェイらしいとの笑いを禁じ得なかった。

何はともあれ、彼ら創造主達の戦はこれを以て集結した。

斯くしてこの王太子の乱は成功したかに見え、次の玉座に座る者は王太子であり勝者であるエグゼル・チャーチワデンであろうと誰もが思った。しかし戴冠式の当日、王冠をその頭上に戴いたのがエグゼルの三歳の息子、セレムト・チャーチワデンであった事に創造主達は驚愕した。この幼少の新国王を抱きかかえていたのは、彼の大叔父であり宰相であるトニオーレ・アップマン公爵であった。彼はこの時、後見人としての絶対的な権力を以て屹立し、創造主達を睥睨していたのである。

王太子エグゼルはこの叔父であるアップマン公爵により、謀反の罪で拘禁され、良心の呵責に耐えきれず服毒自殺を遂げた。と公式には発表された。しかしエグゼルの自殺を発見したという兵の顔や腕に、無数の齒形や引っ掻き傷があったという事が公にされる事はなかった。だがそれは創造主達の口の端に上り、風聞となって月面を覆う事となる。事ここに至り、創造主達はこの反乱の真の黒幕が誰かという事を、苦い思いと共に知る事となるのであった。

それから一年。

地球へたどり着いたりディアは一応の平穏を取り戻し、月での喧

騒とは無縁の時間を過ごしていた。とはいえ、彼女はNASAへの亡命を果たしたわけではなかった。グリフィノスらが予想だになかった事態が、彼女の身に起こっていたのである。

着弾による衝撃が時空震発生装置のオーバーフローを引き起こし、発生させた時空震に計算外の誤差を生じせしめていたのだ。空間軸はともかくとして、それは時間軸にまで影響を及ぼしてしており、その差はざっと一千数百年。グリフィノス達は意図せずしてタイムマシーンを発明した事になる。彼らがこの事に気付くのはもう少し先の話であるが、何はともあれ今はリディアの事である。

現在、初のタイムトラベラーであるリディアは過去の日本にいた。二〇一一年から正確に数えると一三二八年前、西暦六八三年の日本にである。

大和にある奈良盆地の夏は暑い。彼女は最近、近所の葛城川で近隣の子供達と川遊びに興じるのが日課となっていた。

「あおじーっ、こむらーっ。あんまり遠くに行くと流されちゃうわよーっ！」

「平気だよーっ！ かぐやもおいでよーっ！」

かぐや。これが地球でのリディアの名前であつた。竹藪に軟着陸したリディアは、発見された当初、記憶を失っていた。タイムトラベルの後遺症によるものか、大気圏突入時の衝撃によるものか、はたまたガゼルとコークスクリューによるものか、それは判断のしようがない事ではあるが、リディアが記憶を取り戻すまでに数ヶ月間の時を要したのは事実である。

その間、リディアを拾った讃岐造麻呂は知人である御室戸齋部みむろとじんべの秋田を呼んで名付け親になってもらった。リディアの輝かんばかりの黄金の髪を見たその秋田は、竹藪で発見された事と合わせ、リディアに『なよ竹のかぐや姫』と名付けたのである。

その後、リディアは徐々に記憶を取り戻し、讃岐造麻呂が保管していたルビからの手紙により父の死を知った。しばらくは悲しみに沈み込んでいたリディアではあつたが、生来の楽天的な性格と持ち

前のポジティブさとでそれを克服し、今では普段の明るさを取り戻しつつある。

「かぐやーっ、早くおいでよーっ！」

「あたしはここでいいわ。深いところは怖いもん」

リディアは着物を脱ぎ、下に着ている白く薄い着物を太股辺りまでたくし上げ、膝丈までの浅瀬を行ったり来たりしていた。

「きつとかぐやは河童が怖いんだぜ」

「そう言えば昨日も河童を見たって言ってたね」

「やーい、かぐやの嘘つきーっ！」

「本当に見たんだもん。あれは絶対に河童だったんだもん。昨日なんて、緑色の物体がぬーって私の股の間をぐり抜けていったんだもん。本当に本当なんだからねっ！」

リディアは力説するが子供達は信じない。人数分の疑惑の眼差しがリディアに注がれていた。

「まだ言ったら」

「おい、みんなで嘘つきかぐやに水ぶっかけてやろうぜ」

ひとりがそう提案すると、みんながリディアに群がった。

「わーい、わーい」

子供達は嬉しそうに声を上げ、リディアに向かって水をかけ始めた。

「きゃっ、冷たい！ みんな止めて」

「わーい、わーい」

四方八方から水飛沫を浴び、リディアは瞬間に水浸しとなった。濡れた薄い着物が肌に吸い付き、リディアのプロポーションをくつきりと際立たせていく。

「ちょっと、みんな止めなさい。止めなさいって言ってるでしょ！」

「わーい、わーい」

子供達は面白がつて、止める気配など微塵もない様子だった。最初は笑っていたリディアもだんだんと顔が引き攣ってきた。

「ちょっ、止め、止めなさいってば。止めて！ 止めっ、やっ、や

……や……、や、め、ろ、つつてんだろーが、こんクソガキどもが  
っ！」

子供がひとり宙を飛び、水面に大きな水飛沫を上げた。

「うりゃ　っ！　往生せえや　っ！」

ひとり、またひとりと宙を飛び、その度にザッポーンと大きな水飛沫が上がる。やがて、なだらかな流れを取り戻した川面で、泣き声の大合唱が始まった。

「あらま、あたくしとした事が、おほほほほ」

西暦六八三年、天武天皇一二年。暑い暑い真夏の昼下がりの出来事であった。

## 第七話

「うわーん！ うわーん！」

「母ちゃんに言いつけてやるーっ！」

「うえーん！ うえーん！」

「かぐやなんて河童に尻子玉抜かれちまえーっ！」

「うおーん！ うおーん！」

騒々しい子供達の泣き声と捨て台詞が徐々に遠ざかっていき、代わって蝉の鳴き声と川のせせらぎがリディアの聴覚を支配し始める。ちよつとやり過ぎたかと反省しつつ、リディアは川面から突き出た岩に腰を下ろした。

まあ子供達の事である。明日になればすっかりと機嫌を直し、いつもの笑顔でリディアに接してくるであらう。これまでもそうだった。小憎たらしいガキどもではあるが、そんな子供達をリディアは愛し、子供達も彼女の事を慕っている。

「エヘッ」と声に出して笑い、リディアは川に膝下まで浸けた足で交互に水を蹴り上げ始めた。

水飛沫が上がり、バシャバシャと音を上げる。小さな水滴のいくつかが風に乗って流れ、リディアの顔に清涼な息吹を注いでくれる。実に心地よいひとときであった。

だがリディアはふと気付く。水飛沫のバシャバシャという音に混じり、背後から小石を踏み鳴らすジャリジャリという音が響いてくる事に。

気のせいではなかった。リディアが振り返って見ると、男が三人歩いていた。それも、明らかな意志をもってリディアに向かって歩いてくる。その表情は殺気に満ち、彼女を睨むその目には憎悪が煮えたぎっている。

リディアが立ち上がって身構えると、彼らは速度を上げ、彼女を三方向から包囲するように立ち塞がった。じわじわと包囲網を狭め

つつ、真ん中に立つ男が叫んだ。

「見つけたぞ、この疫病神め！」

疫病神。聞き慣れたその言葉にリディアはうんざりした。ここ一年、そう言っただけで罵られた事か。それはいくら聞き慣れたとて耳に心地よいものではない。

何故にリディアが疫病神呼ばわりされるのか、呼ぶ方にもそれなりの理由はあった。土俗的で身勝手な理由ではあるのだが……。

黄金の髪に青い瞳という特異な容姿を持ち、空から降ってきたと噂されるかぐや。そんな彼女の出現は、迷信深いこの時代の人々の関心を集めずにはおれなかった。いったい何者なるやとの憶測が飛び交い、結果として人々はリディアの存在に一喜一憂する事となる。

何か吉事があればかぐや大明神だと言って崇め奉り、いざ凶事があれば、災いをもたらす疫病神だと言って憎悪の対象となす。疫病が流行ればかぐやのせい。凶作もかぐやのせい。家人に不慮の死でもあればそれもかぐやのせい。何でもかんでもかぐやのせい。いい加減にしるとリディアは言いたかった。この時代に来る前の日本を彼女は知っている。仕事がないのは社会のせい。貧乏なのも社会のせい。何でもかんでも人のせいにして自分は被害者だと主張する。

一年以上の時を隔てた今も未来も、人間のメンタリティーにそう大した違いがない事を彼女は知った。

もつとも、それは創造主達とて同様であり、先祖達が自分達に似せて造ったという人類に、自分達の短所まで似ている事がリディアには滑稽ですらあった。人々に罵られ、石を投げられる度にリディアは皮肉めいた冷笑を心の中に浮かべたものである。

とは言え、今は表情であれ心中であれ、冷笑などを浮かべている余裕は無かった。目の前の人間達が手にしている物が小石などではなく刀である以上、これは当然の事であつたろう。この時代特有の反りのない真っ直ぐな直刀が鞘から抜き放たれ、その平作りの刀身が陽光を不気味に乱反射させていた。

「あつ、あたしがあんだ達に何したつてのよっ！」

声が震えた。かつて無かったこの大ピンチを前にしては、さすがに強気のリディアも啖呵にキレがない。

「何したかだと？ オラ達の畑は全滅だ。この疫病神め！」

「そうだそうだ、黄金の髪に青い眼なんて人じゃねえ、こいつは疫病神に違いねえだ」

「オラ達百姓はなあ、年貢を納めらんねえと村を逃げ出すしかねえ。何もかもお前のせいだ！」

「許しちやおけねえ、殺<sup>や</sup>っちまうだ！」

「そうだ、殺<sup>や</sup>っちまうだ！」

彼らが発散する凄まじい殺気にリディアは気圧された。彼女はじわじわと後ずさる。走って逃げたいところではあるが、濡れて重くなった着物が肌に密着し、思うように身体が動かない。そればかりか、濡れそぼった白く薄い着物が肌に吸い付くと、何もかもが透けて見える。それはリディアのツンと尖ったピンク色の乳首と、僅かに生えそろった黄金色の恥毛とを赤裸々に浮かび上がらせていた。どちらかと言えば幼児体型のリディアではあるが、それはそれでエロさを醸し出していると言えよう。

男達はゴクリと生唾を飲み込み、目の血走りを別のベクトルへと全力で転換させた。この邪念とも言つべき桃色の視線に気付いたりディアは慌てて胸と股間に手をやるが、時すでに遅し。

「オ、オラ、こいつのおいどにぶち込みたくなっただ」

「オラもだ」

「オラもだ」

意見は満場の一致をみた。

「姦<sup>や</sup>っちまうだか？」

「そうだ、姦<sup>や</sup>っちまうだ」

「オラ、もう我慢できねえだ。姦<sup>や</sup>っちまうだ」

彼らの殺<sup>や</sup>っちまうだが姦<sup>や</sup>っちまうだへと変化し、リディアの生命の危機が貞操の危機へと変化した。

「乳房は少し物足りねえが、顔は中々ええだ」

「確かにちよつと物足りねえだな」

近代以前 日本では女性の乳房は小ぶりのものが是とされてきたという歴史がある。この時代とて例外ではなく、その人々をして物足りないと言わしめるリディアの胸は、かつて、かのコルト・パルタガスが大絶賛したと言われるほどの貧乳であつた。

氣にしている事をズバリと言われ、リディアの怒りが恐怖を遙かに凌駕した。両の拳を振り上げるリディアだが、透けて見える乳首と恥毛に気づき、再び身体を縮こまらせてそれを隠す。

「 ^ つ ^ つ ^ … 」

しかもそれだけではなく。その男は左手を着物の中に突っ込んで、彼女の乳首を摘んでコリコリと嬲りだしたのである。揉む胸がないのでこれは当然の責めスポットであろう。

貧乳は乳首の感覚が良い　という事を、何かの雑誌で読んだ事があるリディアだが、彼女はそれを身をもって思い知らされる事となった。男はこのリディアの反応にますます興奮した。

さらに男は後ろから身体を密着させ、腰をカクカクと動かし始めた。乳首への刺激と相まって、快感とも悪寒とも名状し難い戦慄がリディアの背筋を走り抜け、彼女の全身をザワザワと総毛立たせる。「いやーっ！ 助けてーっ！ 誰か助けてーっ！」

最初であつたかもしれない。道からはかなり外れた人通りのないこの場所では、助けなど期待できようはずもないものを。



しかし天はリディアに味方した。ひとりの男が通りかかったのである。

年の頃は二十四、五だろうか。その青年は標準よりも遙かに長い直刀を、帯びるでもなく、佩くでもなく、飄然と肩に担いでいた。貴公子然としたその顔だちは、だがしかし、この世の全てに絶望でもしたかのように暗い影を落している。

とは言え、中々に腕は立ちそうであった。少なくとも暴漢どもはそう思い、刀を向けて身構えた。だが……。

その青年は何事もなかったかのように通り過ぎていく。

男達は啞然とその背中に視線を送った。当然ながらリディアもある。この状況では彼女の方がよほど深刻な事態であつたろう。

「ちよつと、そこのおにいさん！」

無視。

「ちよつと待つてよーっ、そこイケメンのおにいさん！」

さらに無視。

「待てつつつてんでしょ、このすつとこどっこい！ 乙女のピンチに何シカトこいてんのよっ！」

ここでやつとその青年は立ち止まった。

「すつとこどっこいとは聞き慣れぬ言葉だが、それはわしの事かな？」

「あんたしかいないでしょうがっ！ この状況見てあんた、何も感じないのっ？ 助けてやろうとか思わないわけっ？」

「はて……」

その青年は眼を細めて周囲を見渡し、改めてリディア達に視線を注いだ。

「これはどちらを助けたらよいものやら」

意味不明の言葉を吐き、その青年は担いでいる長刀を肩から下ろした。その動作に男達は色めき立つ。リーダー格の男が青年に刀を突きつけた。

「や、やろつてのか？ 言つとくがオラ達は義賊だぞ！」

「ほほう、義賊だと？ 義賊が白昼堂々と女性を襲うとはな。どこ  
の義賊だ？」

その青年はそう言った。リディアも口を挟む。

「あんたらさつき百姓とか言つてなかった？」

「お、お前は黙つてろ！」

狼狽の声を上げ、リディアに組み付いている男が彼女の口をふさいだ。

「フガフガフガ……フガフガ……」

冷や汗を垂らしつつ、リーダー格の男が話を続ける。

「どこの義賊かだと？ 聞いて驚くな。オラ達はなあ、中臣史様率  
いる義賊団だ！ どうだ恐れ入ったか。オラ達に手を出すと史様  
が黙つちやいねえだぞ！」

虎の威を借る狐とはまさに彼らの事であろう。しかし、この青年  
は彼らの思惑通り、虎の威に恐れをなしてはくれなかった。それば  
かりか。

「中臣史だなかとみのふひとと？ 黙つて立ち去るつもりだったが、その名を聞いて  
は捨て置けんな」

青年は鞘から刀身を抜き放ち、両切刃造の鋭い切っ先を男達に向  
けた。

「オツ、オラ達に手を出すと史様ふひとが黙つちやいねえだぞ！ いいだ  
か？ ほんとうにいいだか？」

「ああ、かまわんさ。なんならここに連れてこい」

「いいだか？ ほつ、ほほつ、ほんとうに連れてきていいだか？」

男達は明らかに怯えていた。青年に刀を向けてはいるものの、そ  
の切っ先から足のつま先まで、全身をブルブルと震わせ、その表情  
は恐怖に引き攣っている。こんな男どもにいいように嬲られていた  
のかと思うと、情けなくなってくるリディアであつた。

この事態に多少の強気を取り戻したりディアは、スキを見て組み  
付いている男の腕にガブリと噛みついた。そして振り向きざまの股  
間蹴り。しかしこれは水の中から蹴り上げた為に威力は半減する。

リディアはそのまま走って逃げ、何とか青年の背後までたどり着く事ができた。

ここで青年に向けられる刀は二本から三本になるが、青年に動じる色はまったく見られない。寧ろ三人の男達の方が怯えきり、どちらが大人数なのか分かったものではない。

「いつ、いいだか？ オラ達に手を出すと後でどうなっても知らねえだぞ！」

「ああ、わしは逃げも隠れもせん。いつでも来るがいい」

「では、なっ、なっ、名を名乗れっ！」

「わしの名か？ いいだろう、教えてやろう」

青年はそう言つと、刀を上段に構え、一步踏み出して見せた。

「我が姓は中臣、なかとみ名を史ふひとと言つ」

「へっ？」

男達が呆氣に取られた瞬間であつた。史ふひとと名乗つた青年は一瞬にして間合いを詰め、刀を一閃させた。しかしリディアには見えなかつた。しかし次の瞬間には三つの刀が高々と宙を舞っている。さらに一閃させると、男達の衣服がバサリと落ち、全裸となつた彼らの股間がむき出しとなつた。

「あらやだっ」

リディアはそう言つて両手を顔に当てるが、大きく見開いた眼まなこを薬指と小指の間からチャツカリと覗かせている。

そのリディアがよほど魅力的だつたからであるうか、戦いに怯えつつも、血を滾らせた男達の陰茎は、未だなお隆々と天に向かつてそそり立っていた。だがしかし、その大きさをやりディアの親指ほどもない。

「なんかこやつらが可哀想に思えてきた」

それをマジマジと眺めつつ、史は刀を鞘に収めた。

「オ、オラ達を許してくれるだか？」

「許すも何も、わしが助けたのはお前達でもあるんだぞ。お前達、自分が死地に立っていた事に気付かなかつたのか？」

「死地にですかい？」

男達は顔を見合わせて首を傾げた。

「ならば教えてやろう」

そう言つと、史は懷から小刀を取り出し、事もあるうにそれをリディアに向かつて投げつけた。みんなが驚いたのは言うまでもないが、さらに驚いたのは次の瞬間であつた。その小刀が何処からか飛んできた苦無くないによつて、空中で弾かれたのである。

男達は啞然と佇んだ。

「見たか。お前達はもう少しで死ぬところだつたんだぞ」

史がそう言つと、男達は腰を抜かしたようにへなへなとその場に崩れ落ちた。今ではその陰茎も小指の先ほどの大きさしかない。史は哀れみをもつてそれを眺めていた。その視線に気付いた男が泣きながら語り出す。それはなみだなみだの物語。

「そうさ。オラ達はまだ一度もまぐわつた事ねえだよ。こんなんじや女からも相手にされねえだよ。凶作で年貢も納められねえし、村もおん出るしかねえ。オラ達はいつたい何の為に生まれてきたのか分からねえだよ」

これには史も同情を禁じ得なかつた。彼は自分の事を不幸だと信じてはいるが、上には上が居る事を知つたのである。史は何食わぬ顔でリディアに提案してみせた。

「これほど小さければ害はあるまい。少しくらい挿れいさせてやつたらどうだ？」

この提案に男達は目を輝かせ、史からリディアへと視線を転じるが。

「誰が挿れいさせるかつ！ あんたバカじゃないのっ！」

リディアがそう言い。男達はガツクリと肩を落した。しかし今度はリディアが提案してみせる。

「そう言つあんたの方こそ義賊の頭領なんですよ、子分にでもしてやればどうなのよっ？」

この提案に男達は目を輝かせ、リディアから史へと視線を転じる

が。

「こんな情けないやつらはいらん」

史はあっさりと言つてのけ、男達はガツクリと肩を落した。やがて彼らは力なく立ち上がり、史らに頭を下げるとトボトボと歩き始めた。その背中には壮絶なまでの哀愁を漂わせている。これにはさすがの史も見かねてしまった。

「おい、お前達。明日わしを尋ねてこい。暫く面倒を見てやろう」男達は喜び、こちらに向かつて頭を下げた。歩いては振り返り、振り返つては歩き、彼らはその度に何度も何度も頭を下げる。やがてその姿が見えなくなると、リディアは先ほどの苦無くぬを拾い上げ、史に尋ねた。

「ねえ、あんた。さっきのこれっていったい何なの？」

「ああ、どうやらそなたは何者かに守られているようだな」

「何者かつて誰よ？」

「さて、それは天狗なるや、はたまた河童かなるや、わしは存ぜぬ。

……とは言え」

ここで史は苦笑を漏らした。

「この尋常ならざる鬼気はちと首筋に痛いな」

史はそう言つと、辺りに聞こえるよう大声で叫んだ。

「先ほどの戯れ事は許されよ。この娘に対し我に害意なし。その鬼気を収め候らえ。蝉どもも驚いておるではないか。風流なる蝉時雨。聞こえぬは寂しかろう」

その数秒後。史は無言で頷き、やがて蝉の鳴き声が辺り一面を覆い始めた。

## 第八話

「ふん、蝉時雨か……」

史はどこか無感動にそう呟いた。

この青年にはどこか暗い影がある。そうリディアは感じていた。これまでもそうだったが口調がどこか投げやりで、笑って見せても上辺だけ。まるでこの世の全てに希望を失いでもしたかのような悲壮感と絶望感がその表情を覆い尽くしており、それがリディアにはどうにも息苦しかった。

その史がその無感動な表情を自分の身体に向けているのを見て、リディアは今さらながらに己の姿を思い出した。

「な、何見てんのよ、この変態！」

「別に見たくて見ているわけではない。そなたが勝手に見せてるだけであろうが」

つまらなさそうに史は言う。リディアとしては目を血走らせて凝視されるのもいやだが、こうもあからさまに無感動な目で見られるのも、それはそれで女性としてのプライドを傷つけられるのであった。

「ちょっとあっち向いててよねっ！」

そう言うと、リディアはそくさと濡れた薄着を脱ぎ、置いてあった着物に着替えた。その間、史がちょっとでもこちらを見ようものなら石でも投げつけてやろうかと思っていたが、史は興味なしとばかりに背を向けたまま動く気配を見せない。それもまた腹が立つ。乙女心とは複雑なのであった。

「もういいわよっ！」

いささか怒気を含ませてリディアがそう言うと、史は面倒臭そうな仕草で振り返った。色艶やかな赤い着物を纏ったリディアの姿を見ても、その表情には何の変化もない。少しくらい眉を動かして見せるとか、お世辞のひとつでも口にすれば可愛げがあるものを、と

憤慨するリディアに向かって、彼が口にしたのはこうである。

「どうでもいいが、わしはいちおうそなたの命の恩人であろう。礼くらは言ってもらいたいもんだな」

別に感謝していいわけではないが、これにはついリディアも反発してしまった。

「べ、別にあんたに助けしてくれなんて言った覚えないんだからねっ！」

「ほほう？」

史の口元が歪み、嘲笑を形作った。それでいて全体的な雰囲気は無表情を維持しているのだから、これはこれで器用だとリディアは呆れる。しかしこの後、この器用な若者はさらなる器用な技を披露してのけた。彼はこう言ったのである。

「では聞くがそなた、『いやー、助けてー、誰か助けてー』に始まり『ちよつと、そのおにいさん』とわしを呼び『ちよつと待ってよ、そのいけめんのおにいさん』とさらに引き留め『待ってっつってんでしょ、このすつとこどつこい、乙女のピンチに何しかとこいてんのよ』と暴言を吐き『あんたしかいないでしょうが、この状況見てあんた、何も感じないの？ 助けてやろうとか思わないわけ？』と、わしに言った事を覚えてないとでも？」

これにはリディアも驚いた。

「あつ、ああつ、あんたねえ！ 男がそんな細かい事いちいち覚えてんじやないわよっ！ それも一言一句の間違いもなく覚えてるなんて、あんたの頭どうかしてんじやないのっ？」

「ああ、わしは記憶力には自信があつてな、一度見聞きした事は絶対に忘れん。父の愛読書であつた六韜三略も諳んずる事が出来るぞ」

「ふん！ 自慢？ ねえ、それ自慢？ そんな地味でチンケな能力、自慢してんじやないわよっ！」

「ちんけ……そなたの言葉には時々理解出来るところがあるな。いけめんといい、すつとこどつこいといい、ピンちといい、それに鹿とこくとはどういう意味だ？ わしが鹿と何をしたというのだ？」

「もういいわ、あんたと話していると頭がおかしくなるわ」

「それはこつちの台詞だ。そもそも先ほどよりのわしに対するそんなの暴言、許し難いものがある。我が中臣家落ちぶれたりと言えど、女人にここまで馬鹿にされた事など一度もないぞ」

「あつそ、じゃあいい経験したじゃないの。それに何？ はっはーん、あんたのその如何にも私は不幸でございますってな顔の理由がようやく分かったわっ！ 家が落ちぶれた？ バツカじゃないの？ そんな事でいちいち落ち込んでんじゃないわよっ！ 男ならねえ、そんなもん笑い飛ばして、這い上がってやるってくらいの気概を持ちなさいよねっ！」

この時、史は初めてその表情に激しい感情を浮かび上がらせた。正負何れとも判断しがたい複雑な表情ではあつたが、閉ざされていた彼の心に何かが吹き込まれたのは事実であつたろう。

史はその形相のまま何か言おうと口を開くが、何も発せずそのまま口を閉ざした。やがて再び口を開いた時、彼は穏やかな表情を取り戻し、その口元には感情の発露たる微笑さえ浮かべていた。

「どうでもいいがそなた、もう少しお淑やかにしていないと嫁のもらい手がないぞ」

「へっへーんだ、お生憎さまっ！」

リディアは勝ち誇つたようにない胸を反らし、左手を腰に当てて右手の親指で自慢げに鼻を弾いた。そしてそのまま右手を史の方へと伸ばし、親指だけ曲げた手の平を突きつけて見せた。

「あたしにだつてねえ、求婚者くらい居るんだからねっ！ それも四人よ、四人！ どう、驚いた？」

「こいつは驚いた。てか嘘だろ？」

「嘘じゃないわよっ！」

「そうかそうか、ではそういう事にしておこう」

この日一番の笑顔を浮かべ、史は愉快そうに声を上げて笑った。



リディアがたどり着いた西暦六八三年。この時代の日本を一言で言うならば、動乱から収束へと向かう過渡期と言えるのではなからうか。その過程において、史の一族である中臣氏なかとみしは現在、没落の一端を辿っていた。

中臣氏なかとみしとは、かぐやの名付け親である御室戸齋部秋田みむろといんべの一族、忌部氏等んべしと共に、代々この国の神事、祭祀をつかさどってきた氏族である。

だがその中でも史の父である中臣鎌足は異彩を放っていたと言える。まず鎌足は中大兄皇子なかのおつえのおつじに協力して有力豪族であった蘇我入鹿を暗殺、蘇我氏を衰退へと追い込んでいく。いわゆる乙巳いつしの変である。それに連なる大化の改新でも鎌足はその能力を遺憾なく発揮し、中大兄の懐刀として活躍した。

しかしその後、朝鮮半島が風雲急を告げ、日本もそれに巻き込まれる事となる。百済が唐の援軍を得た新羅によって攻め滅ぼされ、その百済残党の要請を受けた中大兄が出兵を決意したのである。日本は朝鮮半島へと兵を送るも白村江の戦いでこれに大敗。中大兄はその後、百済難民を大量に受け入れ、近江の大津宮おおつのみやにて大王に即位し、親百済政権を樹立した。

しかしこれには不満や反発の声も多かった。鎌足は中大兄に協力するが間もなく死去。さらに中大兄が死に、その息子である大友が大王に即位すると、その不満は一気に爆発する。

そもそもこの国は、豪族達の統治する小国家が集まって出来た連合国家であった。元々の首長国は倭ウライであったが、力をつけてきた日本ヤマトがそれを凌駕し、実質的な支配権を手に入っていたのである。

この時、この倭の王である大海人おおあまが動いた。彼は現政権に不満を持つ諸豪族を糾合し、この近江朝に対し、決戦を挑んだのである。そしてこれに見事勝利し、日本を乗っ取ることに成功するのであった。

後に壬申の乱と呼ばれるこの戦争当時、史はまだ子供であり、これには参加していない。しかし中臣家の長であり右大臣の位にいた

なかとみのかね  
中臣金が大友方について敗走、処刑されるに至り、中臣氏は大海人  
あすかのきよみはらのみや  
が飛鳥浄御原宮に開いた新王朝では、完全に中央から一掃されてしま  
ったのである。

史は全てに絶望した。近隣のあぶれ者達を集めて義賊団なるものを  
結成したのも、志しあつての事ではなく、単なる暇つぶしであつた。  
彼は前途に明るい未来を描くことなど出来なくなっていたのである。  
……だが。

「男ならそんなもん笑い飛ばして、這い上がってやるくらいの気概  
を持って　か。中々に面白い事を言う娘だな。なよ竹のかぐや姫か  
……」

リディアの事を思い出し、史の頬が緩む。ニヤニヤが止まらない。  
史が帰宅すると義賊団の子分が出迎え、この史の変わり果てた表  
情に驚いた様子であつた。数歩後ずさりながらその子分が報告する。  
「ふ、史様にお客人でございます。先ほどからお待ちで」

「わしに客人だと？」

史が門を潜ると、庭先には馬が一頭と、その客の家人らしき十名  
ほどの男達が畏まって控えていた。馬の装備とその家人達の身なり  
から、その客人がそれなりの身分であるという事が窺い知れる。

史は客人の待つ居間へと足を運んで見て納得した。そこには見知  
った顔があつた。

「やあ、史殿。おじゃましておるぞ」

「これは大伴殿でござったか」  
おおとものみゆき

大伴御行。壬申の乱では大海人方に付き、功のあつた人物である。  
年は三七歳。冠位は二六階中一〇位のしょうしゅう小錦上。現在は大海人の下で  
兵政官大輔を務めている。無位無冠の史などとは雲泥の差がある人  
物であつた。

「没落氏族である私のところへ今さら何のご用で？」

「まあまあ、そう嫌味を言わっしやるな。そこもとほどの才覚があ  
ればこの先いくらでも機会はおじやろ。麻呂も折を見て推挙いた  
そうほどこに」

大伴は機嫌を取り繕うように笑顔でそう言つと、そわそわと落着かなげに本題に入つた。待ちきれなかつたと言わんばかりの様子である。

「いや、本日伺つたのは他でもない。博学多識との噂が高い史殿にちと教えを請いたい事がござつてな」

「教えを請いたいとは？」

「うむ、史殿は東風亀（うちかめ）というのをご存じか？」

「東風亀でござるか？ はて、そのような亀、聞いた事もございませんな」

「うつむ、史殿も知らぬとは参つたのう」

「その東風亀とやらがいったいどうしたというのです？」

「いや、さる女性（おんな）に求婚したのだが、それを持つていかん事には祝言を承諾してくれんのじゃ」

「なるほど、その東風亀とやらをその女性はご所望なわけですね？」

「正確には東風亀ではない。東風亀の最新巻というものじゃ。麻呂の見立てでは東風亀の事が書いてある何がしかの巻物であろうと思うのじゃが……、やはり東風というくらいじゃから東国の蝦夷地へ参るしかないかのう」

がつくりと肩を落し、大伴は溜息をついた。別に慰めてやる義理は史にはない。突き放すように彼は言う。

「お役に立てず申し訳ない。まあゆつくりと探すんですな」

「そうも言つておれんのじゃ。麻呂以外にも求婚者がおつてな。早いもん勝ちなのじゃ。阿倍御主人殿（あへのみうし）は象とやらいふ動物を求めてすでに唐へと旅立つてしもうた。他の二人も旅仕度をしておるとの噂じゃしのう」

これに史は驚いた。まさかとは思つが確かめずにはいられない。

「お、お待ち下され。という事は求婚者は全部で四人ですか？」

「そうじゃ」

「大伴殿が求婚したという相手。名を聞いてもよろしいか？」

「うむ、なよ竹のかぐや姫じゃ」

やはり！

「あれは本当だったのか……」

史は小声で呻いた。すっかり嘘だと思い込んでいたのである。あのような騒々しくがさつな女によくぞ四人もの求婚者が、と思う反面、自分の本心を覗いてみて史は納得した。自分もあの騒々しくがさつな女とやらの惹かれ始めているのではなかったか。

そう思つて静かに苦笑を漏らした史は、別の事に興味を抱き、それを大伴に聞いた。

「ちなみに他のお三方はどういった品物を持ってこいと言われているのですかな？」

「うむ、ちよつと待つてくりやれ。書き留めておるでな」

大伴は懷を探り、巻物を取り出して史にそれを読んで聞かせた。

「阿倍御主人殿は『ふえるなんですの象さん』というものじゃ。それから多治比嶋殿は『青鼻馴鹿のふいぎゅあ』それから石上麻呂殿は『ぶらだの獏』じゃ。みんな動物かそれに類するものものようじゃな」

結局、大伴御行はなんの収穫も得られぬまま、史の屋敷を後にした。トボトボと帰途につくその大伴の後ろ姿を見送った後、史は屋敷に戻ると部屋には入らず縁側に腰を下ろした。夕暮れ時、薄暗い東の空には満月がうつすらとその丸い姿を浮かび上がらせている。その月を眺め、史は思案に耽った。

大伴より聞いた、かぐやが所望する品々は、数多の書物に通じた史も初めて聞くものばかりである。およそこの世に存在するのかさえ疑わしい。ここで史はある結論に達した。これはあのかぐやが求婚を断る為の口実ではないだろうか。

確かにこの求婚者四人はそれぞれ身分ある者達である。並みの女性であれば泣いて喜び嫁ぐであろう。しかし彼女はそんなものに頓着するような女性には史には見えない。もっと別の価値観を有した女性であろうと史は睨んでいた。

それに年齢も釣り合わない。四人の中で一番若くして今日尋ねて

きた<sup>おおとものみゆき</sup>大伴御行の三七歳である。次が石上麻呂<sup>いそのかみのまろ</sup>の四三歳。その次が阿<sup>あ</sup>倍御主人<sup>へのみうし</sup>の四八歳。多治比嶋<sup>たじのしま</sup>に至っては五九歳である。もつとも、大半の女性は相手が高貴な男性であれば、たとえ何十歳年が離れていようとほいほい尻尾を振って嫁ぐであろう。別にこれは卑下される事ではない。この時代ならば当然の事である。だがかくやはそういう女性ではない。史は確信をもってそう断言できる。

「さて、わしは何を持ってこいと言われるかな？」

史は月を見上げ、そう呟いていた。

## 第九話

王太子の乱から約一年。史が見上げた月の裏側では、彼が知り得ようもない存在が、知り得ようもない歴史を紡ぎ続けている。

乱の終息後、新国王の戴冠に伴って、トニオーレ・アップマン公爵は国王の後見人たる地位についた。宰相の地位はそのままにである。これには長老院議会からの反発があった。宰相は如何なる役職であれ兼任を禁ずとの不文律の掟があった為である。しかしアップマンは後見人という地位がメシヤムの憲法上、正式な役職ではないと強弁、長老院議会のこの訴えを黙殺した。

さらにアップマンは反乱の事後処理を利用して軍部の掌握にも着手する。

第二艦隊司令官クラムゾン・ボウザ中将、第五艦隊司令官サム・ホワン・クレメンテ中将他、反乱に加担した高級士官、貴族等、八五名が即決裁判の後処刑され、反乱の勃発に際して何ら為す術もなく手を拱いていた軍上層部も、かなりの人数が更迭されると、アップマンはその空いた席に自分の息の掛かった者を次々と据えたのである。これにより軍上層部はほぼアップマン派一色に塗り固められ、軍隊はさながらアップマンの私兵と言っても過言ではない存在へと変貌を遂げた。

この武力を背景に、アップマンは自分に批判的な言動をとり続ける長老院議会を解散へと追い込み、その大多数を国事犯として収監するに至る。

これにより本来、王政府、宰相府、長老院議会と三つに分散されていた権力は完全にアップマンただひとりのものとなり、彼はもはや如何なる者からも掣肘も受けぬ絶対的な権力者となり果せたのである。

表面上、創造主達は乱以前の平穏を取り戻しているかに見えた。しかしそれは強制され、抑圧された静けさに過ぎず、彼らは諦めに

も似た沈黙を余儀なくされていたのである。

しかし水面下では小さな反抗の渦が水面に波紋すら立てず、密かに息づいてた。

「アップマンの野郎め、どうやら宮内省に圧力をかけて、禅譲という形でこの国を乗っ取るうとしていているらしい。このままでは遠からずチャーチワードン王朝は滅ばされ、アップマン王朝とやらが誕生してしまうぞ」

軍務省内の混雑した士官食堂で、大胆にもそう歎いて見せたのはアレン・グリフィノスであった。

彼は現在、准将に昇進を果たし、近衛艦隊司令官に就任している。当初、国王を守りきれなかった事により、グリフィノスを処断せよとの意見も軍部内にはあった。しかし国王の王都脱出に付き従って戦死した近衛艦隊司令官ビクトーレ・ダビドフ中将与、国王を守って獅子奮迅の働きをなし、壮絶な戦死を遂げた宇宙軍第六艦隊司令官アベル・モンテクリスト中將は二階級特進。共に元帥として盛大な国葬が執り行われている。国王を守りきれなかったという一点においては彼らも同罪であり、その地位職責からしてもより大きな責任があるはずであった。にもかかわらず、この二人を功ありとして賞し、一艦長の罪を鳴らすわけにはいかない。軍上層部はそう判断し、結果としてグリフィノスは准将へと昇進し、近衛艦隊司令官に任命されたのである。本来、艦隊司令官は中將をもってその任に当てるのが妥当ではあるが、今回、近衛艦隊はその規模を約五〇〇〇隻という分艦隊クラスに縮小され、司令官は准将が務める事とされたのであった。

「アップマン王朝ですか……、そうなる前になんとしても内親王殿下にお戻りいただき、我らの旗頭になっていただかねばなりませんね」

グリフィノスの言に、彼の部下、スカル・ファン・ロペス大尉はハンバーグを頬張りながらそう返した。どうせ話し声は周囲には届かない。ひそひそ声で話すよりこういう事はどうどうと話した方が

人目もひかず、こういう場所の方がかえって盗聴の心配もない。

「しかし内親王殿下が生きておいでと聞いた時はホツとしましたよ」当初、NASAよりの連絡でリディアが地球へ到達していない事を知り、ファン・ロペスは愕然となった。グリフィノスなどはリディアの生存を絶望視していたほどである。しかしファン・ロペスは時空トンネルの開通には成功しており、必ずどこかに抜けたはずだと信じていた。では何処へ抜けたのかとなると分からない。地球へたどり着いていないのであれば生存は絶望的であり、着陸地点が外れただけならば生存の可能性はゼロではない。

彼らは密かに時空トンネルの調査を開始した。宰相派に知られぬよう事を運ばなければならず、調査は難航するが、最近になってようやくそれは判明する。なんとそのトンネルは過去へと通じていたのである。時間軸と空間軸のズレも計算され、リディアの到達地点が正確に一三二八年前の日本、それも近畿地方である事まで判明した。

しかしそれは宰相派にも知られる事となる。結局のところ、彼らは泳がされていたのである。

「アップマンめ、地球へ暗殺者を送り込んだらしいが、これは失敗したらしい。どういう事情で失敗したのかは分からんがな」

ミックスベジタブルのグリーンピースを器用により分けて排除しながらグリフィノスは言った。彼らにも宰相派へ潜り込んでいる同志はおり、これはその者からの報告である。

ファン・ロペスはグリフィノスの動作に非難の目を向けつつ大きな咳払いをした。グリフィノスがそれに気づき、無言で『ダメ？』と左目で問うとファン・ロペスは『ダメ！』と両目で返す。

「取りあえず、内親王殿下は未だご健在だという事です。しかしそういう事情であれば早く救出して差し上げなければなりませんね」  
「ああ、一度の失敗で諦めるほど可愛げのある御仁ではないから、あのアップマンは」

忌々しげにグリフィノスは顔を顰めた。それがアップマンに向け



られたものか、グリーンピースに向けられたものか、ファン・ロペスには分らない。

「しかし我々もいつ拘束されるか……、今日なんてずっと尾行されてましたよ」

「ふん、俺もだ。そろそろ腹を括るべき時なのかもしれんな。準備は怠るなよ」

「はい、しかし内親王殿下の方は？」

「そっちの方は既に手を打ってある。上手く行けば宇宙で合流できるだろうよ」

グリフィノスはそう言つて目を瞑り、皿を持ち上げてグリーンピースを一気に掻き込んだ。

リディアが住んでいる讃岐造麻呂さぬきのみやつしまろの屋敷は大和国の広瀬郡散吉郷さぬきにあった。讃岐造麻呂はこの年六〇歳。竹細工を生業とする人物で、近隣の人たちからは竹取の翁おきなと親しみを込めて呼ばれている。妻はいるが子はいない。そのせいもあってか、夫婦共々リディアの事を我が子のように可愛がっていた。

「かぐやや、お客様がお見えになつたぞえ」

妻である竹取の姫おつなが奥に声を掛けると、スタタタツと廊下を走る音が響き、リディアが顔を覗かせた。

客人とは中臣史であつた。史がリディアと出会つてより二十日あまり。彼はあの日以来、毎日のようにリディアのもとを訪れていたのである。

「なに、またあんななの？」

口ではそう言つたものの、リディアはそそくさと草履を履き、出かける用意にかかつている。

「じゃあ、おばあちゃん、行ってくるねっ！」

声を弾ませリディアが玄関を飛び出すと、史は姫に頭を下げた。

「では、かぐや殿をお借りします。あ、これ、先ほど釣つたばかり

の鯉ですがよろしければ」

「まあまあ、いつもすみませんねえ」

などと数秒ほどの会話をしている間にもリディアは表で足踏みを続けている。

「何やってんのよ！ 早くしなさいよねっ！ ムービッ！ ムービッ！ ムービッ！」

史が見えない系に引きずられるように出ていくと、二人の背中を笑顔で見送りつつ、嫗は背後に声をかけた。

「居るかね、じいさんや？」

「居るぞい、ばあさんや」

「大丈夫ですかね、かぐやは」

「まあ、あの御仁は腕は確かじゃ。心配はないじやろうが……」  
その言葉を残し、嫗の背後で不意に翁の気配が消える。

「じゃあ私はこの鯉を料理して皆の帰りを待つことにしましょうかね」

嫗はそう独語して調理場へと向かった。

さて史だが、彼は二十日あまりの時を費やし、未だかぐやに求婚を果たしていない。それには彼なりの理由があるにはあった。焦って求婚し、入手不可能な品物を持ってこいと言われるよりも、彼女が真に欲するものを見極め、それを渡して求婚する方が気が利いているのではないかと思っただのである。また、そうする事でその日までに親睦を深める事もでき、一石二鳥であるとも。

しかしこれは半分以上、自分に対する言い訳でもあったろう。日に日にかぐやへの慕情を募らせ、それに比例して臆病になっていく自分自身に失笑すらしてしまうが、為す術もなく今日に至っているというのが史の偽りない実状であった。

「わしがこれほど腰抜けだったとはな……」

「ん？ 何か言った？」

「あ、いや、別になんでもない。ただの独り言さ」

そう言って苦笑を浮かべ、頭を掻いている自分の姿など、つい一

月前には想像すら出来なかった史である。

彼らはいつものように葛城川沿いを歩き、いつもの場所へと向かった。それは葛城川を眼下に見下ろす事が出来る小高い崖の上である。昔から史がひとりになりたい時に訪れていた場所であった。リディアもそこからの眺めがすっかり気に入り、今では二人にとっての憩いの場所となっている。

史とリディアはそこに腰を下ろし、涼しげに吹く横風に身を晒した。川のせせらぎ、蝉時雨、鳥の囀り。耳に飛び込んでくる何もかもが心地よい。

無言で過ぎ去る至福の時間を暫く堪能し、やがて史はリディアに問いかけた。

「前から聞こうと思っていたんだが、聞いていいかな？」

「何よ？ 聞きたいなら聞けばいいじゃない」

リディアの口調は出会った時から変わらない。では心の中はどうだろうか？ 自分が変わったように彼女も変わったのだろうか？ などと考えながら、史は口を開いた。

「そなたの黄金の髪に青い眼。書物では読んだ事がある。唐にはそういう人がたくさん居るそうだが、そなたは唐より参ったのか？」

「違うわ」

「では何処から来たのだ？」

「うーん、どうしようかしらね」

リディアはもつともらしく腕組みをして空を仰ぎ見た。史がその視線を追ってみると、天頂からやや下がった夕暮れ間近の南の空に、上弦の月がうつすらとその姿を見せ始めている。

「まあいいわ。どうせあんたは信じないでしょうから言っちゃうけど……」

リディアはそう言ってその月を指さした。

「あたしはあそこから来たのよ」

「月？」

「そうよ。それにきつと時代も違うわ。あたし、この国の歴史に詳

しいわけじゃないけど、ここがずっと過去だって事くらい分かるもの。あたしは今から何百年後か何千年後かの世界からやって来たのよ」

「何百年後、何千年後の世界？」

「そうよ。あの月にはねえ。王国があつて、あたしはその内親王なの。いえ、だったのと言うべきかしらね」

リディアはこれまでの事を史に語って聞かせた。史にとっては荒唐無稽な話ではあつたろうが、彼は黙つてそれに聞き入っている。

「つまりあたしは未来からやって来た宇宙人でその国の内親王殿下つてわけよ。どう？ 信じる？」

「ああ、信じるよ。信じるとも」

史がそう言つたその瞬間、彼は咄嗟に振り返り、背中に帯びた長刀に手をやった。リディアを庇うように自分の背後へと移動させ、彼は静かに鯉口を切る。刀が鞘から抜き放たれ、刀身が夕日を浴びて赤々と光った。

やがて木の枝をガサガサと揺さぶる音が響きだし、史はやや警戒心を解いた。こんな不器用に物音を立てる曲者はいないだろう。そう思つて暫く待つと、見知らぬ男が一人やって来た。史が知らぬその男を、だがりディアは知っていた。

「待つてくれ、怪しい者ではない」

史の警戒心を解く為、日本語で語りかけたその男はルビ・ラモン・アロネス子爵であつた。

「ルビツ！ ルビじゃないの！」

リディアは吃驚の声を上げる。ルビはリディアの姿を見、目につぱいの涙を浮かべた。

「内親王殿下、お迎えに参りましたぞ！」

それを聞き、今度は史が吃驚の声を上げた。

「そなた、内親王だったのか！」

「あんた、さつき信じるつつたじゃないのっ！」

「あ、いや、それはそうだが、あんな話、俄には……」

リディアに怒鳴られモゴモゴと口ごもる史を尻目に、リディアはルビに歩み寄った。

「あんたどうやって？ てか取りあえず……」

「ゴグアッ！」

強烈な金的蹴りがルビの股間に炸裂した。

「あの時のお返しよっ！」

ノックダウンされた時の事をリディアは忘れてはいなかったのである。ささやかな仕返しを果たし、ジャンプを繰り返すルビに彼女は問う。

「どうしてここが分かったの？」

「そ、それは……」

激しい苦痛に悶えつつ、ルビは震える手で小型探知機を見せた。

「事後報告で申し訳なき事ながら……、いざという時の為に殿下のそのイヤリングには発信器を取り付けさせて頂きました。それが役に立ったようで」

「普通だったなら怒るところだけど、緊急時だったもんね。まあいいわ、許してあげるっ」

「はっ、ありがたき幸せ。ご寛容に甘えまして、そのイヤリングについてもうひとつお伝えしたき事が……、怒らずに聞いて下さりますや？」

「怒らないから言ってみなさいよ」

「はっ、その発信器ですが、高性能盗聴器にもなっておりまして、小さなオナラの音も難無くキャッチし、ゴグアッ！」

再びの股間蹴り。ルビは膝から崩れ落ちた。

「あんたねっ！ 乙女のプライバシーを何だと思ってんのよっ！ そんなの許すわけないでしょっ！」

これはまあ、当然であろう。

「怒らないって言ったのにいいいい……」

「前言撤回は乙女の特権なのよっ！」

この一連の会話は彼ら創造主達の言葉で交わされていた為、史に

はさっぱり理解できなかったが、この成り行きにはただただ啞然と眺めるのみであった。入り込む余地すらない。しかし史にはただひとつ気になる事があった。それはこのルビという男が最初に日本語で語った、迎えに来たという言葉である。

かつて無い強烈な胸騒ぎに、史は心を乱していた。

## 第一〇話

史の不安げな表情を他所に、リディアは久しぶりに会ったルビを前に高揚していた。もう二度と月の住人たる彼らに会う事は叶わぬだろうと諦めていたのだから、これは当然と言えば当然であつたろう。

しかし約一年ぶりに再開したルビは見る影もなく窶<sup>やつ</sup>れ果てていた。目の下にはくまができ、頬の肉もすっかりと瘦け落ちている。この一年、さぞかし苦勞してきたのだらうとリディアは察したが……。

「まあこんなところで立ち話もなんです。取りあえず私が乗つてきた宇宙船へお越し下され」

そのルビがそう提案し、暗黙のうちに彼らは歩き出した。ルビを先頭にリディア、史と後に続く。

「あ、そうそう、我が妻達も殿下に一目お会いしたいと申し、付いてきておりますぞ」

「え？ 妻？」

思い立ったようにルビがそう言い。その背後でリディアが首を傾げた。彼女の記憶違いでなければルビに妻はいない。

「あんたの奥さんって亡くなったんじゃない……、ってか達つて何よ？」

「はあ、実は殿下が地球へ行つてしまわれた後、六人の侍女達の面倒を私が見ておつたのですが、つい半年ほど前に結婚いたしました」

これにはリディアも驚いた。リディアの侍女と言えはまさに粒揃い。みな美人で教養もある。それが爵位ある貴族とはいえ、ルビのような老人に嫁ぐとは信じがたい。誰が嫁いだにしてもこれは奇跡だとリディアは思った。

「マジ？ やるわね、あんた！ で、誰と結婚したのよ。セイラ？ ララア？ それともイセリナ？ あんたの好みからするとハモンかマチルダって線もあるわね。キシリアって事はないだらうし……、で、誰よ？」

「はあ、それはですね……」

言いにくそうにルビは口ごもり、短気なリディアは当然のようにキレる。

「んもうっ！ もったいぶらずに早く言いなさいよっ！」

「では言いますが、我が妻となつたのはセイラとラアラとイセリナとハモンとマチルダとキシリアです」

「ふんふん、セイラとラアラとイセ……って、全員じゃないのっ！」

「はい、そういう事になってしまいました」

創造主達に一夫一婦制などという因習はない。器量に応じていくらでも妻は持てるのだが、その器量がこのルビのどこにあるのか？ リディアには不思議でならない。

「むむむっ、やるわね、あんた。ってか、あんたが何でそんなにげっそり寝れてるのか、ようやく分かったわ。若い奥さんを一度に六人も貰っちゃったんじゃないわねっ」

ルビは背中を大きく動かして溜息を吐いて見せた。

「まことその通りでして、月曜はラアラ、火曜はハモンと、土曜まで夜のスケジュールはビッシリでして、ゆっくり出来るのは日曜しかありません」

「なんだか地球人達の天地創造神話みたいねっ」

天地創造とは、旧約聖書の創世記に書かれているもので、神は一日目に光を作り、昼と夜が出来た。二目に空を……というあれである。こうやって神は六日間でこの世界全ての宇宙万物を創造し、七日目に休んだ事から、後に一週間〓七日間という単位が出来たのだという。

しかしルビは神よりも自分の方が遙かに偉大だと言い張った。

「神は日曜日に休んだ後、次の月曜日に再び光を作ったりはせなんだはず。私の場合、それが永遠に続くのですぞ！」

「うーん、まあそれは大変だろうけど……って、あんたっ！ 清らかな乙女相手にさっきからなんて話題ふってんのよっ！」

今さらのように叫び、リディアは怒りとは別の要因で顔を真っ赤



に染め、臨戦態勢へと突入。その殺気を背中で察知したルビは慌てて逃げ出した。

「そんなご無体なっ！ 話題をふったのは殿下ではござりませぬかつ！ あっ、股間はやめてっ！ そういうわけで大事な股間なのですじゃーっ！」

「何が大事な股間よっ！ そんなもんバットもボールも捻り潰して……っ、あんたっ！ 清らかな乙女になんて事言わせんのよっ！」  
「ごっ、ご無体過ぎまするーっ！」

いつしか追いかけっこへと変貌したりディア達の後に続いて史も走った。狭い山道を抜け、やがて木々に覆われた広場へとたどり着く。そこは史も見知った場所ではあったが、今までには無かった、これまでに見た事も聞いた事もない物体がそこには存在し、史は愕然とそれを仰ぎ見ていた。

ちよっとした屋敷ほどの大きさがあるその物体は、淡い光を発している。

「かぐや殿、これはいったい！」

「ああ、これは小型宇宙船よ。地球人達はUFOって呼んでるそうだけど、ってこの時代にあんたに言っても分からないわね」

逃げ損なった憐れな老人の股間をゲシゲシと踏みつけながら、リディアがそう言っている間にも、そのUFOとやらの一部が開いて中から数人の女性が顔を覗かせた。

「みんなーっ！」

嬉しそうにそう叫び、リディアが手を振りながら駆けだすと、向こうからも六人の女性達が降りてきた。

「でんかーっ！」

久しぶりの再会に侍女達、もとイルビの妻達は泣いていた。一時はリディアを死んだものと諦めていたのだから感激もひとしおであったろう。

ワイワイキャピキャピガヤガヤと、女性達が史には理解できぬ言語で話に花を咲かせている。その様子を眺め、史は新鮮な驚きでい

っぱいだった。見た事もない着物に身を包んだ女性達。髪の色もリディアと同じ黄金色もあれば赤やら茶やらオレンジやら。遠目に見える瞳の色も、青やら緑やら灰色やら色とりどりである。

暫くは呆気にとられていた史だが、取りあえず満身創痍のルビに肩を貸し、女性達の方へと歩を進めた。

「まあ、ルビ様！」

史に助けられ、ひよこひよここと歩くルビの姿を見て、ひとりの妻が叫んだ。

さらに別の妻がリディアに問う。

「まさか殿下、ルビ様の股間をお蹴り遊ばしたのでは？」

「うん、蹴っちゃったし踏んじやった」

悪びれる事なくリディアがあっさりそう言うと、ルビの妻達は色めき立ってリディアに詰め寄った。

「まあなんて事を！」

「股間だけはやめてあげて下さい！」

「使い物にならなくなったらどうなさるんですかっ！」

「私たち、あれがないともう生きていけませんのに！」

この剣幕にはさすがのリディアもたじろいだ。

「うつ……ごつ、ごめんね」

「まあまあ、おかわいそうに……」

ひとりの妻がそう言ってルビの前に跪き、リディアの目の前でルビの股間を愛おしそうにさすりだした。するとどうした事か、いや当然というべきか、ルビの股間は徐々に、だが確実に膨張していった。それを見て妻達は安堵の溜息を漏らす、ここではい終了とはいかなかった。リディアが見ていると、驚く事にその膨張は止まるところを知らず、どんどん大きくなっていく。ムクムクとムクムクとただひたすらに膨張を続け、やがてズボンのボタンが弾け飛んだ。すると圧力に屈したファスナーは自動的に下がり、必然的に顔を覗かせたその物体の、あまりの巨大さにリディアは仰天した。

「なっ、なにこれっ！」

顔を背ける事も忘れ、ルビの一物を食い入るように見てしまったリディアは途中で気付き、慌てて顔を背けるが……、しかしついつい横目で見てしまう。

あれかつ！ あたしの侍女達をたらし込んだのはあれかつ！ あれなのかつ！ 何となく事情を察したりディアであった。だがこの後、リディアの視界の片隅でとんでもない事が始まった。

「今日は火曜日だから私ねっ！」

弾んだ声でそう言ったひとりの妻がルビの足元に跪き、なんとルビのデカ物をカプツと頬張ったのである。リディアはさらなる度肝を抜かれ、史も目のやり場に困った様子で上を向く。リディアは真っ赤な顔を背けたまま、震えて照準の定まらない人差し指を突きつけて声を張り上げた。

「あつ、あ、ああつ、あんたっ！ 人前で何やってんのよっ！」

「仕方がないのです」

別の妻がそう言った。その台詞には似つかわしくない誇らしげでうつとりとした笑顔である。

「ルビ様は一度大きくおなりになると、射精させて差し上げなければ小さくおなりにならないのです」

「そうなんです。このままではスポンをお穿きになれないのです。治して差し上げないと」

「これは立派な治療行為なのです。決して破廉恥行為ではありませんせん」

「こつ、これのどこが治療なのよっ！」

治療を行う看護師と言うよりは、変な宗教にハマった伝道師のように彼女達は言う。恍惚とした表情の中で目だけが確信に満ちているというアンバランスさ。貞淑だった侍女達を何がこうも変えてしまったのか。決まっている。あれだ。あれしかない。そのあれの方からも声がした。

「ふふいふあふえんふえいふあ、ふあんふあつふえふあやふふ」

「口に物を入れて喋るなーっ！」

もう想定外の事が立て続けに起こりすぎて何が何だか分からなくなってくるリディアであった。これは夢じゃなかるうかと何度も自分のホッペタをパシパシ叩いていると、妻のひとりから提案があった。

「この治療には時間を要します。殿下は船の中でお待ちになられてはいかがですか？」

まだ治療言うかつ！　とリディアは叫びたい気持ちを辛うじて堪えた。どうせ言ってもよつてたかつて破折屈伏はしゃくつぷくされるだけであろう。船で待てと言うならそうさせてもらった方がこちらの精神衛生上にも良いというものである。

「そつ、そうさせてもらうわつ！　行きましょ、史！」

こうして妻のひとりが案内に立ち、彼女達は宇宙船へと向かう。リディアが最後にチラリと振り返って見ると、ひとりの妻がせつせとフェラチオしているその横で、別の妻が裁縫道具を取り出してズボンにボタンを縫い付けていた。実に手際が良い。こういった事が度々行われているという事だろう。半ば呆れ、半ば感心し、リディアは船内へと足を踏み入れた。

これまでの一連の出来事は、リディア以上に史の方が驚きは大きかったのではなかるうか。急に見知らぬ男が現れ、リディアと聞いた事もない言語で話し始めたかと思うと格闘沙汰へと発展し、さらに見知らぬ物体が急遽出現。そこから何人もの美女が出てきてそのひとりが見知らぬ男の陰茎を咥え、今また見知らぬ物体に入ってみると、そこには見た事もない調度品の数々が並んでいる。

応接室へ通された後、史は落ち着かなげに部屋中を歩き回ってそれらの品々に見入っていた。リディアの方はソファ―に腰掛け、出されたコーヒーを堪能している。

「かぐや殿、この小型宇宙船と言ったか、これはいったいいつ作ったのだ？　数日前に通った時は何もなかったはずだが」

「ああ、作ったというより飛んできたのよ。これは空を飛ぶ乗り物なの」

「空を飛ぶ？ そんなバカな」

「まあ口で言っても信じていないでしょうね。後で分かるわよ」

リディアが見るところ、この宇宙船はルビが個人所有するものようであった。アロネス子爵家の紋章があちこちに掲げられているので、これは一目瞭然であろう。その仕様からしてレジャー用といったところであろうか。古いが中々手入れが行き届いていて、ルビの几帳面さを垣間見る事が出来る。

「いやあ、それにしても驚く事ばかりだ」

ようやく史がソファーに座り、好奇心に満ち満ちた視線をリディアに送った。

「そなたの国の女性はみんなああなのか？ その、人前でも平気でああいう……」

「んなわきやないでしょっ！ あれは特別よ特別！ 特別天然記念物よっ！ 保護したいくらいだわ、まったくっ！」

侍女達の変わり果てた姿を思い出し、沸々と怒りがこみ上げてくるリディアであった。彼女達を籠絡したあの超巨大な猥褻物が諸悪の根源なのだろう。これまでに何十回と蹴り上げておきながら、蹴り潰せなかった事が悔やまれる。

やがて、その諸悪の根源をズボンに潜ませる男、ルビ・ラモン・アロネスがすつきりした顔で現れた。

「いやあ、お恥ずかしいところをお見せいたしました」

「恥ずかし過ぎるわよっ！」

そう言っただけで睨みつけるリディアではあったが、あの一物を見せつけられたからであろうか、この年寄りが化物じみた存在に思えてきて圧倒感さえ覚えてしまう。やはり世の女性は巨根に弱いのだろうとか、自分はそんなものに誑かされ<sup>たがら</sup>ないぞとか、あれこれ考えていると、その巨根の主が史の方へ顔を向け、日本語で語りかけた。

「挨拶がまだでしたな。私、メシヤム王国にお仕えするルビ・ラモ

ン・アロネスと申します。リディア内親王殿下がお世話になっている様子。感謝に堪えません」

「それがしは姓を中臣、名を史と申す者、以後お見知りおき下されたく」

史が立ち上がってそう返すと、ルビは頷いて妻達を請じ入れた。

「私はこれから殿下と話さねばならぬ事があります。その間、史殿には我が妻達にこの船内を案内させましょう」

そう言われ、史がリディアの顔をうかがい見るとリディアが頷く。「ではそうさせていただきますでしょう」

史達が部屋を出ていくと、ルビはソファーに腰掛けた。いつになく深刻な表情を浮かべているルビを見て、リディアも緊張の色を隠せない様子である。

ルビは語り出した。この一年間に月で起こった事。今現在、アツプマン公爵の専横により、国がまさに乗っ取られんとしている事。そのアツプマンがリディアの存在を知り、暗殺を企んでいる事。アツプマンに抗する創造主達が地下組織を築き上げ、リディアを旗頭に迎えようとしている事。……等々。

「何卒、殿下におかれましては我らの旗頭として王家の復興にご尽力くだされたく」

そう言って頭を下げるルビを目の前に、リディアの心は揺れていた。

もう二度と祖国へ戻る事は叶わぬと諦め、この地で暮らしていくと心に決めていたリディアである。自分を大事にしてくれる竹取の翁や嫗とも別れるのは辛い。きっとあの二人もリディアが居なくなれば悲嘆に暮れるであろう。僅か一年ではあるが、もはや三人は切っても切れない家族同然の絆を築き上げていたのである。史との事もそう。最近では史に心惹かれるものを感じていたリディアである。もう会えなくなるのかと思うと胸が締め付けられるような切なさを感じる。やはりこの地を去るのは辛い。辛すぎる。

「あたし……、帰れない……」

ぼそりとリディアはそう言った。

「な、なんと！ 王国をお見捨てになるのですか！」

「だって……、だって……」

リディアの頬を涙が伝う。彼女の心は激しく揺れていた。地球への未練だけであれば話は簡単、この涙は無かったであろう。しかし月にも未練があり、それがこの落涙となっていたのである。その未練とはフェイ・トリニダッドであった。

フェイに会いたい！ もう二度と会えないのだと自分の心に言い聞かせて来たが、会えるとなると無性に会いたかった。フェイに会いたい。会ってもう一度自分の気持ちを確かめたい。

このリディアの心の機微をルビは正確に洞察した。意味ありげな声色で彼は言う。

「月へ戻ればあのフェイにも会えまするぞ」

「だつ、誰があんなやつ！」

リディアは慌てたようにそう叫んだ。フェイの事となるといつもこうだった。頑なに自分の心を知られまいとフェイの悪口ばかり言う。亡き国王アレクサンドルやルビからしてみればバレバレなのだが……。

先ほどまでの泣き顔もなんとやら。リディアの涙は一瞬にして蒸発した。

「あつ、あんなやつが居る月になんて帰りたくないんだからねっ！」

「なるほど、ではフェイが居なくなれば月へ帰ってもいいと？」

「そつ、そつ、そうよっ！」

「分かりました。ではフェイには消えていただきましたよう」

さらりとルビはそう言つて、不気味な笑顔を作つて見せた。これにはさすがのリディアも不安を隠せない様子である。

「き、消えるつて、どどつ、どついう事？」

「消えるとはつまり死んでもらうという事ですじゃ。国家安寧の為に致し方ござりますまい」

リディアは焦った。状況が状況なので彼らならば平気でやりかね

ないと思ったのである。

「べっ、別にそこまでする事ないんじゃないかしらっ、あっ、あいつはム力つくやつだけど、そっ、そそっ、そうねっ、あいつがあたしに土下座して謝れば、ゆ、ゆゆっ、許してやってもいいわよっ！」  
すっかりルビに乘せられてしまっリディアであつた。



## 第一一話

地球から見た月の裏側に位置する南極エイトケン盆地。それは太陽系内でも有数の巨大クレーターであった。直径約二五〇〇キロメートルにも及ぶその南極エイトケン盆地には、創造主達が住まう大小合わせて約五十ものドーム群が存在する。

王都エネオポリスとは、狭義においては王宮や政府の主要機関が置かれた中央ドームの事を言い、広義においてはこのドーム群全ての総称でもある。

そのドーム群から西へ一五〇キロメートル、もはやエネオポリスとも呼べぬその辺鄙な場所にポツンとひとつのドームがあった。犯罪者収容ドーム。そう呼ばれるそのドームは、文字通りいくつもの刑務所や強制労働施設などが入ったドームである。

その一画には新たに作られた第一級国事犯収容施設なるものが存在し、現在は長老院議会の長老達や、宰相アップマンに逆らった貴族など、それなりの身分を有する者達が収容されていた。

彼らはいちおうの礼節をもって遇されており、各々それなりの広さと設備を整えた個室が与えられ、私物の持ち込みや面談者との面会なども比較的自由で、施設の外に出られぬ以外は何不自由ない生活を送っている。

宰相アップマンは目的の為なら手段を選ばない男であり、反対者を許容しない絶対者ではあったが、その反対者に対して必要以上の苦痛を与えるような事はしなかったのである。

その経緯からして、ここに収容されている者はそのほとんどが老人や年配者であったが、その中にただひとり、二〇代の若者がいた。黒い髪と黒い瞳を持つ二七歳の青年、フェイ・トリニダッド准将である。

「おい、看守くん、先週アマゾンで購入したDVDがまだ届かないんだが、どうなってんだ？」

「さあ、タイトルは何ですか？」

「三本あるんだ。『ハッピー巨乳イヤーツ!』ってやつと『巨乳O  
Lのいけないアフターファイブ』ってやつと『巨乳シネマパラダイ  
ス』ってやつなんだが」

「ちょっと調べて来ますよ。しかし閣下はほんとに巨乳が好きです  
ね」

「当然だろ、お前は嫌いなのか？」

「もちろん好きですよ、へっへっへ……」

「そうだろうそうだろう、ふっふっふ……」

国王派として二五六会戦を戦ったフェイがなぜこんなところに収容されているのかというと、それにはちょっとした事情があった。

フェイは当初、その勇戦が認められて少将に昇進を果たしたのであるが、とある式典でアップマン公爵と顔を合わせてしまったのが運の尽きであった。その席上、フェイはその欠点を遺憾なく発揮して見せたのである。つまり、相手に向かって昂然とその非を鳴らしたわけであるが、彼はこれまでのアップマンの行状を散々非難した挙げ句、卑劣漢に始まり果てはうんこたれに至るまで実に四八もの悪口雑言を並べ立てたのである。これには泰然自若としたアップマンもこめかみに血管を浮かび上がらせて大激怒した。フェイは直ちに拘束され、再び准将へ降格の上、分艦隊司令官の任を解かれて予備役編入となり、この収容施設へ放り込まれたというわけである。軍籍を剥奪されなかったのは奇跡と言えるが、実はこれにはアップマンの口利きがあったという。ああいう奴は嫌いではない。彼はそう言っ  
てフェイを軍に留め置くよう指示したという。口は悪いがその能力には定評のあるフェイである。いずれは自分に屈服させ、手駒にしようとの腹づもりなのだろうと軍上層部では理解した。

何はともあれここの一年、フェイは優雅な生活を送っていた。少なくとも本人は満足しているようである。日がな一日アニメやAVが見放題。ギターの腕も上がったと喜んでいる。主にアニソンを完コピし、その動画をユーチューブにいくつもアップしていた。最近で

はその道の人々からはちょっとした有名人となっている。  
しかしその優雅な生活も終わりを迎えようとしていた。

フェイが看守と巨乳談義に花を咲かせていたまさにその時。それは爆発音で始まった。

「なんだ？」

「なんでしょうね？」

そう言い合っている間にも、ビームライフルを手にした十名ほどの兵が突入して来た。彼らはまず看守にその銃口を向け、そして後から悠然とやって来た指揮官らしき男がフェイに向かって敬礼を施した。

「フェイ・トリニダッド閣下でいらっしやいますね？」

「そうだが？」

「小官はスカル・ファン・ロペス大尉。グリフィノス准将麾下の技術将校です。トリニダッド閣下を救出に参りました」

「救出？ 俺は別に救出してほしくなどないんだがな」

このフェイの反応はファン・ロペスにとって予想外ではなかった。グリフィノスはこの可能性を予期していたのである。対処方もロペスは聞いていた。

「そうですか。では言い方を変えます。フェイ准将。あなたは私たちの捕虜です。一緒に来ていただきましょう」

「いやだと言ったら？」

「人質を殺します」

「人質？ そんなもんが何処にいます？」

フェイがそう言うのとロペスは看守を指さした。フェイは笑止だと言わんばかりに余裕の表情を浮かべて見せる。

「おいおい、その看守に人質の価値があるとも思ってるのか？」

「では試してみましょう。おい、その看守の足を撃て」

ロペスがそう命じ、兵のひとりが銃口を看守の足に向けた。そして今まさに引き金を引かんとしたその時。

「分かった分かった。どうやら俺の負けのようだな」

フェイは己の敗北を素直に認めた。ロペスは勝ち誇るでもなくフェイに頭を下げ、急ぐよう促す。

「ではご出立の準備をお早く」

「やれやれ……」

フェイは本棚からいくつかの本やDVDを選んでバッグに詰め、ギターケースを肩に担いだ。プロのミュージシャン目指して上京する地球人の様だと自分の姿を批評し、姿見の前でポーズなどっていると、ロペスから早くしろと催促が入る。再び『やれやれ』と呟くフェイであった。

振り返って見るとまだまだ持つて行きたいものはいっぱいあるが、今はこれがせいっぱいであろう。フェイは去りぎわ、残していくもの全てを看守に譲渡した。

この後、フェイが連れて行かれたのは戦艦グランドキャラバッシュであった。会戦のうちに損傷した部分はすっかり修理され、今では近衛艦隊の旗艦となっている。

救出というよりはほぼ拉致に近い形で連れてこられ、やや無然とした表情のフェイをにこやかに出迎えたのは、隻眼の司令官アレン・グリフィノス准将であった。

「よく来たな、フェイ。まあ寛いでくれ」

「寛げだど？ よく言っぜグリフィノスのおっさんよう。これはいつたい何のマネだ？」

「いや、何。お前にも俺達の仲間になつてもらおうと思つてな。それでこうやって招待したわけだ。ついでに言つとくと俺はまだおっさんじゃないぞ」

「よく言っぜ。三十過ぎればじゅうぶんおっさんだろ。てかあんたの場合、見てくれがおっさんなんだよ。自覚してないのか？」

フェイは不機嫌そうにソファに腰を下ろした。そこは士官専用ラウンジルームのソファであり、奇しくも会戦終了後にコルトが

腰掛けたのと同じ場所であった。グリフィノスはあの時と同じようにキョロキョロして葉巻を啜え、同じようにフェイにも葉巻を勧めた。

「おっさん議論はひとまず置くとしよう。で、話は聞いたか？」

「ああ、ここへ来る途中、あの技術将校の大尉から色々とな。技術士官なのにこんな事までやらされてるんだと散々愚痴を聞かされたぜ」

「まあ、あいつは各方面に能力のある多才な男だからな」

そう言っただけ、グリフィノスは給仕が運んできたコーヒーを一口啜った。フェイも釣られるようにカップを手にする。

「しかし、どれもこれも驚く話ばかりだったぜ。あの殿下が生きていた事もそうだが、なんとタイムスリップしてたとはな」

「ああ、それを知った時は俺達も驚いたさ。何はともあれ生きていて下されて、本当に良かった」

「ああ、それは俺もホツとしたな。まんざら知らん仲でもないしな、あの嬢ちゃんとは。で、あんたら、あの嬢ちゃんを担いでアップマソンの野郎を引きずり下ろそうと思ってるんだろ？」

「ああ、その為には殿下にお戻り頂かねばならぬ」

「聞いたぜ。ルビのじいさんが迎えに行ったが不調だったんだってな。万事休すってわけか？」

「いや、方策はある。これを見てくれ」

グリフィノスはポケットから小さなカードのような物を取り出してテーブルの上に置いた。それは立体映像投影装置であった。グリフィノスが操作すると、カードの上にリディアとルビの姿が浮かび上がった。地球でのルビとリディアの会話が録画されていたのである。

「あいつ、この一年間で全然育ってないな。特に胸が。もうあれは一生あのままだな」

などとフェイが不敬な事を言ってる間にグリフィノスはキュルキユルと終盤部分のところまで早送りした。改めて二人の会話が流れ

出す。

「何卒、殿下におかれましては我らの旗頭として王家の復興にご尽力くだされたく」

「あたし……、帰れない……」

「な、なんと！ 王国をお見捨てになるのですか！」

「だって……、だって……」

「月へ戻ればあのフェイにも会えまするぞ」

「だって、誰があんなやつ！」

「あつ、あんなやつが居る月になんて帰りたくないんだからねっ！」

「なるほど、ではフェイが居なくなれば月へ帰ってもいいと？」

「そっ、そっ、そうよっ！」

「分かりました。ではフェイには消えていただきましょう」

「き、消えるって、どどっ、どういう事？」

「消えるとはつまり死んでもらうという事ですじゃ。国家安寧の為に致し方ござりますまい」

「べっ、別にそこまでする事ないんじゃないかしらっ、あつ、あいつはム力つくやつただけど、そっ、そっ、そうねっ、あいつがあたしに土下座して謝れば、ゆ、ゆゆっ、許してやってもいいわよっ！」

ここでグリフィノスはスイッチを切り、大量の汗を滴らせているフェイの顔を覗き込んだ。

「と言うわけだフェイ。お前、ひとつ地球へ行って土下座して来い」「アホかっ！ 何で俺がそんな事をせにやなんのだ！」

フェイはそう叫んだが、グリフィノスはそれに対して何も言わなかった。葉巻の煙を吐き出し、コーヒーを啜り、また葉巻の煙を吐き出し、コーヒーを啜り……。グリフィノスはただ黙って待った。フェイに選択肢のない事を、グリフィノスは知っていたのである。

やがてフェイは葉巻の煙に混じらせて、諦めという名の大きな長嘆を吐き出した。

「ふん、死ぬか行くかの二者択一かよ。分かったよ。行くよ。行きやあいんだろ行きやあ」

「では頼む。ルビ殿が言うには中臣史という男が殿下とは仲が良さしい。部下も大勢いて頼れる御仁なのだそうた。地球へ降りたらずはそこを尋ねるがよからう」

グリフィノスはそう言つて満面に意地の悪い笑みを浮かべて見せた。おっさんと言われた事へのささやかな仕返しであつた。

「どうしたの？ やけに暗いわね。まるで昔の史に戻っちゃったみたい」

「そうかな？ そう言うそなたの方こそいつもの元気がないようだが？」

いつもの小高い崖の上でのリディアと史の会話である。ルビが尋ねて来た日から二日。あの日以来、二人はずっとこんな調子であつた。

お互い何か話さねばと思うのだが、そう思えば思うほど話題が出てこない。会話とはそういうものである。

話題に窮した史はこれまで敢えて聞かなかった事に触れてみた。

「なあ、そなたに求婚した四人だが、いずれはその誰かと結婚するのか？」

「しないわよ」

間髪入れずリディアが返す。

「しかし、そなたが言つた品物を持ってくれば結婚しないわけにはいくまい」

「ああ、それは大丈夫。だってこの時代じゃ絶対に手に入らない物ばかりだもん」

やはり 史の予想は当たっていた。

「どうしてそんな意地悪を？」

「だってあの四人、断つても断つてもしつこいんだもん。それに身分を鼻にかけて如何にも貰つてやるぞつてな感じでさ。鼻持ちならないつたらありやしない」

「なるほど、そうだったのか……」

ここでしばらく話題が途切れ、何を話そうかと考えた末、やや唐突に史が聞いた。

「ではそなた、好きな男性はいるのか？」

「い、いいつ、居ないわよっ！　誰があんなやつ！」

「あんなやつ？」

「なっ、何でもないわっ、忘れてちょうだい」

急の事にて口を滑らせた感のリディアであったが、なぜかこういう事にだけ疎い史はポケットとしている。それを見てリディアは追加発言した。

「でも嫌いなやつなら居るわっ！」

「だれ？」

「フェイよ、フェイ！　フェイ・トリニダッドよっ！」

リディアはフェイの悪口を言っていると不思議と心が落ち着く事を知っている。史相手にそれを試みようとしたわけである。この後、史は散々フェイとやらの悪口を聞かされる羽目になった。

「……ってそれでねっ、あいつったらこう言ったのよっ！　乳臭いくせに乳がないって！　ええ、ええどうせあたしや子供ですよ。小さいですよ。胸ありませんよ。でもあなた、乳臭いくせに乳がないって酷いと思わない？　それも人前でよ！　家臣の分際ですよ！　信じられるあなた？　って、聞いてんのあなたっ！　まあいいわ、続けるわよっ！　それでねそれでね、あいつつたらね……」

機関銃のように捲し立てるリディアの話に相槌を打つ暇もなく、かと言って相槌を打たなければ「聞いてんのがあなたっ！」と怒鳴られる始末。史は一気に疲れ果ててしまった。約三〇分間の一方的な銃撃戦を終えた時、史は乾季で干上がった川底に横たわる魚のようにぐったりとしていた。一方でそれとは打って変わってリディアの方は滝の急流を泳ぎ登らんとする錦鯉のようにピチピチとした元気を取り戻している。

この時、史は思った。リディアはそのフェイとやらをとて憎悪



しており、悪口を言う事で気が晴れたのだらうと。後世、博学多識、神算鬼謀を謳われる中臣史ではあったが、女心に関してはまるでダメ君なのであった。

なのでこの後、史は更なる勘違いをしてしまう事となる。彼はかねてより聞こうとしていた事を尋ねた。

「そなた、今一番ほしいものは何だ？」

「……フェイのハート」

ぼそりとリディアはそう呟いた。これまた口を滑らせた感のある発言であるが、慌てて訂正しようとしたリディアの前で史は首を捻っている。

「フェイの鳩？ 鳩とはあの飛ぶ鳩の事か？」

ホツとしつつも説明を求められ、リディアは返答に窮した。まさか正直に心だとは言えまい。なのでリディアはこう答える事にした。

「鳩じゃないわよつ。ハート。心臓よっ！」

「心臓か……、なるほど、了解した」

史の瞳に静かな殺気が漲った。

## 第十二話

月の王都エネオポリス、とりわけ軍務省内ではささやかな騒動が持ち上がっていた。アレン・グリフィノス准将率いる近衛艦隊が命令もなしに王都を出撃したのである。言ってみればこれは出奔であり、宰相アップマン公爵に対する敵対行動である事は誰の目にも明らかであった。このグリフィノスの行動に大半の創造主達は「まさか」と叫んだが、一部の者達にとって、それは「やはり」であり、そう叫んだ者達は、グリフィノス逮捕に向けて今まさに動きだそうとしていた矢先だったので、みな軍靴で床を蹴り上げて歯噛みしたという。

それに先立つ予備役准将フェイ・トリニダツドの国事犯収容施設脱走も、グリフィノスが手引きしたのではないかとの噂が囁かれ始めていた。これはその情報を知る一部の者にとっては既成の事実であつたが、それを知らぬ者達も憶測に基づき正鵠を射ていたわけである。もつとも一連の流れ、フェイとグリフィノスの関係、その両者を推し量れば外しようのない大きな的ではあるのだが。

この騒動に関連し、宇宙軍第二艦隊分艦隊司令官コルト・パルタガス准将が軍務省にある第二艦隊司令部オフィスへの出頭を命じられたのは、グリフィノスの出奔から一二時間が経過した、翌日の早朝であつた。

二五六会戦の後、アップマン公爵は反乱に加担した者は処罰するがその下で働いた者は罰せずとの声明を發した。分艦隊司令官クルスの高級士官はその関与が疑われ、コルトも一時は拘禁されるが、その後、反乱軍の血判状とも言ふべき名簿が発見されるに至り、コルトの無罪は証明された。しかしコルトの場合、国王アレクサンドルの死に直接関わっており、彼を罰すべしとの意見も少なからず存在したが、これはグリフィノスの奔走により事なきを得る。

「パルタガス准将は与えられた職責を全うしたに過ぎず、その勇戦

を処罰の対象となす事は王国軍憲章の理念に反する。そもそも陛下の死は僚艦の爆沈という不慮の事故によるものであり、その後、降伏した国王派将兵の救助、負傷兵への治療など、パルタガス准将は率先して実行し、数多の将兵がその命を救われている。この彼の行動のどこが非難に値し、尚かつ処罰の対象となす正当な理由やあらん」

このグリフィノスの弁舌は正論であり、誰もが首を楯に振らざるを得なかった。斯くしてコルト・パルタガス准将は処罰を免れ、分艦隊司令官の地位を保っていたのである。

コルトが第二艦隊司令部オフィスへ到着したのは、出頭を命じられてからちょうど一時間後であった。宇宙軍第二艦隊司令官ディオ・ディプロマティコス中将の太りきった醜惡な姿が彼を出迎える。「まあ掛けたまえ」  
「はっ、では失礼します」

このディプロマティコス中將はアップマン公爵の甥に当り、反乱後に処刑されたクラムゾン・ボウザ中將の後任として艦隊司令官に任命された男であった。コルトの見たところ、このディプロマティコスは軍人と言うよりは政治家に向いた小才子であり、権勢欲と体脂肪が異常に肥大した単なる俗物に過ぎない。

そのディプロマティコスが俗物の名に恥じぬ俗っぽい声を響かせた。

「グリフィノス准將の出奔は聞いておるな？」

「はい、昨日」

「ではこれは知っておるかな？ 先の会戦のおり、やつが時空震を発生させ、内親王殿下をお逃がし申し上げたという事を」

「それは初耳ですな」

「初耳か……、私の耳にしたところでは、グリフィノスが内親王殿下を逃がし、貴官がそれを黙認したとの情報もあるのだがな」

「さて、一向に存じませんな。そのような流言を閣下はお信じになられたので？」

これまでの質問は出頭を命ぜられた段階でコルトも予想していた。嘘の下手なグリフィノスなどとは違い、コルトは完全にしらを切り通す自身がある。しかしディプロマティコスの方もこのコルトの対応は予期していたようであり、焦れた様子もなく薄ら笑いさえ浮かべていた。

「まあいい。貴官が素直に喋るとは私も思っていない。将官であり伯爵家の嫡子たる貴官を拷問に掛けるわけにはいかんが……、他の者は違うぞ」

そう言ってカード型の立体映像投影装置をテーブルの上に置いたディプロマティコスは薄ら笑いをさらに卑げたものへと変貌させた。「貴官の副官。名をなんと叫ぶたかな？」

ここで初めてコルトの表情に狼狽の色が走る。

「貴様、メアリーに何をした？」

「そうそう、メアリーだったな。見るかね？ リアルタイム映像だ」  
ディプロマティコスがスイッチを入れると、立体映像投影装置の上にメアリーの姿が浮かび上がり、その無残な彼女の姿にコルトは絶句した。両腕を縄で縛られ天井から宙吊りとなったメアリー。身に着ける衣類は全てはぎ取られ、赤裸々となったその全身にはいたるところに激しいムチの痕があった。目は虚ろで口からは涎を垂らし、床には漏れ出た小水が水たまりを作っている。

ディプロマティコスが指を鳴らすと、そのメアリーに男がふたり近づいた。そして前後から挟み込むようにメアリーと繋がり、前後の穴を激しく突き上げる。この時、彼女の口から零れ出たのは悲鳴ではなく甘美な喘ぎ声であった。

この瞬間、コルトは拳をテーブルに叩き付けた。一瞬のスパークの後、立体映像投影装置が沈黙する。

「貴様ら、メアリーに薬を……」

「まあ落ち着きたまえ」

勝ち誇った様にふんぞり返るディプロマティコス。その脂ぎった顔を粉碎してやりたい衝動に駆られつつもコルトはそれを辛うじて

押さえた。激発する事で事態が良い方向に進む事などないのだという事をコルトは知っている。これまでのディプロマティコスのやりようを冷静に判断し、コルトはある結論に達した。

「で、私に何をしろと？」

「うむ、さすがはパルタガス准将。話が早い」

ディプロマティコスは満足そうに頷いた。

中臣史は現在、乳父めのとである田辺史大隅たなべのふひとおおくまの別宅を居としていた。そこは彼の住いであると同時に義賊団のアジトでもある。

その日の朝、史は大勢の配下をそこへ集め、ある命を発した。  
「野郎ども。近々フェイ・トリニダッドという男がこの地へやってくるかもしれん。見つけ次第その男をここへ連れてこい」

この命令に手下どもは顔を見合わせる。

「変わった名前ですが、何か特長はないんですかい？」

「服装が我々とはまったく違う。そういうやつを見付けたらまずそいつと見て間違いないだろう」

「ふえいとりんだど……」

「へいとりにだどう……」

手下どもが初めて聞く発音し辛いこの名を口々に反芻していると、門番がやって来て告げた。

「あのう、ふいとりにだあどと言う御仁が尋ねて来ておりますが……」

……

フェイはこの時、黒を基調とした王国軍の軍服を身に纏い、ギターケースを肩に担いでポストンバッグ片手に中庭に立っていた。史はその姿を一目見て、それがフェイだと確信する。

「ご貴殿がフェイ・トリニダッド殿か？」

「ああ、そうだ。ここを尋ねるように言われてな。あんたが中臣史さんかい？」

「如何にも」

史はそう答えて早々に刀を抜いた。全身に殺気を漲らせ、その切っ先をフェイに向ける。

「ご貴殿には何の恨みもないが、その命、ちょうだいつかまつる」「ちよつと待て。そりやどういう事だ？」

予想外のこの展開にフェイは困惑した。頼れと言われて頼つて来たらその相手から殺すと言われたのだからこれは当然であろう。剛胆なフェイだからこそ困惑程度で済んでいるようなものである。

この後、史はその理由の一端を覗かせた。

「かぐや殿への数々の暴言、心当たりがないとは言わせぬぞ」

「かぐや？ ああ、リディアの事か。いや、そりやまあ、心当たりはあり過ぎるくらいだが……、お前、何か勘違いしとりやせんか？」

「問答無用！ おい、この男に刀を貸してやれ」

史が手下に命じると、ひとりの男がフェイに刀を差しだした。

「なるほど、あくまでも正々堂々としてか？」

「その通りだ。手下どもには手は出させん。貴様が勝てば生きてここを出られると約束しよう」

「ふーん」

受け取った刀をしばらく眺め、フェイはそれを地面に突き刺した。後でお土産に貰って帰ろうなどと考えながら懐にあるレーザー銃を抜く。

「武器なら俺も持つてるんだがな」

そう言つてフェイは一発ぶつ放した。史達が見た事もない眩い閃光が走り、遠くにあるかなり太いはずの木の枝が音もなく切断され、バサリと地面に落ちた。史の手下達は驚いて数歩後ずさる。腰を抜かして尻餅をついている者もいた。史はさすがに後ずさりこそしなかったが、その額に汗を浮かび上がらせている。その眉間に銃口を向け、フェイは戯けたように口を開いた。

「と言うわけだ。このままじゃお前さんに勝ち目はない。かと言つて刀対刀じゃ使った事のない俺に不公平ってもんだらう。そこでだ

……」

そう言つてフェイは銃を放り投げ、挑発するような笑みを史に向けた。

「素手つてのはどうだ？　これが一番公平だと思うが？」

「よかるう」

史も応じた。このフェイに自分と似た矜持を感じ取り、その意気に応えたわけである。史は刀を鞘に納め、手下にあずけた。

こうして取っ組み合いが始まったわけであるが、まあ詳しい経緯は割愛。要するに殴る、蹴る、投げる、の野蛮な戦いが繰り広げられたわけである。そして両者はほぼ互角のまま約二〇分間にも及ぶ死闘を演じ、フェイと史、共にダブルノックアウトという結末を迎えるのであった。

「どうします史様。こいつ殺<sup>や</sup>っちゃいますか？」

「いや、わしが勝ったわけではない。それはならぬ」

息も絶え絶えに史はそう言い、フェイを部屋へ運ぶよう命じた。

その後、史はしばらく眠りに落ちた。目が覚めたのは正午過ぎ。三時間は寝ていた事になる。この時、屋敷の中で音楽が流れていた。なるほどこの音で目が覚めたのかと史は今さらのように気付く。初めて聞く楽器の音。初めて聞く旋律。聞き慣れぬその音色に誘われて、史はフェイの部屋を覗いてみた。

楽器を奏でていたのはフェイであった。

「変わった琵琶だな」

「ああ、これは琵琶じゃない。ギターってんだ。こいつはフェルナデスZ〇 3。通称、フェルナデスの象さんだ」

「な、なに？」

史の目の色が変わった。

「これがフェルナデスの象さんだと？」

「ああ、知ってるのか？」

それには答えず、史は更なる質問を浴びせた。

「試みに問うが、東風亀の最新巻なるものを知っているか？」

「ああ、こち亀な。それならバッグの中にある。俺の愛読書だから

な」

フェイはバッグの中を漁り、一冊のコミックを史に向かって放り投げた。

「ほらよ。そいつがこち亀の最新巻だ」

史がページを捲つてみると、それはなんと絵と文字で物語りが綴られているという、かなり斬新なものであった。カルチャーショックに直面しつつ、史は更なる質問をする。

「で、では青鼻馴鹿あおつばなトナカイのふいぎゅあは？」

「青鼻馴鹿あおつばなトナカイのフィギュアは持って来ちゃいないが、ほれ、このバッグに付いているキーホルダーあおつばなトナカイが青鼻馴鹿だ。俺の好きなキャラなんだよ。どうだ、可愛いだろう」

それを聞き、史は四つん這いになってそのキーホルダーなるものに顔を近づけた。そこにあったのは、見た事もない動物を模した小さな人形であった。大きな赤い冠のようなものを被り、その冠からは角を突き出させている。その名の通り鼻が青く、確かに可愛い。史は思わず「くれ！」と叫びそうになったが、その衝動を辛うじて押さえ、新たな質問をした。

「で、ではぶらだの獏ぼくは？」

「ん？ プラダのバッグか？ そりゃあさすがに持ってないが、むかし一度買った事はあったな。リディアの嬢ちゃんにプレゼントしたんだっけ」

「プレゼントとは何だ？」

「ああ、贈り物の事だ」

「それは要するにぶらだの獏とやらをそなたがかぐや殿に贈ったという事か？」

「そういうこつた。まあ贈ったと言ってもただの入学祝いだ。そう大層なもんじゃねえ」

「むむむ……」

史は腕組みして考え込んだ。かぐやが四人に持ってこいと言った品物。恐らくは意味もなく適当に選んだのであろうが、それが全て



この男に行き当たるのである。ひとつはフェイの持つ楽器であり、ひとつはフェイの愛読書であり、ひとつはフェイの好きなキャラとやらであり、ひとつはかつてフェイがかぐやに贈ったものである。ここに至って、史は何か自分がとんでもない勘違いをやらかしているのではないかとの疑念を持った。

「そなた、ハートと言うものを知っておるか？ 心臓だと聞いたが」「そりゃまあ心臓と言えば心臓だが、ハートと聞いて心臓を思い浮かべるやつはまずいないぞ。普通は心だろ、こ・こ・ろ」

「心……、フェイの心……」

そう呟いた史は様々な感情のこもった溜息を吐き出し、ヨロヨロと立ち上がった。

「分かった。後でかぐや殿のところへ案内しよう」

そう言ってポカリと一発。フェイの頭上にゲンコツを落した。

「いてっ！ なぜ殴る！」

「やかましい、この果報者め！」

そして史は大股で部屋を出て行く。その背中に哀愁が漂っていた事に、フェイは首を傾げた。

### 第十三話

フェイが来る！ フェイが来る！ どうしよう！ どうしよう！ 史からの先触れの使者が訪れ、フェイが来る事を知ったリディアはソワソワと落ち着かなかった。

フェイには会いたい。しかしルビに対し、うっかりとフェイが謝れば月に帰るのなんのと口にしてしまったリディアである。まだ月には帰りたくない。竹取の翁や嫗、史とも一緒に居たい。でもフェイに会いたい。でも帰りたくない。でも……。

リディアは部屋の中をうろちよると歩き回り、時にヘラヘラと笑い、時に深刻な顔で頭を抱え、時に悲壮な顔で涙を浮かべ、またヘラヘラと笑い……と、さながら二十面相のようにその表情を目まぐるしく変化させていた。お陰で表情筋はすっかりとくたびれてしまい、脳の疲弊も著しく、思考も停滞を余儀なくされるという始末。結果として肝心な『どうしよう』という事に対する結論を導き出せないままフェイを迎える事となってしまった。

なので混乱したリディアはこんな対応をしてしまう。

「いよう、リディア殿下、久しぶりだな」

と、やって来たフェイに対し、一瞬身を乗り出して嬉しそうな表情を浮かべるものの、それもほんの一瞬。次の瞬間にはプイツと横を向いて、

「あんだ、だあれ？」

と言ってしまったのである。これにはフェイだけでなく史も呆れた。バレバレの嘘だが、いったん言い出したら頑なに認めないリディアである。

「あたしはかぐやよ。リディアなんかじゃないわっ！」

あくまでもそう主張する。しばらくは屋敷内の一室で、あたしはかぐやよ！ お前はリディアだ！ と言い争う声が続いた。

その部屋には現在、竹取の翁と嫗にリディア、それとやって来た

フェイと史の五人が居る。そのうち竹取の翁がリディアを弁護するように口を開いた。彼もある程度の事情は理解している。リディアを連れて行かれまいとの一心からであつたろう。

「うちのかぐやがそなたの言う、リディア殿下だという確たる証拠でもございますか？」

「証拠？ 証拠があ……」

そう問われ、フェイは腕組みしようとするも、途中で閃いてその動作を中断させた。ポンと膝を叩いて彼は言う。

「あ、そうだ。リディアの太股には三日月型のアザがあるんだった」  
「ああ、あれか」

ついうっかりそう口にしてしまった竹取の翁がしまったとばかりに口に手をやるが、これは小さな声だったのでリディアやフェイには届かなかつた。しかし隣に座っている嫗はちゃっかりと耳にし、片側の眉を僅かにピクリと上下させる。しかしこの時、リディアの方はピクリどころの騒ぎではなかつた。

「なっ、なななっ、なっ……」

座つたまま真つ赤にした顔を伏せ、リディアは大きく肩を震わせていた。これが嵐の前の予備動作であり熱帯低気圧が台風へと変じる前兆である事を、ここに居る誰もが知っている。この動作が長ければ長いほど反動は大きい。敢えて今回のこれを数値で表すとすれば八〇〇ヘクトパスカル。

ついにリディアは叫んだ。

「なんであんたがそんなこと知つてんのよっ！」

「えっ？ なんでつてお前、それはお前が……」

「あのアザはねえ！ 太股つつつてもかなりきわどいところにあんのよっ！ M字開脚でもしなきゃ見えないところにあんのよっ！ そんなところにあるアザをなんであんたが知つてゐるわけっ？」

「だからそれはお前がい……」

「いつ覗いたのよっ！」

「人聞きの悪い事を言つな！ だからあれはお前が自分で言……」

「問答無用っ！」

こうなってしまうと一切他人の言葉には耳を貸さないリディアである。一方的に捲し立てられ、まったく弁解を許してもらえないフエイであった。

「人の話を聞けーっ！」

「黙れこの変態っ！」

リディアの跳び蹴りが飛来する。フエイは咄嗟にそれを避けるが、中空で爪を立てたリディアがさらなる攻撃を放つ。フエイは部屋中を走って逃げ回った。

「だから俺の話を聞けつつの！ 五分だけでいいからーっ！」

「何げに古いネタ引つ張って来てんじゃないわよっ！ そんな事でごまかされないんだからねっ！」

二人はドタドタと部屋中を駆け回り、板の間の板が悲鳴を上げていた。その台風はやがて隣の部屋へ、廊下へと遠ざかっていき、三人が居る部屋にいくばくかの静寂が訪れる。だが、この部屋でも新たな低気圧が発生しようとしていた。

お茶をズズツとすすった竹取の嫗が湯飲みを置いた時、史はこの嫗にただならぬ気配を感じた。翁の方もそれを感じたらしく、額に汗を滴らせている。

「じいさんや？」

「なんじやい、ばあさんや？」

「きわどいところにあるというかぐやのアザをなぜお前様が知っておるのです？」

「それはかぐやの水遊びを覗……いたわけではないぞ、ばあさんや」  
「なるほど、かぐやがたまに見かけたという河童とはお前様の事だったのですね、じいさんや？」

「さ、さあ、わしゃあ最近物覚えが悪うなっけしもうてのう。よう覚えとらんのだ、ばあさんや」

「そうですか。では思い出させてあげましょう。じいさんや」

そう言っけ嫗がその懐から取りだした呆け防止アイテムとは鎖鎌

であつた。鎖がジャラジャラと音を立て、やがて嫗がその鎖を振り回し始めると、それはヒュンヒュンという音へと変化する。

「いや、それはちよつと危ないのではないかな、ばあさんや？」

「大丈夫ですよじいさんや、鎌の方は勘弁してあげますから」

「いやいやあばさんや、分銅の方もじゅうぶんに殺傷能力がつ！…

…ぐつ！……ごつ！……ぎつ！……げつ！……」

アホらしくなつた史は立ち上がり、ガ行の悲鳴を背に部屋を出た。フエイにかぐや、竹取の翁に嫗。なんだか自分だけが独りぼつちであるかのような孤独感が史の心を締め付けていた。

すつかり日も暮れた庭先で、史は風に吹かれて気分転換を図る事にした。月を見上げると、十三夜月が明るい光を地上へ落している。あそこがかぐやの故郷なのかと色々な想像を巡らせながら、史はしばらく月を見上げていた。

事態の変化に史が気付いたのはそれから間もなくの事であつた。殺氣が周囲を取り囲んでいる。史は刀を鞘から抜き放ち、何故か笑つた。あれこれ考え込むよりも今はありがたい、とそう言う事である。

史は闇に向かって声を掛けた。

「出てくるがいい」

その声に応じるように一〇人の男が現れた。その身なりから判断して、リディアやフエイと同じ月の住人だろうと史は推察したが、さらなる氣配が背後からもひとり。

「ほうほう、どうやら今回は大勢来なさつたようじゃな」

それは竹取の翁……らしき顔の男であつた。鎖鎌の分銅が彼の顔をすつかり別人へと変形させていたのである。

「ここは危ない。下がっていてくれ、竹取の翁殿」

「大丈夫。わしに攻撃を当てる事など何人たりとも出来はせん」

「いや……、そなたボコボコじゃないか」

「ああ、ばあさんは別格じゃ、まあ見ておれ」

そう言つた竹取の翁が凄まじい氣を發した。それは殺氣というに

は生ぬるい。まるで鬼気である。この全身を刺すようなピリピリとした痛みに史は覚えがあった。

「この鬼気はあの時の……、なんと天狗の正体はそなたであったのか」

「おしゃべりはここまでぞ」

月明かりの下をいくつもの閃光が走った。翁と史は地面を転がって避け、この間にも翁は転がりながら苦無く無いを投げて三人を仕留めている。感嘆の呻きを洩らしつつ、史は突進して二人を切り捨てた。残るは五人。そう思つて身構える史。

しかし既に全ての敵が地面に横たわっていた。皆、苦無く無いや吹き矢で一撃のもとに仕留められている。やがて暗闇から三人の男達が現れ、竹取の翁の前で片膝をついた時、史は納得すると同時にこの竹取の翁の正体にも予測がついた。

「そなた志能備しのびの頭領か？」

「ああ、名目上の頭領はな。しかし真の頭領はばあさんじゃ」

これほど説得力のある言葉をかつて聞いた事があるうか。史は苦笑と共に納得した。

やがてフェイやりディアも庭にやって来て、自分達と同じ創造主達の遺骸を複雑な面持ちで見下ろしていると、不意に暗闇に向かつて竹取の翁が声を発した。

「どうやらまだ隠れている者があるようじゃのう。殺気はないようじゃが、出てきたらどうじゃ？」

三人の男達が姿を現した。月明かりに照らされているそのひとりの顔を見て、フェイは驚きの声を上げた。

「コルト！ コルトじゃないか！」

そう。そこにはなんとコルト・パルタガスが立っていたのである。そのコルトがおもむろに鞘を払い、刀身を煌めかせた。

「フェイ、決着をつけよう。俺と戦え」

コルトの真意を測りかね、フェイはしばらく無言で応じたが、これには何か理由があるはずだと感じ、史に手を差し出した。

「史、刀を貸してくれ」

「そなた、刀は使えんのじゃなかったのか？」

「やつも使えん」

フェイが史から刀を受け取ると、コルトが動き出した。フェイとの間合いを保ち、半円を描くように横へ横へと移動する。ここでようやくフェイはコルトの意図を察した。コルトと一緒に居るあの二人。彼らに聞かせたくない話があるのだろうと。

コルトの意図に合わせるようにフェイも動いた。やがてコルトが突進し、上段から刀を振りおろす。フェイは水平に構えた刀でそれを受け、小声で話しかけてみた。

「お前もリディアを殺しに来たやつらの仲間か？」

「俺は違う。奴らは憲兵総監エンリケ・バルモラル大将の部下だ。俺は第二艦隊司令官ディオ・ディプロマティコス中将の命で来ている。やつらが成功しそうなら殿下をお助けせよとのな」

コルトも小声で返してきた。どうやらフェイの読みは当たったようである。二人は戦いを演じつつ話を続けた。

「あのディプロマティコスがリディアを助けると？ その魂胆は？」

「ああ、やつは自身の手で殿下を捕らえ、処刑するつもりなんだ」

「なんでそんな回りくどい事を？」

「わかるのか？ バルモラルもディプロマティコスもアップマン公爵の甥。つまりアップマン一族だ。そしてトニオーレ・アップマンに実子はない」

「なるほど……」

来たるべき、と彼らが信じて疑わぬアップマン王朝。その第二代国王の座を巡って、すでに水面下での争いが始まっているという事なのだろう。フェイは汚泥を胃に流し込まれたかのような気分を味わい、吐き気を禁じ得ないでいた。

「で、お前はそのディプロマティコスの片棒を担いでリディアを拘束するつもりなのか？」

「そついう事になるな」

「正気か貴様」

「メアリーが捕まっている」

ここでコルトは間合いを取った。

「ここまでにしておこう。貴様とはいずれ艦隊戦にて決着をつける  
としよう」

大声でそう言つて、コルトはリディアに向き直った。

「内親王殿下、お久しぶりにございます。私は殿下を拘束せよとの  
命にてはせ参じました。しかし大人しく捕まっただけですま  
い。今日のところは出直します。明日の夜。戦闘艇二個中隊にてお  
出向いに参りますのでよしなに。なお現在、時空トンネルの向こう  
側出口は完全に我が第二艦隊が制圧しておりますので、他の助けは  
無きものと思し召されたい」

そう言い残し、コルトは部下を、もとい、お目付役を引き連れて  
去つて行つた。

「ふん、コルトの野郎め、初めて俺に頼み事をしやがったな。まあ  
頼み事とは言えんか。やつめ、上手いところで話を切りやがる」

そう呟いて苦笑を漏らしたフェイが史に刀を返すと、それを受け  
取った史は青い顔で佇んでいるリディアに視線を走らせ、その理由  
をフェイに尋ねた。フェイは答える。

「お前さん、ルビのじいさんが乗っていた小型宇宙船を見たんだっ  
てな。戦闘艇二個中隊。つまり明日は武装したあれが四〇〇隻やっ  
て来るといふ事だ」

「あんなものが四〇〇隻も？」

「ああ、もはやどうにもならん」

史は啞然と佇んだ。竹取の翁もそれを耳にし、史と同じ表情で同  
じように佇んでいる。やがて翁は史にその青ざめた顔を向けた。

「明日、大王おおきみに援軍をお願いしてみようと思ふのじゃが、会つて下  
されるかのう？」

「わしも一緒に行こう」

意を決したように史はそう返した。



翌朝。二人は飛鳥淨御原宮へと向かい、大王である大海人おおあまに拝謁を願った。ほば拝謁は叶わぬものと覺悟していた二人ではあったが、以外にも大海人おおあまはそれを許した。

「汝らの話は近持より聞いた。かぐやの為に兵を貸せとな？」

大海人おおあまは片膝を立てて座り、如何にも英雄然とした物腰で二人に對した。竹取の翁を見る目は些か鋭い。

「讃岐造麻呂よ。かぐやを召し出せとの余の申し出を断つて置きながら、虫が良いとは思わぬか？」

「ははあ、それは誠にもつて……、然りながらその件に関しましてはかぐやが中々首を縦に振りませず……」

「そうか、ならば此度のそなたの申し出、余も首を縦に振らねばならぬ道理はなかうと思うが、そなたその事をどう思うぞ？」

竹取の翁は言葉を失つて平伏した。大海人おおあまはそれを見下ろして、些か意地の悪い言い方をしてしまったと自嘲気味に笑い、「まあよい」と言い置いて、次に史へと視線を転じた。

「その方が中臣史か」

「はっ」

「ふむ、お父上に似ておるな」

身を乗り出して史の顔を覗き込む大海人の目を、史は悠然と見返した。

「父とはどちらの事にござりましょうや？」

「無論、中大兄なかのおえのおきみ大王が事よ。だがまあ、それは置くとしよう」

史の母、鏡女王かがみのおおきみは中大兄から鎌足に下賜された時、既に史を身籠もっていた。と言う噂がある。大海人は史の顔を見てそれを確信したが、同時に史がそれを氣にも留めていない事を悟った。自分はいくまで中臣氏の人間である。と史の目が言っている。ならばそれはそれで確認しておきたい事があった。

「ただ、ひとつ聞いておきたい。そなたの一族、中臣家を没落せし

めたのは他ならぬ余じゃ。そなた、それを恨んでおるか？」

「むかしは。でも今はお恨み申さず。さる女性より、そんなもんは笑い飛ばして這い上がってやるくらいの気概を持てと言われました故」

「ふむ、その女性とはかぐやが事か？」

「さようにて」

「そなた、かぐやを好いておるのか？」

「さようにて」

「ではいずれ、あのかぐやを伴侶となす所存か？」

「出来ますれば」

言葉短く毅然と答える史に、大海人は少し意地悪い質問を試みたくなった。

「ふむ……、では聞くが、実は余もあのかぐやが事は気に入っておつてな。そなたが手に入れたとして、そのかぐやを余に献上せよと申さばそなた、どうするぞ？」

「お断り申し上げます」

「ほほう、出来るかな？ 余がその気になれば兵を差し向け奪い取る事も出来るのじゃぞ」

「そのようなものは立ちどころに蹴散らし、お上と刺し違えてでも守り参らせる所存」

無礼者め と色めき立って刀の柄に手をかける近持達を手で制し、大海人は豪快に笑って見せた。

「こやつめ、言いおるわ」

久しぶりに痛快な気分を味わった大海人は上機嫌であつた。

「良かるう。汝らに兵二〇〇〇を授けようぞ」

「ははっ、ありがたき幸せ」

「ただし、条件がある」

そう言つて、大海人は二人の反応を楽しむように眺めた。緊張の色を隠せぬ竹取の翁に対して悠然と構える史。大海人の見るところ、史はこの条件を正確に洞察しているようであつた。その上でのこの

態度。大海人もまた、史の返事に確信を持った。

「史よ。この騒動が落着いた暁には余に仕えよ」

「ははっ、我、非才の身なれど、喜んでお仕え申し上げます」

「うむ、ではそなたの父のように、余もそなたに藤原姓を授けよう。これよりは藤原史と名乗るがよいぞ」

こうして謁見は終了した。後世、藤原不比等として名声を馳せ、藤原氏の権勢を盤石たらしめるに至る史の霸道はこうして始まるのであった。

「どうした、竹取の翁殿？」

あすかのきよみはらのみや

飛鳥浄御原宮の門前で、竹取の翁が地面に片膝をつき、史に向かって臣下の礼を取るように頭を下げたのを見て史はそう言った。翁はそれにこう答える。

「今日は感激いたしました。これより先、我が一族をあげて史様の霸道に協力させて頂きまする」

「よろしく頼む。しかし先ずは今夜の事を考えるのが先決だな」

史はそう応じ、竹取の翁の肩に手を置いた。

## 第十四話

中臣史改め藤原史と、竹取の翁こと讃岐造麻呂さぬきのみやつこが兵を整え、屋敷への帰途へついていた頃、フェイはリディアに蹴り起こされた。

「あんた、いつまで寝てんのよっ！」

「ん……なんだ、もう朝か？」

「昼よっ！」

せつかく会えたというのにずっと放置され、おかんむりのリディアなのであった。風船のようにぷくつとホッペを膨らませ、仁王立ちとなつて寝ぼけ顔のフェイを見下ろしている。

「あんた、昨晚あれからどっか出かけてたみたいだけど、どこ行つてたのよっ？」

「ああ、グリフィノスのおっさんに連絡を取りたい事が出来たんだ。ちよつと宇宙までひとつ飛び行つて来た。帰つて来たのは明け方なんだよ」

だからまだ眠いのだ、とフェイはそう主張したかったのだが、リディアはそこには留意してくれなかったようである。

「時空トンネルだとか言う出口は封鎖されてるんじゃないかな」  
「？」

「ああ、しかしこういう事態は予測してたんだ。その時の為の連絡法は確保してたさ」

「まあいいわっ、出かけるからとつと用意なさいっ！」

「やれやれ」とフェイは眠そうに目をこすつてモゾモゾと起き出した。簡単な朝食ならぬ昼食を取り、その後、引きずられるようにフェイが連れて行かれたのは葛城川。と言つても、史とよく行くあの崖の上ではない。そこへフェイと行くのは史に悪い気がしたためらわれたのである。今回はリディアがいつも泳いでいた場所であった。「でっ？ あんた結局、何しに来たわけっ？ 昨日も全然肝心な事は話さなかったしっ」

リディアの膨れっ面は未だ継続中であつた。よく顔が疲れないもんだとフェイは思う。何度かそのほっぺを人差し指で突いてやりたい衝動に駆られたが、過去にそれをやって股間を蹴り上げられた事があるフェイはそれを思い止まった。それにそんな事をしている場合でもない。リディアの言う通り、肝心な事を話さなければならないだろう。

「そつだな、じゃあ今から話そう」

いつになく深刻な顔を作ったフェイを見て、リディアのホッペが通常の大きさに戻った。

「お前、月へ帰りたいのか、帰りたくないのかどっちだ？」

「あ、あたしは……」

「実を言つとな。俺は最初、お前がここに居たいというなら無理に連れ帰るつもりは無かつたんだよ。グリフィノスのおっさん達には悪いと思つたがな」

「そ、それつてフェイはあたしに帰つてほしくないつて事？」

「いや、そう言う事じゃなく……」

「そつじゃないっ！」

リディアのホッペがまた膨らんだ。やれやれ、とフェイが肩を竦める。

「だから違つと言つてゐるだろ。俺はお前の意志を尊重したいと思つただけなんだよ。だがな、よく考えてみてそれも変わった。お前は内親王だ。そのお前が考えなきゃならん事はなんだ？ 自分の幸せか？ それとも民の幸せか？」

「そつ、それは……」

リディアは返答に窮した。言われてみれば確かにその通り。我が儘が許される身分ではない。しかしそんな議論など無用の長物と化してしまつたこの現状。もはや帰りたい帰りたくないなどと選択出来る立場ではなくなつてしまつてゐる。

その事にフェイは小さな溜息をついた。

「だがまあ、今は状況も変わったな」

「そうね」

リディアも釣られるように溜息を吐き出す。

「戦闘艇二個中隊。とてもかなわないわ。史達、援軍を連れてくるって出かけたけど、この時代の兵がいくら集まったってかないっこないもの。あたし……、どうせ死ぬのよ」

生を諦めたかのようなその台詞は、だが諦めきれないという色彩を帯びてフェイの耳に届いた。リディアの両目ににじむ涙もその事を物語っている。

「ああ、そうなるかもな。だがお前、唯々諸々とやつらに殺されてやるつもりか？ どうせ死ぬなら戦ってやろって気にはならないか？死ぬその瞬間まで民の為に生きる努力をしなければならいとは思わないか？」

フェイはそう言ってリディアの両肩に手を置いた。

「もしお前が戦うつてなら俺も一緒に戦ってやる。生涯、俺はお前を守ってやる。お前が死ぬ時は俺も死ぬ時だ」

「フェイ……」

リディアの涙がこれまでは別の輝きを放ちつつ頬を伝わった。

生涯、俺はお前を守ってやる この言葉に震えたのである。リディアはこの言葉をプロポーズと受け取った。受け取ってしまったと言っべきか。

「わっ、わかったわっ！ あたし、戦うわっ！ 月に帰るわっ！」  
猛然と立ち上がり、リディアはそう叫んだ。

そっだ。月に帰ろう。例えば処刑される事になろうとも、死ぬその瞬間まで生を諦めないでいよう リディアは改めてそう心に誓った。

「よし、その意気だ」

フェイも立ち上がってリディアの頭を撫でた。普段なら子供扱いするなと怒り出すリディアだが、今回はやけに素直に撫でられている。その頬にはほのかな赤みすら差していた。

「後でがっかりさせるのもなんだから言いたかなかったんだが、実

のところ勝算はゼロじゃない」

「ゼロじゃない？」

「ああ、上手くパンティーが乾けばだがな」

「はあ？ パンティーが乾く？ 何言ってるんのあんだ？」

「ああ、別に何でもない」

口を濁すフェイにリディアはそれ以上の追及はしなかった。そんな事よりもフェイが言った勝算があるという言葉の方が遙かに重大である。それは例え小さくても生きる希望が持てるという事である。そうになった時の二人の未来に思いを馳せ、リディアは声を弾ませた。

「ねえねえ、でも勝算がゼロじゃないって事はあたし達、生き延びられる可能性があるって事よね？」

「ああ、その通りだ」

「そうになったら色々と忙しくなるでしょうねっ」

「そうだな。お前は女王になるかもしれないな」

「でもねでもね、あたし、新婚旅行くらいは行きたいわっ」

「新婚旅行？ お前、誰かと結婚する予定でもあるのか？」

「え？」

「なんだか雲行きが怪しい。」

「あんださっき『生涯、俺はお前を守ってやる』って言わなかった？」

「ああ、当然だろ。俺はお前の臣下だからな」

「臣下……」

俯いたリディアの肩がワナワナと震えだした。

紛らわしい言い方をしたフェイが悪いのか、勘違いした自分が悪いのか。でもそんな事はどっちでもいい。このやり場のない怒りを晴らす絶好の物体がやつの股間にはぶら下がっている。

「いやあ、それにしても俺は嬉しいよ。お前がよく月へ……って、どうしたリディア？」

「べっ、別にあんたの為に月に帰るんじゃないんだからねっ！」

これまでにない強烈な蹴りがフェイの股間にめり込んだ。

フェイとリディアが戻ってみると、竹取の翁の屋敷周辺は弓や矛を持った兵で溢れかえっていた。

リディアがプンプンと大股で、フェイがヒヨコヒヨコと内股で、それぞれが屋敷の門を潜ったのは、時刻も差し迫り、斜陽が西の空を赤々と染め始めた頃であった。東の空では月がうつすらと淡い輝きを放ち始めている。

その月周辺に異変が見られたのは、それから間もなくの事であった。沈みきった落陽がその周辺にのみ赤い残照を残し、東の空がもはや夜空と言つてもいい闇を備え始めた頃。その闇に無数の小さな光点が浮かび上がった。

「あつ、あれは何だ？」

それを見て兵達が響めく。

その光は徐々に大きくなり、その数も次第に増していく。その神秘的な光景を兵達は呆然と見上げていた。その存在を知っていた史ですら驚きを禁じ得ないでいるのだから、兵達の驚愕は推して知るべしであろう。

やがて、光点とも言えぬ大きさとなつたその輝く物体は、付近一帯の上空を覆い尽くした。

兵達は最初、敵が空からやってくると聞いてまさかと笑つたが、そのまさかが現実となつて訪れた時、笑つた事を後悔する余裕すらなくパニックに陥っていた。

「な、何をしておるか！ 矢だ！ 矢を放て！」

各処で怒声が上がリ、次いで数百にも及ぶ矢が夜空に向かって放たれる。しかしそれらの矢は敵には届かない。矢は放物線を描いて地上へとその進路を変え、光る物体はその遙か上空を嘲笑するかの如く浮かんでいる。

矢が届かなければこちらからの攻撃は不可能であった。愕然と空



を見上げる者、逃げ惑う者、恐慌状態へと陥って矢を放ち続ける者。各処の組頭達は軍としての秩序を維持する事に奔走させられていた。やがて敵に動きがあった。それは言うなれば威嚇射撃であろう。

しかしその破壊力はこの時代を生きる人々を戦慄させるにじゅうぶんであった。目を覆わんばかりの閃光が走り、雷鳴の如き轟音が響く。暗闇に目が慣れていた兵達は、その視力を取り戻すのに数十秒を要したが、やがて開けたその視界に映ったものは、空を赤々と焦がす山火事であった。

それを見た瞬間、兵達は驚愕に青ざめた。火事ではない。明るく染まる夜空が山の形を浮き彫りにしているが、その山が彼らの見知った原形を留めていなかったのである。頂上付近が完全に吹き飛んでなくなっている。

敵のたった一隻が放った一撃でこの威力。兵達は完全に戦意を喪失した。

その彼らの頭上に声が響く。

「半時待つ。それまでにリディア殿下の出頭なくば無差別攻撃を敢行する。繰り返す。半時待つ。それまでにリディア殿下の出頭なくば無差別攻撃を敢行する」

この声は屋敷内にもじゅうぶんに届いた。

「おじいちゃん、おばあちゃん、あたし、行きます。今までありがとう」

竹取の翁、嫗を前にリディアは頭を下げた。翁は引き留めようとするがリディアは首を横に振る。

「大丈夫よ、おじいちゃん。さっきも言っただけあたし、死に行くわけじゃないの。自分の未来を勝ち取る為に行くのよ。きっと勝ってみせるわ」

果然と言葉を失う翁に代わって嫗が口を開いた。

「行つてらっしゃい、かぐや」

その言葉に翁は驚く。

「そんな、ばあさんや」

「あなたは黙ってなさい、じいさんや」

「はい、ばあさんや」

嫗に凄まれ、翁が引き下がると、嫗は再び優しい笑顔をリディアへ向けた。

「あなたは女性ですからね。何れは何処かへ嫁いで行く身と覚悟しておりました。だから此度は月へ嫁いで行くものと思つ事にしましょう」

「ありがとう、おばあちゃん」

「うつつ……、かぐやよ。辛い事があつたらいつでも帰つて来るんじゃないぞ」

などと翁はやや場違いな事を言い、またまた嫗に睨まれる。

「ありがとう、おじいちゃん」

リディアはそう言つて改めて二人に頭を下げた。

フェイはこの時、屋敷の外でかぐやを待つていたが、そこへ血相を変えた史がやつて来た。

「かぐや殿は？」

「ああ、今は中でじいさんばあさんと話している」

「で、どうするつもりだ？」

「俺達は行くよ。行かざるをえんだろつ。でないとお前達まで巻き添えにしてしまう」

「わしは死など恐れん。最後の一兵になろうとも戦う所存だ」

「史、お前が自分の矜持の為に死を選ぶのはかまわん。しかしそれに兵達を道連れにする事は愚行の極みだと知れ。冷静に考えればその分のからんお前ではなからう」

史は絶句した。返す言葉がない。代わつて史はフェイの胸ぐらを掴んだ。

「な、ならば誓え。わしの代わりにかぐや殿を守つてみせると。必ずかぐや殿を幸せにしてみせると。神掛けて誓え！」

「……ああ、誓おう」

幸せはちよつと違つぞと思つたフェイだが、口に出してはそう言

った。史の男泣きの涙がそれ以外の言葉を許さなかったのである。

リディアが屋敷から出てきた時、史は涙を拭い、リディアに向かって笑顔を作って見せた。

「かぐや殿。わしはそなたの言葉で生き返る事が出来た。必ずこの国で這い上がって見せる。そなたもそなたの国で頑張ってほしい」

「ええ、頑張るわ。あたし、こんな状況でも全然死ぬ気がしないもの。きつと何とかなるわ。何とかなるって思えば何とかなるものよ。だからあなたも頑張ってね」

リディアらしい台詞を言い、彼女もまた笑って見せる。

竹取の翁に嫗、史の三人に見送られ、リディアとフェイが屋敷の門を出ると、戦闘艇が一隻着陸した。ハッチが開き、降りてきたコルトがリディアに向かって敬礼を施す。

「では内親王殿下。お身柄を拘束させていただきます」

リディアとフェイが連行され、ハッチが閉じられると、戦闘艇は地面を離れ、上昇を始めた。やがてそれは光点となって夜空を駆けていく。

史たちはそれをいつまでも見送っていた。

「きつとかぐやとはまた会えますよ。なんだかそんな気がします」

竹取の嫗が予言者のように言い、竹取の翁と藤原史は静かに頷いたのだった。

## 第十五話

時空トンネルを抜け、現代へ戻ったフェイとリディア。彼らが連れて行かれたのは第二艦隊の旗艦である戦艦ホクトノーケンであった。

二人は手錠で両手を拘束された上に背後からビームライフルを突きつけられ、第二艦隊司令官ディオン・ディプロマティコス中将が待つ司令官室へと連行された。

「これはこれは内親王殿下。着物がよくお似合いでございますな」

お世辞と言うには不快な声色であり、リディアの背筋をかつて無い悪寒が走った。その獲物を見るような視線も、意味ありげな笑顔も、脂ぎって太った体軀も、何もかもがリディアには野卑に見える。リディアが無言で顔を背けると、ディプロマティコスはくくくつと笑った。その気の強さがたまらんと言わんばかりの笑いである。

「殿下には私が栄達する為の贄となっていたいただきます。その前に、少し楽しませていただくとしましょうか。くくくくく……」

淫猥な笑いを浮かべつつ、ディプロマティコスはお楽しみみの獲物からコルトへと視線を転じた。

「ご苦労だったなパルタガス准将」

無言で僅かに頭を下げるコルトに向かって、ディプロマティコスは新たな命を発する。

「フェイの方には用はない。そう言えば貴官達は同期のライバルであつたな。今ここでフェイを射殺するという栄誉を貴官に与えよう」

「私にフェイを殺せと？」

「ああ、さつさとやりたまえ」

躊躇するコルトにディプロマティコスが不快な声を浴びせた。

「私に逆らえばメアリーが命を落す事になるが、良いのかな？」

コルトは心の中で齒軋りした。かつてはこの男を人質にして軍務

省内に捕らわれているメアリーとの身柄交換を考えた事もあったが、ディプロマティコスはその自分の指示がなくともコルトが造反した瞬間、メアリーを殺せと命じているようなので、それは危険であった。

この魔法の言葉に抗しきれずコルトは銃を抜き、その銃口をフェイへと向けた。向けざるをえなかった。

さすがのフェイも額に汗を滴らせるが、コルトを見返す目はどこか同情的であった。

引き金にかかるコルトの指が、数ミリ単位で躊躇い動きを見せていると、艦橋の通信士官より司令官室へ報告が入った。スピーカーから通信士官の声が流れる。

「何やらおかしい電文が宇宙を飛び交っているようです。いちおうご報告をと思ひまして」

「おかしい電文だと？」

「はい、何やら平電文で、パンティーは乾いた」と

コルトは怪訝そうに細めた目をハツと見開き、フェイの顔を凝視した。そのフェイがニヤリと笑って頷く。そして叫んだ。

「リディア、伏せろ！」

「いやよっ！」

フェイは背後で自分に銃を突きつけている兵の腹部に肘打ちを叩き込み、苦痛で崩れたその兵の顔面へトドメの膝蹴りを食らわせた。その時、リディアの方は前屈姿勢となり背後の兵の股間をかかとで蹴り上げていた。中々に高度な技だが、こと股間を蹴り上げる事に関してはプロ並みの技倆を持つリディアである。相手の兵は一撃で悶絶した。

フェイに向けられたコルトの銃口は、この事態の急変に呆然となすディプロマティコスへとその向きを変えていた。

「ど、どういう事だパルタガス准将。メアリーがどうなってもいいと言っのか？」

コルトはこの時「ククク……」と低く笑った。笑わずにはおれな

かった。

「パンティーは乾いた　と、そういう事らしいですよ、閣下」

理解しきれないで居るディプロマティコスのかめかみへ銃口を突きつけ、その耳へ嘲笑を突きつけた。

「さて、あなたは我々の人質です閣下。一緒に来ていただきましようか」

ディプロマティコスを入質に、三人はコルトの旗艦バリューゼへと向かう。彼らがバリューゼへたどり着いた時、第二艦隊の艦艇はコルトの分艦隊を残して全て消えていた。この事態と、この時接近中であつたグリフィノス率いる近衛艦隊に恐れをなし、司令官であるディプロマティコスを見捨てて逃げ去ってしまったのである。

月でこのコルト造反を聞いたディプロマティコスの部下は、メアリーを殺害せんと監禁している部屋へと向かつたが、そこにメアリーの姿はなく、あちこちに張られた禁煙ステッカーを唾然と見つめたという。

この後、コルトはディプロマティコスを宇宙へ放り出した。その速度と軌道から、彼は地球を数周した後、大気圏で燃え尽きるであろう。メアリーの事への、これがコルトの報復であつた。

その後、グリフィノスの近衛艦隊がコルトらに合流し、さらにその五時間後、ケレス駐留艦隊司令官リー・グレイ・アシュトン中将が高速艦艇を選びすぎり、ケレス駐留艦隊の半数に当たる一万五

隻の艦艇を引き連れて合流した。このアシュトンは優秀な男ではあるが、愚直な事で有名な初老の軍人で、その性格が災いして軍首脳部より忌避され、ケレスへ左遷されたという経歴を持つ男である。中々に頼もしい味方であつた。

更に現在、メアリーを救出したスカル・ファン・ロペス大尉は、メアリーと共に元フェイが指揮していた旧トリニダード艦隊でこちらへと向かつている。これは現在、グリフィノスの盟友である艦隊参謀レイ・ロッキーパーテル大佐が指揮していた。現司令官、アップマン派のハロ・ベガス・ロバイナ准将は置いてけぼりを食らい。月

で無然とそれを見上げたという。

リディアにフェイにコルト、そしてアシュトンの四人はグリフィノスの旗艦、グラントキャラバツシュに移乗し、そこで一堂に会した。

ここでコルトはリディアに対して頭を下げ、銃を差し出した。

「内親王殿下。私ことコルト・パルタガスはあなたのお父上であられるアレクサンドル陛下を弑し奉った者。つまり殿下にとっては親の仇です。どうぞこれをお使い下さい」

このコルトの行為にリディアは憤慨したように声を尖らせた。

「あんたねえ。戦場での事をあたしがいちいち根に持ってると思ってるのなら、それはあたしに対する侮辱ってもんよ。どうしてもこのままじゃあなたの気が済まないってんなら、これからはあたしの役に立ってみなさいよねっ」

このリディアの言葉にコルトは銃をしまい、片膝をついて跪いた。「はっ、これよりは我が忠誠心の全てを捧げ、殿下のおん為に働かせていただきます」

これを見たグリフィノス、アシュトンの二人も前に出て跪き、改めてリディアに忠誠を誓う。それを見渡して満足そうに頷いたりディアは、ふんぞり返ってフェイを睨み、コルトの横を指さした。お前もここで忠誠を誓えという事であろう。へいへい、と声に出し、フェイはその列に加わった。

「これよりは我が忠誠心の以下省略。これでいいか？」

と、やっってしまうところがフェイの大人げないところであろう。

この後、総司令官を誰にするかという話になった。普通なら階級が中将のアシュトンで決まりのはずだったが、彼はそれを辞退し、グリフィノスを推した。

「内親王殿下をご推戴申し上げるという計画を立案し、その中心となってここまで苦労してきたのはグリフィノス准将であり、自分はその尻馬に乗ったに過ぎぬ。ここに至って自分が総司令官たるの地位を得るわけにはいかぬ」

「いや、それでは軍での序列が……」  
グリフィノスが翻意を促すも、頑固なアシュトンは頑なに固辞する。

アシュトンの言い分も分からなくはない。しかしグリフィノスが総司令官では准将の下に中將がつくという、軍の序列としてはおかしいことになる。

と、ここでリディアはポクポクチーンと閃いた。

「そうかわつ、こうしましょう。戦時特例昇進よっ！」

戦時特例昇進とは、戦時における緊急時などで一時的に昇進させる措置の事である。これによりグリフィノスは大將に昇進し、内親王リディア・チャーチワードンの名において総司令官に任命された。「でつ、次はコルトね。あんたは中將つて事でつ」

こうしてコルトも中將に昇進。これには指揮系統的に大した意味はない。リディアの気まぐれ言ったところであろう。

「でつ、次は……」

リディアは次にフェイへと視線を移した。睨みつけたと言った方が適切であろうか。あの勘違いをまだ根に持っているようである。リディアの口元がニヤリと笑った。

「あんたは二等兵ねっ」

「おいっ、どこが戦時特例昇進なんだよ！ めちゃくちゃ下がってんじゃないか！」

「んーとねっ、戦時特例降格つてやつう？」

「ねえよ！ んなもんねえよ！」

フェイの異議申し立ても虚しく陣容は決した。

近衛艦隊司令官アレン・グリフィノス大將。ケレス駐留艦隊司令官リー・グレイ・アシュトン中將。分艦隊司令官コルト・パルタガス中將。分艦隊司令官フェイ・トリニダッド二等兵。その総艦艇数、約三万隻。

この陣容は内親王リディア・チャーチワードン拳兵の報と共に発表され、アップマン派の將兵達を震え上がらせた。その艦艇数とは



もかく、指揮する者達は宇宙最強の四人と言っても過言ではない。月でもリディアらに対する討伐隊が組織され、五個艦隊、約一五万隻の大艦隊が月を進発するも、士気は今ひとつ上がらなかった。

メアリーを乗せた、司令官代理レイ・ロッキーパテル大佐が指揮する旧トリニダッド艦隊が到着すると、フェイとコルトはそれぞれ自分の艦隊へと戻る事にした。

小型艇のある後部ハッチへと向かう途上、フェイとコルトは肩を並べて歩く事となった。

「フェイ、貴様には借りが出来たな。この借りはいつか返させてもらおう」

「ん？ ああ、副官の事か？ 助けたのは俺じゃない。俺じゃないが、まあ返すつてなら遠慮せず受け取っておこうか」

「ふん、そうか、じゃあ貴様には招待状でもプレゼントしよう」

「招待状？ なんのだ？」

「俺はこの戦いが終わったら、メアリーと結婚しようと思う」

「止めとけ。あ、いや、結婚をじゃないぞ。お前、戦いの前にそう言う事を口にしたやつがどうなるか知ってるのか？ 死亡フラグが立つちまうぞ」

「ふん、それもそうだな。しかし、そういうお前の方こそどうなんだ？」

「どうなんだとは？」

「殿下との事だ。まさかお前、殿下の思いに気付いてないって事はないよな？」

「さすがにそこまで鈍感じゃないが……、しかし相手は内親王だぞ。気付かないフリをしてなきゃ逃げられなくなるじゃないか」

「お前がいつまで逃げられるか、楽しみに見ている事にするよ。しかし、もしそうなってお前が主筋なんて事になったら、俺はきっと謀反を起こすだろうな」

「ふん、その時は遠慮無く叩きつぶしてやるよ」

こうして二人は別れた。

フェイは戦艦フェロモンへと移乗する。実に一年ぶりの乗艦であった。

「フェロモンよ！ 私は帰って来た！」

これまでにない感慨がこの台詞に魂を吹き込んでいた。

艦橋へ上がったフェイをレイ・ロッキーパテルが出迎える。こちらも一年ぶりの再会である。

「やっぱりこの艦隊はあなたが指揮しませんとね。期待してますよ二等兵殿」

「プププッ」とドロシーが嘖き出す。フェイはそのドロシーの巨乳をムニヤリと驚づかみにし、悲鳴を上げる彼女を背に司令官席へと座った。やはりここからの眺めは最高である。

「フェロモンよ！ 私は帰って来た！」

再びはそう叫んだフェイの後頭部にドロシーの軍靴が迫った。

フェイが負傷兵と化していた頃、コルトとメアリーは戦艦バリューゼで再会を果していた。コルトの顔を見た瞬間、メアリーの目に涙が溢る。

「私は汚されてしまいました。もう閣下の寵愛を受ける資格などないのですわ」

そう言って泣くメアリーをコルトは優しく抱きしめた。

「そんな事はない。俺にはお前が必要だ」

「でも……、でも……」

「メアリー、この戦いが終わったら……、いや、今は言っまい」

苦笑と共に言葉を閉ざしたコルトは、メアリー唇に唇を重ね、むさぼるように舌を絡ませた。

敵の大艦隊が前面に展開ししたのは、それから間もなくの事であった。だが展開しただけで攻め寄せてくる気配はない。皆はそれぞれの旗艦でスクリーン越しに軍議を開いていた。しかしグリフィノスの旗艦に乗り込んでいるリディアはそんなものは無用だとばかり

りに叫ぶ。

「んなもん、突撃よ突撃っ！ 突撃あるのみっ！」

「殿下、軍議に口出しはなりませぬぞ」

同じく乗り込んでいるルビ・ラモン・アロネスがそうが窘めるが、アレン・グリフィノスは言う。

「いや、面白いかもしれん。どう思うみんな」

「賛成ですな。突撃に最適なポイントもいくつか見付けております」  
コルトがそう言うて賛同すると、アシュトンも頷いた。

「敵は戦意に乏しいように見受けられる。ここは時をおかずの力攻めが上策であろう」

「ふむ」と頷いたグリフィノスがフェイにも問う。

「で、トリニダッド二等兵の意見はどうだ？」

「二等兵二等兵言っなっ！ まあ正面からの突撃もいいが左翼の艦隊に乱れが見える。左翼からの側背攻撃も面白いと思うがな」

「よし、では各々の作戦案を取り入れ、細かいところを詰めよう」と言ってもそれはほんの一〇分で済んだ。力攻めの速攻。要するにそう言う事である。作戦もへったくれもない。

敵一五万に対し、三万のリディア軍は突撃を敢行した。

左翼側面からフェイ・トリニダッドの艦隊約五〇〇隻。中央にアレン・グリフィノスの艦隊約五〇〇隻とリー・グレイ・アシュトンの艦隊約一万五〇〇隻。右翼側面からコルト・パルタガスの艦隊約五〇〇隻。

彼らは猛然と敵艦隊に向けて襲いかかった。荷電粒子砲の閃光が敵の艦列に穴を穿ち、その空いた空間へと突入する。

「進め進めーっ！ もうどんどん行っちゃえーっ！」

リディアが檄を飛ばし、近衛艦隊の速度が更に上がる。ルビは顔を青くしていた。前面はもちろん、右を見ても左を見ても、上を見ても下を見ても、全部、敵、敵、敵である。ルビからしてみれば世にも恐ろしい光景であった。総司令官であるグリフィノスに諫めてもらおうと思ったのだが、彼は「こいつはいい。今回、俺は何もし

なくてよさそうだぞ」と笑っている始末。ここは老臣が諫めねばなるまい。

「でっ、殿下、深入りしすぎですぞ、ここは一度下がった方が！」

「うるさいわねっ！ あたしの辞書に後退なんて文字は載ってないのよっ！ まあ類語辞典には載ってたかもしれないけどねっ」

「では類語辞典もぜひ参考にして下されーっ！」

「うるさいっつってんでしょ、ルビっ！ あんたは黙って漢字の上にチョコンと表示されてればいいのよっ！」

グリフィノスも言う。

「ここは殿下の言う通りですぞ、ルビ殿。ここで下がっても何の益もない。逆に敵の攻勢を呼び込むだけでしょう」

ルビは沈黙した。その内、リディアが気付くとその姿まで見えなくっている。

「あれ？ ルビはどこ行つたの？」

「はあ……」

ひとりの下士官が申し訳なさそうに報告した。

「我は振り仮名に非ず　そう仰られて自室へと引きこもられました。何やら二ートになるとかなんとか騒いでおりましたが……、呼んできませんようか？」

「別にいいわっ、白髪の二ートなんて見たかないわよっ」

無情に言い捨ててリディアは指揮へと戻った。

この頃、フェイ、コルト、アシュトンの艦隊も善戦していた。アシュトンは深入りこそしていないものの、上下に広げた艦隊を柔軟に動かし、敵を締め上げて分断し、その艦列をズスタに引き裂いていく。その老練さは横で見ていたグリフィノスも思わず「お見事」と唸ったほどである。

そしてコルト。彼はこの四人の中では一番突撃力に秀でた存在であつたろう。突進しつつ敵の弱点を見極め巧みに軌道修正し、敵の内部を引っかき回している。

フェイは左翼の敵に密着し、巧緻を極めた砲撃で確実に敵を仕留

めつつ自らは決して隙を見せない。恐らく四人の中で一番自艦隊に犠牲が少ないのがフェイであろう。さらにフェイは暗号による心理作戦を実行した。敵艦隊に向けてパンティーが滑ったのパンティーが転んだのと様々な暗号を送りつけたのである。これによって疑心暗鬼に陥った敵艦隊は各処で同士討ちを始め、その内、本当に寝返って来る艦隊もあらわれ始めると、敵艦隊は完全に瓦解した。

この時、グリフィノスに朗報がもたらされる。それは王都にいる仲間が武力蜂起し、各処の制圧に成功しつつあるとの報であった。これは撤退の意志を見せ始めていた敵が帰る場所をなくした事を意味する。この敵が窮鼠猫を噛むの例えを実行に移す前に、グリフィノスは降伏勧告をする事にした。この降伏勧告を拒否し、徹底抗戦を叫んだのはふたつの分艦隊のみであり、その艦隊がこれまで仲間だった艦隊に葬り去られると、宇宙での全戦闘は終わりを告げた。

やがて王都も完全に制圧され、トニオーレ・アップマン公爵自害との報がもたらされた事により、みなは全てが終わった事を悟る。何はともあれ戦いは終結した。七時間という長いようで短く、短いようで長い戦闘がようやく終わりを告げたのである。

月へと凱旋したりディア達を民衆は歓呼の嵐で出迎えた。

リディアにとって、実に一年ぶりの帰星<sup>きせい</sup>であった。

## エピソード

その後、長老員議会も復活し、アップマン公爵が擁立したセレムト王の廃嫡が可決されると、リディアは女王となる事が正式に決定された。

リディアもしばらくは多忙の日々が続いていたが、戴冠式を終えた翌日、リディアはズカズカと戦艦フェロモンへ乗り込んできた。

「フェイ、地球へいくわよっ!」

「地球へ? なにに?」

「決まってるじゃないの。史とおじいちゃんとおばあちゃんに、勝利の報告よっ! さあ、トリニダッド艦隊、出動!」

「アホか。そんな理由で艦隊や戦艦が動かせるかっ! 艦載小型艇でじゅうぶん事足りるだろう。で、ちゃんと報告はしてきたのか?」

「うんっ!」

「ちっ、しゃあねえなあ」

こうしてフェイとリディアは月を出発した。したのだが……。

「おい、何か電波が飛び交ってるんで傍受してみたらこの俺が女王誘拐犯とか何とか言ってるんだがどうなってんだ?」

「えゝ? だってちゃんと置き手紙してきたのに!」

「置き手紙だあ? んなもん報告とは言わねえんだよ。そう言うのを事後報告つつんだよ。で、ちゃんと分かりやすいところへ置いてきんだろっな?」

「……あ、引き出しに入れたままだわ。しかも鍵かかってるわ」

「アホか つ!」

「ごめんちゃい」

「戻るぞ! 今すぐ戻る!」

「ダメよっ! 戻ったらもう二度と地球へ行けなくなるもん。みんなうるさいんだもん。行かせてくれないんだもん!」

「あ、てめえ、ワザとだな? 確信犯だろ?」

「だって仕方なかったんだもん」

「帰るぞ！ 今すぐ帰る！」

「そんな事したら許さないんだからねっ！ そんな事したらフェイに誘拐されたって言っただけでやるんだからっ！」

「わかったよ。行きやあいいんだろ、行きやあ」

こうして聞き分けのいい運転手を確保したりディアは、これ以降も度々地球へ行く事となるのであった。

さて、その後リディアとフェイがどうなったのか。

それを今ここで語るのは止めておく事にしよう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3926v/>

---

KAGUYA ~ 別にあんたの為に月に帰るんじゃないんだからねっ！ ~

2011年9月6日03時29分発行